

明治二十年二月十四日 海軍省 2782

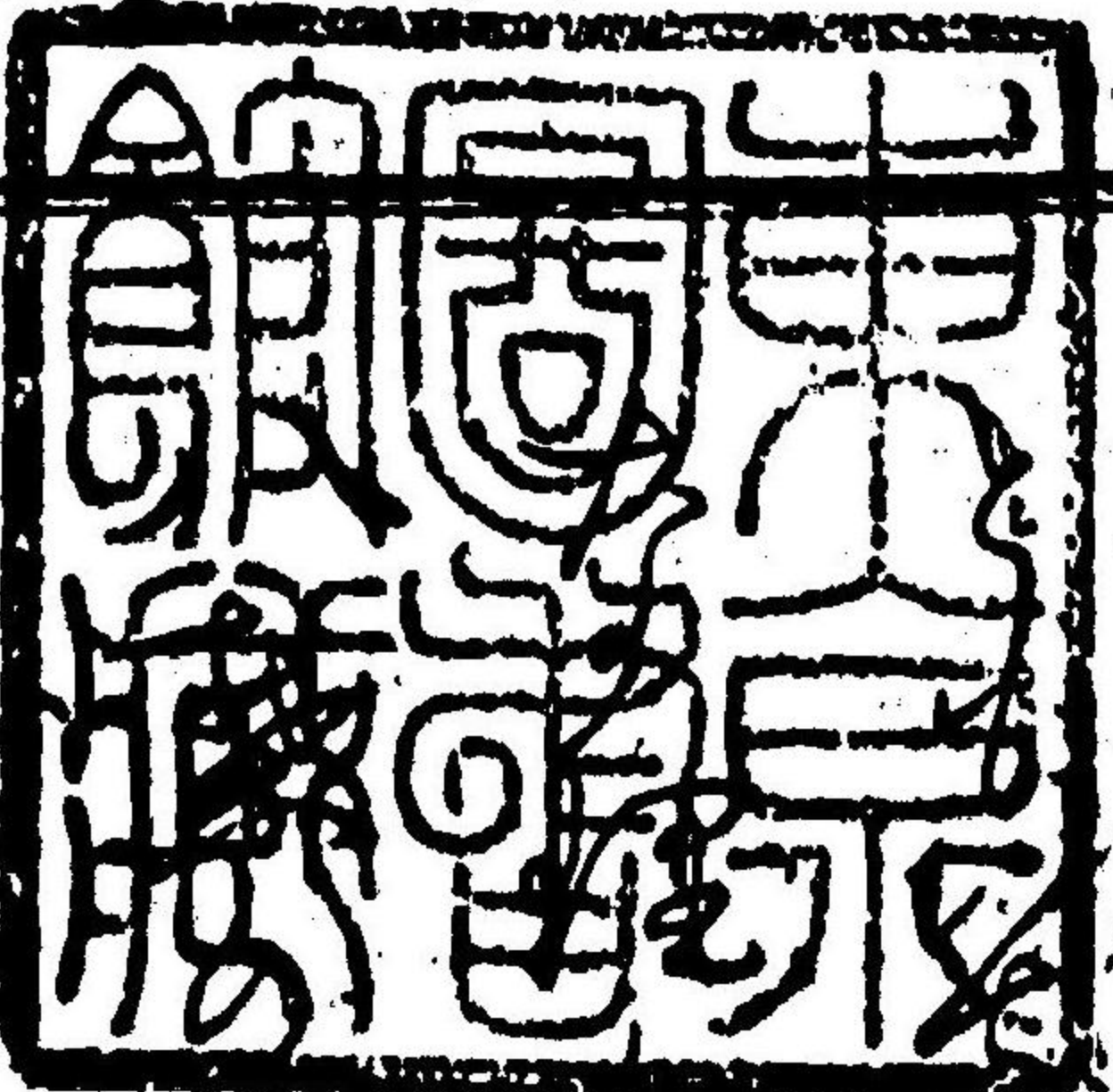
高  
—— 中野の海軍省

—— 中野の海軍省

—— 中野の海軍省

—— 中野の海軍省

—— 中野の海軍省









あはれなる中なるものなり  
と云はれし程なるものなり  
善の妙なるものなり  
身中の深なるものなり  
心の深なるものなり

あはれなるものなり  
と云はれし程なるものなり  
善の妙なるものなり  
身中の深なるものなり  
心の深なるものなり

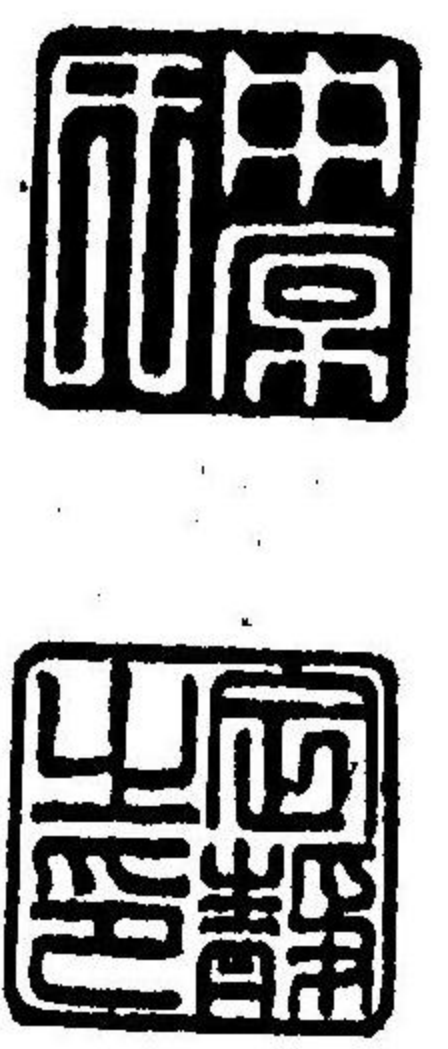


之治始なり まの末

正位權中納言實順卿

素

從五位上行刑部少丞兼肥後守中原定靜謨書



吾高祖大士の弘法也。  
出於洪大慈愍心矣。當  
是時也。媚嫉之輩。紛然  
竟起。謫毀禪宇。天下。於  
是。乃杖痛窟。痛林。百端。  
其厄災。非一也。房之於小





松原。豈之於伊東。相之  
於龍口。佐之於塚原。此  
其最大者。蓋為欲示甘  
靈淨味。使濁世衆生。離  
苦得樂。而所受之諸難  
也。天台氏所謂法不自

顯。知之在人。大雄在  
尊曰。诸天晝夜常一為  
法故。而衛護之。今也其  
濟流布於海內。而四  
衆普蒙遺澤。者。臺  
是大士之鴻恩哉。小川



氏有此編。記以國字。加以  
圖畫。要在欲令衆生篤  
信而入于法華。一之壹真  
爾。昔人有言曰。誘引銜  
樞。小智者。先以卑下近之。  
法良有以也。由此觀之。

小川氏斯舉。亦是出  
於慈悲教導之誠意  
者乎。吾隨喜讚歎。而  
敘之。

慶應戊辰春三月

池上日蓮





春日清朗人來示余曰蓮師  
 一代之德行能先師之所  
 撰其文為難以漢章解于女  
 兒也今改作國字以加圖繪  
 焉余觀之而撫額云得能著





蓮師一代之旨耶夫師者  
末法之教主而極末嘗有  
不可思議之理然化凡下  
衆生心既到安國瑞寧即  
為保國全恭未嘗召之好  
論矣世尊亦說唯佛與佛

乃能究盡矣是止止不須  
說之妙徑於世界而莫此  
師斷經主之真實天台  
之秘訣而塞廣宣流布  
之路乎一披法書解師  
無量無邊之辛苦然後得







かみちし無に末法後五百葉といふに樂なる  
以て心ひりしに道徳のそ人の心は福り  
子福のふたる財ある也徳なくはく能厄  
難より逢縁心くゆふまじし本自徳あり  
命は本支の福に始縁縁のし縁  
てこの縁のふりし縁のたんとしるふ  
と縁のふりし縁のたんとしるふ  
縁のふりし縁のたんとしるふ  
縁のふりし縁のたんとしるふ

かみちし無に末法後五百葉といふに樂なる  
以て心ひりしに道徳のそ人の心は福り  
子福のふたる財ある也徳なくはく能厄  
難より逢縁心くゆふまじし本自徳あり  
命は本支の福に始縁縁のし縁  
てこの縁のふりし縁のたんとしるふ  
と縁のふりし縁のたんとしるふ  
縁のふりし縁のたんとしるふ  
縁のふりし縁のたんとしるふ



よき心とて一ををせむと云ふは  
こゝろ中一ををせむと云ふは  
たゞ一ををせむと云ふは  
あつと云ふはあつと云ふは  
そんごかへしぬ

文久元年辛酉十二月

八溝山人識

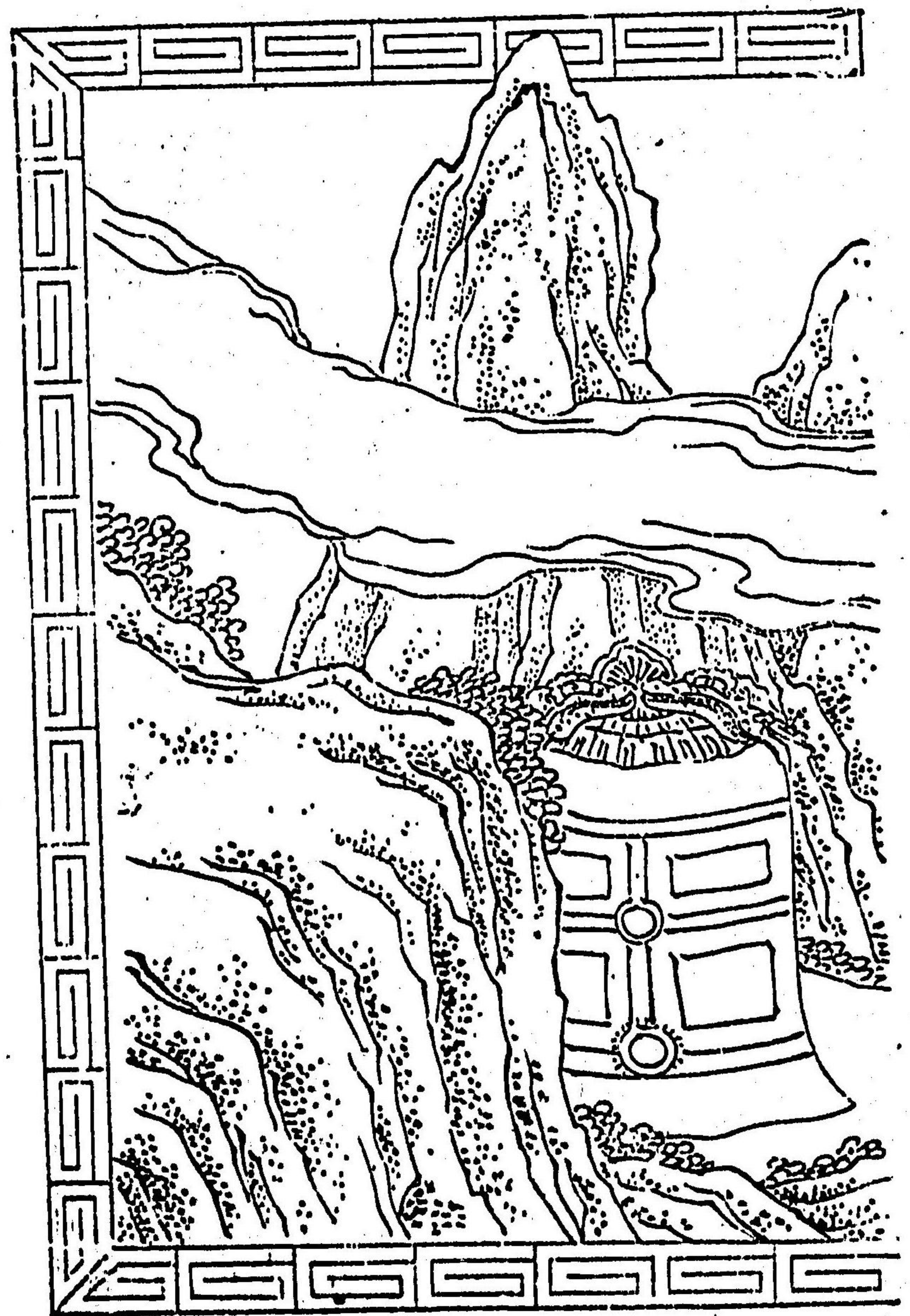
萬物各有三月元出於坎巽蒼海之於五河梅樞止於林木蓮華出於  
草菴皆類也出於其類拔乎其萃所以王之為天蓋牟尼暨經八萬四  
千亦唯有經王法華總持釋尊之萬類十界出依正無不因此經力  
然則法華經密因家之杖石群生之命脈不待言也其大沘所現上道  
場勝部洲有三初余仙從在笑大靈鷲峯而開咒之支那之智顛將  
護于天台山披桑之蓮師祖述于身延嶺此三國三山者誠大千界之  
神秀而其俊極之狀奇確出態玲瓏之美瑰奇出勝皆是金輪涌出黃  
金之所成三聖者衆生之棟梁而三嶽者大千界之靈域也三聖在三嶽  
扶揚此經王猶三光照三才尊之又尊高之又高可仰而信俯而尊運  
念於波疑心於此祥福多二遂合十指爪掌曰南嶽三山三身如來本  
結大緣寂光為土諦觀法王法法天法如斯

維時萬延元年龍會庚申仲夏日 小川泰堂撰書





天竺靈鷲山古佛場之圖









本朝身延山法隆寺之隆興圖







附武之池上高祖入滅古蹟



特12  
631

日蓮大士眞實傳

東海相模州 小川森堂編述

一 天雲蓋て日月淨く四海風收つて萬邦寧からぬ例のあらうにかしこくも本地四八の妙相を  
 稱し日本國東海に應生し末法萬年の闇を照し給ふ日蓮大士俗姓の先蹟を遠く考がふれば天津兒  
 屋根の神裔よりて皇極帝の御時入鹿父子の惡逆を伐て天下の靜謐を奏したる正二位内大臣  
 足より十二代の正嫡備中守共實正曆の元年夏の頃京都を去て遠江國村楠といへる里に住  
 居せしに其驅男子なき事を歎き神にその傳統の冥助を祈ること久し寛弘七年庚戌の正月元日開  
 闢引佐郡井谷明神に參詣し神前より新誓を疑しける時嗣の前瑞垣のはとりに稚兒の時聲す共實の  
 やりみて立出見ゆる盧栴の樹のもど筒井のはとり被の衣につくみたるいと美しき嬰兒あり抱き  
 揚てこれを觀るゝ氣高き男子にて眼の光初空の旭日よかやと尋常ならぬ稚兒にありけれ共  
 實見これぞ神の賜ならんと懐き師て我が子として此をいつくしみ養けるが生長よまたがひ雄  
 力甚く智慧亦萬人に優れたり共實我が女を配合て備中大夫共保と喚初て姓を井伊と名乗故の神  
 前の瑞瑞を以て井桁と盧栴を家紋所と定めけりかくて共保の子備中次郎共實其子九郎共實を  
 の子新大夫惟直惟直の子を赤佐太郎盛直といふ盛直は三人の子あり幼子の次郎盛直次郎三郎俊

日蓮大士眞實傳



日蓮大士真實傳

直次の世名四郎政直同國山名深實名に傾居するゆゑ實名をもつて姓とすこれ日蓮大士の祖先なりこの四郎政直に二人の子あり長男の四郎行直次六郎直茂なり行直の子實實實實の子又二人ありて一男は早世し次男の次郎重忠といふ重忠は五人の子あり嫡子は藤太重政次の早世と次は仲三重仲次は日蓮大士末子を藤平重友と號し此子孫藤平を姓として今猶上總國大野の郷に存在せり一切の江河海は入て皆一味の賊となるが如く在室の四姓抄門と成て後姓なしこゝをもつて其姿態をつくさず但その來歴をまるとすになんありける此時に當て右兵衛佐源順朝卿の事案と西海に迴落し相州鎌倉に都を立四夷八蠻を伐鎮め武威を天下よかいかす折から實名次郎重忠も政直以來遠州山名郡に在て鎌倉に參勤し我が領地の民を憐み文を講し武を磨き密に家名を隠さずと朝暮勵む時しもわれ當時源家之執權職北條四郎時政ひとかに諸國へ人を馳二心ある武家を探りこれを誅して天下の怨ひを除くこと恰も夢を披て五穀を養ふが如し實名重忠の性實忠直にして暗ふ色なく武備を逞まうして其職を勤む大幸の幸に似ず大忠の不忠に混し平家之殘黨に志を通ずるやのよしあやみに預り鎌倉に召寄札明をも遠送罪なくして所領を沒收し安房國長狹郡は流罪となり一建仁三年五月七日の事なり其栖へ方として東條市河の郷小湊といへる海濱にて浦山近く松の嵐の吹かれて寢覺の床も夢も結はず昨日まで眠り暮したる男女の形もといめて所領をければ粟飯だに炊くべきたつともあらず斯て果べき世の住家ならねば

求め下總國野邊なる大野吉清が女梅菊女を娶へて妻となりぬ此一清原氏にして舍人親王十世の孫裔世も賤しからぬ身にあれと夫婦の罪なくして肥所の月に憔悴たまひ一面影をいたりぬが根は甘海苔を搦て日の暮るをいとけす夜は麻を絞網をすりて宵の更るを知らず夫婦の次郎も沖の小舟に命をまかせ釣する海士の群に入りて漁獲を事とし妻も夫も裾も馴ぬ腹が仕業も恨となり其いとまの郷の童等に筆搦術など教るにぞ在しむか一の思ひれて物辨へぬ磯村の伏屋のうちにも敬れ宿ともあけれせも物不足なく惹ける梅菊女のいとけなきより神に佛も能念じ事へけるが此小湊の浦と日本の東海にして朝暁に遮る島山もあし梅菊女の朝なく窓の戸をらむ曉天には明る間道と起出つ身を淨らにし香を焚夫の行末兩親の延慈いのらぬ日とてはなかりける斯て承久三年夏の初梅菊女の夫婦の次郎に語るやう今宵不測の夢こそ見つけ常にかのらす日天子を拜みつ見仰れ日輪の光明いやすさ入り入葉の金蓮葉に乗給ひ海上のるかに飛來り妻が懐に入と見て驚きさめていへるか一婦女の愚なる心より正なき夢を見つるよと叱りたすふるとありけれと次郎重忠も愕然としてれをろ我も日永の疲にてませろむ中よいと母と白髮の老翁が玉の如き稚兒を掌の上居これは汝も授るを能養て出家にせよと再應再三ねんごろにさし示し給ひぬ此の不測ある夢想かち互ひに語り合給ひける夫より梅菊女の懐妊身となり給ひ櫓の柏も秋告て海原くらし時雨雲夜半の段に鐘をたていつか氷る菟水の音もど

日蓮大士真實傳



藤原共資  
正月元日  
井谷明神  
小参詣  
て子孫  
を祈る





だへ一冬の空今年も夢と暮れけり明れは貞應元年壬午の春時人皇八十五代後堀河帝高橋の  
 政事を擲て四海を撫育成給ふ又鎌倉よは四代の將軍藤原頼朝公なり此は右大將頼朝卿の血統  
 なるをもつて後室二位尼政子の方のはからひによりて二歳の時鎌倉に請迎へ當年五歳は渡らせ  
 給ふを將軍と仰奉り二位政子の方は五歳の中に將軍を譲り武門の仕置天下の成敗公家の進退  
 まで皆これ政子の方すにて殊に會弟北條義時の時執政たり保元平治の國亂もさのふの時と  
 附いて、今い首の葉にかけていひ出る人もなく鎌倉山の星月夜日本の大小名弓箭とる身も取ぬ  
 身も心を鎌倉に寄ざるひなく諸侯の邸宅をさへへ神社佛閣と柳曳街をひらき衛を分け朝市  
 夕店の繁昌は谷七郷に賑ひて新玉の春いく萬代か立かへり豈せぬ聖代の壽さの北頃中納言基綱  
 卿の歌よ

吾妻路のあまた郡のその中にかて鎌倉さかへ初けん」と詠給ひにも其縁は知られけり  
 附て房州小湊の浦よ奇異の事こそわれ此里近き磯村に誰か植ねさし種もなき蓮の若葉の生出て  
 立葉卷葉の茂り合ひやがて白蓮華の咲出たるに華葩大いにしてその色白銀の如く旭日は輝き  
 と美麗く見えければ此遠近の心なき浦人もあな不審夏ならで咲ぬとささし此華の未風さゆる  
 雲霧もかく珍らしく咲たるは此浦にめでたき事のありもやするといと驚く見物こそこの吉瑞の  
 ありと止て蓮華淵とて今に猶其名所は残りけりさても去つとてこゝに配流たる眞名次郎重忠その

實傳はこの二月の十六日曉天より蓋の氣つぎ給ひ此日ささらきの空いと長閑風も瓜紅旭照  
 にさらめわたりさるゝいる庭に柴垣に今を盛の梅の宿けよも来馴し黄鳥の法々華經のこゑいさ  
 ぶよく次郎重忠は身を清め日天子を拜し妻の安産を禱りける産舎の内には得あらぬ妙香のかそ  
 り高く午の刻ばかりに王の如き男子出生な一たまひけり此浦人の我もくど昔情て悦びいふ者  
 ひさもさらず中にも齡高れとなびて望陀木綿の布子さへ折目の見ゆる村が門口より次郎の主  
 よこれ見たまへかゝる不測の事ありと叫立られ次郎立いで見てあれは薔花さて前載又忽ち泉の  
 涌出て高く津浦滔々と珠を飛して濺よく流るゝよを俸ひこの清泉と汲で産湯となせり彼といひ  
 此は吉瑞の奇瑞も夢ならず此兒の生前いかならん人には言ね二親の心のうちを頼もゝ母梅  
 菊もやすらに肥立この稚兒の面貌を見るは頼廣く肩高く鼻正まぐりて色いと白かり口の氣息香  
 ばしく其容儀凡ならねば日天子の吉瑞に因て普日應とこれを名付日よそひ月を重つゝ蝶を蓮花  
 を摘でいと壯健に生立給ひける實に末法五濁の颯浪をまのき經王法華の利益を三千界に被ら  
 め給ひ一日蓮大士は此稚兒を在りけりされば此年をもてむかしを逆算れば大壽釋迦年尼世尊月  
 民國皇林に在いて入滅まゝける其年より正法千年像法千年す終て末法に入て百七十一歳  
 如來の滅後すでに二千百七十一年に相當る彼の月氏の釋迦如來の西天の國王と生れて本果妙の  
 功德を三界に施し今この日本の日蓮の東海の下賤に生れて本因妙の利益を閻浮提まかいやれ



日蓮大士真實傳

次

給ふ彼の西天の月氏此は東海の日本あり彼の入道は二月十五日此國陸の二月十六日天竺の法華經は西より東に傳へ弘まりて正像二千の雲を拂ひ今日本の題目の東より西に傳へ弘つて宋法苑珠林の冥を照す先聖後聖咸は符節を合たるが如し佛法修行せん輩のかる大因縁を辨へ知て慈に悟人せず無量億劫にも得脱の道あるべからずとぞ思われける實にや梅檀の二葉頻伽の罪滅す日應の日にまゝ智慧づきて父を慕ひ母に道演る頃より人は愛憐ふかく唯假初に懷抱まらせし人も長くこれをいとねみ廢も亦ひとたび掌打愛したるをそ日を歴てよく遊れたまはせ慈母の懷を汚さず乳を不吐三四歳の頃より世の七八歳の小兒の動靜ありていとれどなしく常に在て母のために塵を拂ひ席を淨むるの手を扶け父の側に事へては墨を摺るの茶をまららし萬端に心を配ることいと不測と思われけり今宵も浦の夕月に里の頑童の三四人友遊がはみ寄つて燈火の影に居倚さのふの彼所の機は榮螺拾ひぬ今朝も背戸の榻に納さて菴をわまた捕たるはと郎風たる片言もて已が機を語るに聞昔日應は頭掉していやと廢はさいつ頃慈父の燈物語よりはべりぬ程近事あるが京都に山蔭中納言とからへる人ありて或日桂川といふ河原に往かへり給ひ一茲に鴉飼を業とするいやの老婦ありて大きな泥龜をとらへて殺さんとせしを山蔭の卿いと憐み身添給ひ衣服ひとつを其料に取らせ龜を放ちて還たまひぬ此後山蔭の太宰の少貳といへる官に成て家の男女を引具して船よりちのり筑紫とて下つた此

に若君の母の繼親にて有けれは深く心に悪み居て折こをよけれと過ちのやうな此兒を能くより投落したりしが不思議や此兒波の上にありて沈給はず能く見てありければ數百の龜の中浦にうかび其兒を捧取て衣服さへ濡ざりて其儘取揚妻を路より京都へ還送給ひ一その若君後又出家して如無僧都とて道徳たかき聖僧になり給ひぬ此事内裏へさこえければ後白河の帝より三年の間諸國を殺生を禁たまひ一とさく生あるもの、誰か命の悲しからざるべき其身等も今に入と一生立ば浦の朝朝夕夕數限りあま命を取世の稼業のあさましく取る、命も取人も但に地れぬ惡業なればせめて幼き其うちにも無益の遊びに殺生せずは同ト報ひも海かるべしとてつらぬ舌よかたりたまへば理も非も譯ぬ殿の兒があくび伸して眼を擦り板金剛又腹脹よかい探つ、蹴りけりかくて次郎夫婦も善日應が心つく一の孝行に年月の憂を思れてくらへけるが嘉祿二年戊の秋鎌倉にては二位の尼殿子の方世を去給ひ將軍御齡わづか九歳にねりまゝて世の人浮雲の思ひをなぞ折柄六月九日辰の刻美濃國時田の莊よは大雷降りてつものこと一尺餘の日影も窓を開爐を開き酒を飲つて漸く寒さを凌ぐよ一十六日鎌倉に往進す又武藏金子の郷より雲交の雨降出後より大駭となり禽獸を多く打殺したりとぞ其上鎌倉よも大路小路に霜のふると雪の如く六月中雨のみ降つと晴る空なく風いと寒くして手足も冷凍けり同く七月の初奥州よは小礫を降すこと雨よりも一げく廂を碎き扉を破り人の傷つけるもいと多かりとぞこれ又

日蓮大士真實傳

九



て今年十二月十一日改元ありて明れば安貞二年終日曆七歳この年京鎌倉洪水よりて人馬の死滅大かたならず此よりうちついで五穀登らず諸國は疫癘多く又辛の卯四月廿八日鎌倉の御所に姓なき鳥數千飛群まり其形鳩の如くにして色黒く啼て不吉の聲を傳へしよて何地ともなく飛去けり鎌倉の僧俗その鳥を見知たるものだにあらねば況て其名を識たる人もなし何なる凶變の惡瑞もやと思うち八月大風洪水田畑山林を荒し翌年よいたり天下大飢饉時の執權北條泰時五十餘の憲法を立て國政を勵めども四海の困窮こゝに究り衣食なき民は仁義の教へがたかゝる京鎌倉のありさまを風の便よきくよつけ次郎重忠の妻の梅刺に物語やう善日曆もはや十歳を超ぬれど里の友達と物諍ひせしこともなく走狂の志殺生せず魚鳥の肉を啖ことを好まず誰をしへねど神は慈み佛を敬ひ親の機嫌を伺ひつ山に登せ學問さして給はれや出家さして給ひねと問事とに胸置れ彼といひ此といひ思ひ合す十世のむかへ御身應を懐妊せし折出家にせよと難夢の告我も五十路を越ながら頼む方なき片海の此小湊の浦進く罪なき身を沈み浮ふ時なき宿世の因縁せめて應を出家とせば先祖の追福身の得脱御身も我も後の世の深き功德のなからせやと大姫の語れり妻も悦び善日曆もまかゝの緒首論一善師もがふと思うち其年も慈天福元年癸巳四條天皇御諱の秀仁後堀河帝の皇子にして去年の冬八十六代の王位を讓給ひ今歳をすけり四方の春人の心も世の沙汰もや、穩に成にけりこゝに小湊より北へ當り程遠からず清澄といふ山

寺あり眞言密宗の靈山よりて寶龜二年の開基なり此項の住職道善密師といへる道徳も此の寺の一人なり次郎重忠は曆をひらき吉日を撰み善日曆を携て清澄に登り諸佛坊に在し才道善密師もまみえわけ此曆を徒弟まなして給はれと慈愍に頼みけるに道善密師もいと快よく受肯の善日曆が容貌の優美にして返りきを見て且成り且歡び頂髪をかき撫つ見せけりよよりは眞王曆と改名せよとて其儘此山にとりめたるは天福元年五月十二日曆が齡十二歳の時なりけり此より道善密師の御坊ふかくいたりり手習ふ事を教給ふに二字三字ならせして筆法書跡を習ふ事とて年來修練の人の如く常山より南一里餘は二間寺といふあり此坊の道善密師とて道善の俗縁の兄なりけるがけふ茲に在りて眞王曆が凡人ならぬを見て斯兒の往々我が宗風をも輝やかすべきを能いつくしみて教たまへと舌を巻いて語けるそれより小翠を始め論語なほいふ書よりすべて忠孝仁義を諭したる儒道の書類を教へ讀みしるよ一を聞て萬を知り二遍三遍を過すして暗誦するをまことに梵簡の永の逆飛が如く昔漢土の天台大師をさなかり一時父に伴れて山寺に遊ぶその寺の住僧さし招き兒に尋き御經を教て取せんぞと普門品三行をかり口ずから教たるに苦もなく誦給ふゆゑ和尙も不測に思ひ一品を獲らず教へたるも唯一度にしてこれを誦し覺ゆるは天台御年七歳の時なりとさく今眞王が手習ふ事といひ物體操の庸ならず東夷東條かたうみの嶽を判海士の腹が家にかゝる愛度兒の出生したるのいかなる事と道善も心のうちに驚きつ又此山に修學する所化





貞應元年  
壬午二月  
十六日高  
祖大士御  
談生善日  
曆と名  
つけ  
奉る



見廻も並ならぬ立振舞の薩王やと首の者こそなかりけれ茲は母梅刺と去つ頃そのいと見を出に登せ其後たぬて信もせず道法ちかき清澄も海山隔つ心地して彼方の天をうち詠め人里離し山寺に手習ふ業と讀書の教も多き僧達にわらけなくもてなされ我父想し母床と泣もやすと思わひ彼山深く尋んと親度も胸にめまりて言出るを夫次郎も審りられ訪ことかたき清澄の山のいたてを我が子ぞと露も霞もかこちつゝ夏年月を送られけるが案も婦女の心には思立矢もどいり兼夫殿に罪てけふの日を優曇華のよき心地して磨が好る岩粟も種くの物取そへつ節磨の稿の拾其赤取染の肌衣まで僕の男に持つゝ清澄もねもむさびて山に登れせいかにせん女人禁制の寺なれ五障の要に遮られて入事かたき密嚴淨土心の月もいや曇り側の石に腰うち掛一べい信ひに伏沈たまひしに枯木を高く背負たる寺の奴僕山路より歸るを見かけ啼くと呼といめ此山の諸佛幼も尋問せる薩王に母が参りぬ疾出て無事なる顔を見させよと坊の座裏まで言傳て給ひねと請せりく頼みたまへん寺の男のうなづきて杉の木開森の下来もて尋るは裏門にや彼方をさして啼きつゝいとも重跡に入にける薩王のかくときも賢母に似氣もな一出家をさよ一またこ一たる磨が安否を訪給ふの投一稜を尋る迷ひ値まじものど親度か思ひかへせど一かすがに思愛ふかき慈母を逢で此ま一歸一なげ不幸の罪の深かるべ一普磨士に會参といふ孝子あり他にありける日其母會参が歸りの遇を待ひて指を指給ひければ其心胸も應へいときて家も歸りいと首子

母の指の其子の胸に通下たるり親子はひとつ血肉にて冥合所感の不測なりと思ひかへて爾の坊よかくと昔寺門を出て慈母に値給ひ一に梅刺のそれと見より走倚薩王が手を取て此年月一煩ひりるはと喜の涙せきあへず道理よことと思われける薩王磨の禮を正し磨もさいつ年爾父に伴われまらせて此山に入し頃ばさそかに里の懸くく時鳥なく梅雨月心の雲も晴やらす雨の軒端に袖のみぬれていと悲しくありけれを師の御坊の情深く年月ながき影の窓に書と爾磨士の日本の古事をさへ此彼と思合て此程の必長閑き彌生窓敷いと高き松杉の黒きよ交る山響さくかど見れそ入相の鐘の音に散花ふいそ花より脆き露の世にいめを重て積さめぬ惡業の因縁も聚れて或時の地獄も泣又ある時の天界も樂み又畜生に身を苦しめ偶人間に生れての生老病死の四苦八苦百年久しき胡蝶の夢さりすばかふる凡身のいつか出離の期あらん誠は百年の集障の風前の灯火一念の發心は命後の礎とかさくへる磨も願て出家してかゝれどて一も乳乳根の指給ひけん斯無雙を剃落し佛の法弟の數に入三寶國土の恩を報ひ一切衆生を助る身とも成りべらり先父母を救まらせせん御經にも四恩のうち父母の恩第一とこそ佛も定させ給ふなれ今生一世の恩愛は水のわかれの跡もな一未來永く父母の御側さらぬ大縁を結ぶ誓ひの剃髮染衣それをも思一歸られず慈母の御歡を積ふかくて磨が菩提の障りぞが一此上の安否を問せ給ひぬを慈母の風情を言ふべしすがよ長き春の日も晴傾たり木立の茂る間陰は里よりはやく暮るよ



然し山路の程も心もなくなり入るはと。思は急がせば悲母も頼りも敷き。まば一見の儀は。
 田が長者たる菩提の月に心の闇も明げく。際すべし手に喰ふれて。増泪は胸ふたがり。
 わけて泣や。家路も歸り給ふ此梅雨が涙を瀧たまひたるを。瀧涙石として今に猶清澄の山路も残りこ
 くに詣る人々の其むかへを思ひ出でとも。涙をともぐになん有ける光陰は。弦を離る。箭より
 もはやく。春と明秋と。越て今年嘉祿三年丁酉の冬。藤原王も十六歳にありければ。道將密師道場と
 傳ゆ一山の大家を。聚め十月八日。剃髮の規式。嚴重に稱經梵唄みづから導師となり。藥王殿は御堂い
 るまきよく。藥思入無爲眞實報恩者の文を三遍まで唱。藥師の無髮を剃落し。紅白の袂も墨染の袖と
 あらためたまひたる此むかへ。天竺國淨飯大王の御子。悉達太子御齡十九歳より。王宮を忍び出
 玉の冠。錦の御衣を御記念よと。り麻の衣を玉牀に纏ひ。積持山より分登給ひけん昔の則を忍ばれ
 て。衣にも尋くを思ひければ。此より御名を是生坊道長と。号改め。諸事を擲棄。一佛理に心をゆだね
 眞言瑜伽の奥義を學び給ひ。教相には眞言三部及び諸論等事相に。決然持等の印契を相承し。法兄
 淨願義淨の二人の所化。信多きその中にも。道長御をよかく。憐み。學問の志をたすくるゆゑ。それかれ
 ど力を得て。此程の一代。嚴經にとりかへ。夜肺肝を碎き。閉給ひ。一日心に思ふや。佛法とい
 るを。釋迦の代の法なるを。今八百年餘は。立別れ已が。隨處弘る法を。我て。佛の本意を得たれと。
 以彼を。よりこれと。讀らば。一徹なきに似たり。抑我が本願。釋尊の。いづれの宗旨を眞實宗か。

宗がまた。教外別傳の。神宗なるか。今御經を案するに。決して。諸宗兼學に。あらず。大海の潮も二の味な
 く。如來の教法を。だめて二の道へ。あらす。其會釋を。知らんに。わ智者となり。で。信ふべからず。佛の
 山の本尊。虚空藏菩薩は。東方莊嚴世界の。大菩薩にて。一切衆生に。智慧を授けんと。の誓ひあり。こ
 と。大集經に見えたり。其上法堂に。安置の尊像の。寶座の。開闢以來。稍五百有餘年。利益多かる。聖像と。
 けを。茲に。祈願を。觀ばやと。揚水を。絶食を。斷し。御堂に。籠て。持念する。事三七日。願くは。佛智を。得て。如來
 の。本懷を。さとり。あまねく。諸宗の。是非を。明り。佛燈を。一時。揚て。末世五濁の。闇を。照べし。願くは。衆生
 利益の。大願を。あはれみ。日本第一の。智者と。成て。給はれと。丹心骨を。削りて。祈ける。此御堂の。明に。清
 泉を。湛へし。池あり。此池水に。晝も。猶明星の。星影。輝々として。浮びたる。はいと。も。好し。
 よく。丹誠。斯念ありしに。その。願滿する。曉天に。夢現の。境も。ねば。ぬす。願願たる。其中に。白雲。
 にて。御眼の。光冷。凄き。眞人。影向ありて。右の。御手に。光明。まば。ゆき。大寶珠。ともいひ。つべし。玉を。持た
 が。斯る。智慧を。與んす。とて。斯を。渡し。給ふ。蓮長。師右の。手に。これを受て。左りの。袂に。入。收。給ふ。
 音を。ひて。身も。清か。る。露を。ぐれ。佛前。高く。見仰れ。本尊の。寶籠に。かけし。開闢の。のれと。脱て。金界
 の。八字。又。開けて。ありければ。大願。す。で。満。足し。ぬ。と。心中の。喜悅。た。と。へ。取。取。物。なく。此。曉來の。
 よ。ふ。かく。佛恩を。報。す。本坊。へ。か。へ。ら。んと。御堂の。階。三。四。級。下。立。給ふ。其。折。病。便に。胸。膈。氣。通。り。
 血を。吐て。その。儘。氣。絶。し。倒。れ。臥。給ひ。けり。同寮の。所。化。これを見。出。し。坊。主。擲。ひ。給ひ。介。係。せ。し。



の醒たる如く聊御身に勞を覺せず刺へこれより境智捨外にひらけ雲霧を拂て天の三光を見  
 るが如く萬法方寸に淨ばすといふ事なく辨舌また明了にて電光の如く一言の事に衆聖を決  
 すこれ全く凡体不潔の血を吐つく一暗六根淨を證得なり給ひたる利樂の程こそ尋とけれ  
 湍澄寺の千光山と號す寶曆二年不思議律師の開基にて慈覺大師これが中興たりいま寺殿  
 八十石東寺流の眞言も屬す本尊虚空藏菩薩の開山律師の靈作なりとぞ此山の宗祖大士初發  
 心の靈地にて此寺に修學あり一奉七年に及ぶ慈母梅菊が愛別の涙をそそぎ一涙涙石昔光  
 天子の影を宿したる明星が池あり凡体の血を流たる處にその地も生る世の業に血の塵  
 たる班あり今に凡血の世といひ傳ふまことに當山は大法慈元の靈地とぞ思われける  
 かくて曆仁三年戊戌の春にいたり蓮長師のいよく勸導いとまなく木を越の如く丸く削な  
 て枕と一御身つかれを覺ゆる時此枕を肘を倚てまば一氣を休玉ふも一眠氣付ぬれば轉傾く  
 の多快く睡につさがたこれに居士にて圓枕とて學問に心許ある人の造り初めたる物とぞ言  
 く願に繩をかけ股を鎌を刺て睡を防ぎも同く心の學びの願それの經學一世の教これは内典八  
 萬四千釋迦如來の説給ひ一切經と名づけたり七千三百九十九卷なりされば大慈釋迦如來十九  
 歳として出家ま一御齡三十四成道あつて檀特の峰を出家滅道場に在りて十立六相の理を説給  
 ふこと三七日これを華嚴經とすふこれ釋尊說法の最初なりこれより阿含十二年方等十六年般若

十四年以上四十二年佛者七十二歳の時靈山の嶺に法座を敷させ給ひ法華本迹二門を以  
 て如來出世の本懷を述べたまふ事之に八年これを法華經といふ華嚴阿含方等般若法華この五時  
 を説了らせ給ひ御とし滿八十にて跋提河純陀が家に入て一晝夜涅槃經これを遺教に殘して二  
 月十五日涅槃の雲まかくれ給ひし此一代の説相を一切經と名づけたり蓮長師は此頃漸く一切  
 經を閉すくし今宵更闍かたられ月さし入窓に涅槃經を讀給ひしに此御經の中に依法不依人とい  
 ふ金言あり文の意の世の季もいたれば我が道を學ぶ者詞を巧み我意をのべ種々の宗旨出來すべ  
 しこれに依て我が入滅の後のいかに智慧かこく其位貴くとも人師の詞の用ふべからず我が  
 靈經文に依て佛法は別せべしと末代の規の定め玉ひし最期の御遺言あり蓮長師は此御經を拜し  
 夜學の燈火も漏ばかりに御涙に咽ひ玉ひ目録の宗旨は未だこれを知ず我因縁ありて眞言密宗の  
 山に出家を遂當宗の洗滌を學ぶ大日如來より密法總とて今に傳へたれども金剛智不空等  
 の説を本と日本よての弘法慈覺兩大師私の了簡を加へたる事のみ多く眞言一宗既も佛の法よ  
 りならずして凡夫の法なり亦同く御經に釋尊ひとつの譬喩を揚玉ふことに巨なる象一頭を擧ぐ育  
 人多く聚りて探り見る後に一處に會合一一人の育目がいふ機象の漆も塗たる桶の如く一人のい  
 やとよ我が見たる象の掃帚の如くと又一人の天鼓の胴の如くと又一人の笑の如くと衆の育人掃  
 て止す去ば其耳を捉し者の笑の如く思ひ願を盡し者は天鼓の如くと舌尾を熱し者は掃帚の如く







ていとわりのたぐい説たまふかゝる事の實あればこそ當時京鎌倉のいふもさらなり上臈も下臈も  
 物議たるも知らざるも念慮せる人の涙の砂の數多一天台眞言諸宗の名僧智識へ今のとなへぬ  
 人もなにかゝる尊ぶ敬をささる家よかへりてこれまでの持佛の釋迦を捨るも惜と雜具の中より  
 入て納戸の隙にさ一置たるをいつの程にか小童等が持出て雷に太鼓にうち交て獅子と釋迦とを  
 罵らせて遊ぶものから打割て風爐を焚にと増らめと其儘にさしれたつと語るをさうして遊長師は  
 且あされ且悲み法衣の袖は涙をたへ我の房州小湊とて浦崎ちかき山寺の僧なるが齡今二十  
 超ねばもつらく佛經を見るに今此三界は釋迦一佛の有縁なり彌陀稱名をすゝむるとて本佛釋  
 迦と禮拜するを難行とて厭りたるはいかよぞや紫の黄色の我口より言ひつらぬに増れども一夜の  
 宿に露のぐ恵みに頼ひつるを昔天竺伽羅國術城五百の猿猴あり折一も秋の最中ころ月  
 いと冴る深河よりつり一影を照見てわれこそ採らめと争へともさかき深き深き河に猿の智慧の  
 體さくひとつ猿が松の下枝に取つけば又ひとつ猿その下の手に釣さかりかくしつゝ五百  
 の猿の五百群の綱をよげたる如くして漸く水に手をさし入鏡と光る月影を驚よ藤よと懸りて懸  
 ひからけて採ともはては斯夜もすがらなすうちに松の木壁の枝折て五百の猿は残りなく水に溺  
 れて死ねるとぞ本佛釋迦の月を觀す述佛彌陀の月影を一向專修の萬法にすまき取んと思ふうち  
 命の松の枝折て奈落の底に沈みやせんといと懸は説諭たまひけるに若きよは似ぬ發明の御

信かな夜もいたく更たるの納戸に入て寐まり給へ翌日またさかんと欠伸に念佛唱せて主も其  
 處に臥にけり遊長師の明の朝こゝをうち立先鎌倉に入ち昨夜主の御願にささつる大阿がもと  
 に專ゆき當時諸宗に秀たる念佛の心を香浄土の真心を問はやと心いそげと道はかゆかす漸く其  
 日の未の曉其地またどりつと車小路といふ所にいさゝか縁故と尋ねてに暫時と枕かる鎌倉の  
 鎌倉の執權職北條武藏守平の奏時は去る元仁元年六月十四日父義時は逝去あり嫡子なれば其跡  
 を繼で執政たり奏時は賢良温厚にして仁君の愛たかく廉讓節義と心に存一専天下の政道に  
 預り記録所の門に鐘を掛世不時の歌を聞給毎月十日廿日晦日を決斷の日と定め頭人評定衆を  
 聚り松の理非を決と其教務嚴重よしてまかも慈愛ふかく常に側の人に於て宣やう人とい  
 て是ことを知らざるの人間一生の禍なり是ことを知らずの百萬の財寶を積ても安き心なく痛  
 堪も非道もこれより起るなぞいふよを語りて人の爲世の爲直なる道を諭給ふ故君の御前に何  
 候とる人々の麻も交る迷の如く曲ころのわらざりけり時一も彌生十六日評定所より退出の處  
 庭の一木の櫻花をよよく風よさのふけふ梢淋しく散ければ奏時をばしうち詠り天下の政務よ  
 どまなく誠に花人を待せ今年の春の色香よも飽て別るよかなさよと筆を染で  
 一けき世のあらひこそ物憂けれ花のちりなん春もいられすと和歌を詠たまひよかよ



饑寒にして明察なる壽時晝夜心を政事に盡し給ふゆゑ諸國程にして鎌倉も年々に賑ひ増り  
 かの阿の赤橋の前よりは常々驛馬の供待多く長谷觀音の大路には精進代参の女衆興ひきりて大  
 衆の勤脚供養終れり猶小路の不動に開張の標を建綴吾街の遊女佐々目が谷の歌舞妓放下物真似  
 仕商人たのか續々の稼業も知らて彼る幕代の恩その街衢の繁昌は今を盛りと見ゆよけるよても  
 運長師の兼てさつる大阿が住所をたづね給ふは御所より東十八町ばかり霧が澤好見といふと  
 ころよ書を結ひ極樂往生の二門をひらき鎌倉中の男女とわつり法談す師も亦その席に交り淨土  
 の宗意を聽給ふに淨土宗といふの觀經變觀經阿彌陀經に天親菩薩の往生淨土論をそつてこれ  
 と二經一論を稱しめて宗旨を建我朝よて法然上人といふの美作國稻岡の人父は時國母は秦姓の  
 夜置等に剃刀を吞と見て懷妊し長承二年四月七日誕生在すし生れなからにして極情極明なり  
 一が善心信都の往生要義を讀みて初て一切の經論を捨て念佛一宗を建立し給ふさればいかなる五  
 徳十惡の凡夫なりとも自力の根性とは無所無阿彌陀佛といふ唱ふれば此惡世界の法を離れ九品遊  
 蓮の彼岸へたやすく往生なすこととはありく疑ひあらぬそか法華真言等の邊道門の難行難行  
 とは難量て界業のかゝる凡夫を救ひます大慈大悲をまとれると建久五年甲寅遷轉集をあらは  
 して無常とすとす証遺木はれ尊と遺集の法衣の袖をか合せ黒谷吉水のわたりよ遺塔をひら  
 け一向に奉念念佛をすしめ給ひける壽永元曆の合葬よりいまだ十年たるとれば初を討れり

殺され兄弟を失ひ妻子に別れ世の憂目を見たるもの幾千萬ぞや猶億万ぞや血脈を風いまだ香  
 を法す此箭叫びの傍羅のこゑ猶耳に残りぬかゝる恐ろしき憂世も唯一塵の夢なりけり哀れいか  
 さら飛花落葉の夢の世は何を樂み何をか待んと愚なる身もかしてさも無常の風の心に染亡人の  
 菩提の爲我が後の世の願にと念佛の聲四海にかまびそく何ある無道心の者ありとも必弱くも  
 法然上人の唱名念佛まなびかぬ草木のなかりけり今法然上人建曆二年の遷化より今年曆仁元  
 まで星霜わすか廿七年敬遊のぬ十即十生運長師も此念佛に心を委ね安心の法門も心耳を澄し給  
 ひける又この頃念佛者の語るを聞給ふ佐輔が谷に然阿良忠上人とて法然上人の孫弟にして學解  
 ひろく念佛の得悟たゝかのよゝをさゝ運長師又こゝにも往通ひ三心四念の宗脈を受け給ひける  
 ころより延應の秋くれて仁治もはや二年を送り給ふうち彼の好見の大阿上人病の床より臥て古今  
 の大病を煩ひ苦痛またへかね晝夜巷の中を轉び泣叫びつゝ虚空を擡て懸たり遷化の後死骸を  
 一るに身縮りて小兒の如く其色黒くして墨を塗たるが如しとぞ其隨身の弟子等の物語にさへ  
 ても淺間敷ことかな守護國界經に死人の十五相を説て地獄は落るを明し天台摩訶止観にも死  
 人の形相を委しく教へ給ふ此經釋を讀とるよ大阿上人の地獄の疑なし在俗の身あらば過  
 の宿業もこゝに現るともやあらん道徳圓滿の上人數年の修行その陰るく隨終の正念を失ひ最後  
 に地獄の相を顯したるのいかにそや是正しく佛意に協ぬ處ありて其現罰にあらぬやと我を問ひ



と答て點頭たまひけり又此鎌倉の繁昌に諸宗も學者十宗の碩徳春の時に立葉花のごとくいとま  
らしくしてみゆるものゆゑかれに問これに釋學解を盡さんと思せどもいかんせん鎌倉も森平八  
十き御代の習ひ文武道業多し高僧すべて花車風流になりもてもき琵琶を彈のあるは爪琴小  
鼓に囀すしらべの糸竹も都下の白拍子袂かざして編を唄ひなまめさわたる風俗のいつか出處  
に押移り錦の袈裟に七寶の珠をつらねし百八の煩惱つるぐ艶麗薄佛事供養も布施からと濁心  
の貪慾無懺まことしからの事のみ多く我も亦た假初の草枕五年ごにありければ一先安房よ  
立かへり其上に兎も角にも思立ばやと歸國の要意彼これと翻へ給ふうち二月四日夜よ入成の  
刻頃西の天よ赤白の氣三筋たちて二筋の程なく消て赤き一筋火の柱と建たるが如く中天に響  
立たり町中の男女驚て見物す御所にいらしては陰陽師安貞を召て御尋ありけるにこれの形影の  
氣と名つけ俗に火柱ととなへ昔村上天皇康保年中あられたるよし舊記を引て言上せりいかな  
る事の前表よやと上下安心もなかりける蓮長師の此取沙汰を後にさくある一房州さして歸りた  
まひける幾程なく同七日の朝一天曇りて雨にやあらん風にやならんと見うちよ己の刻用大地震  
に震動し山鳴谷應鎌倉府内の大小名堂塔伽藍を搖動し土煙天に覆ひて暗夜の如く其中より嵐々  
に火然出男女の泣わめく聲いと哀れよ震動の間にさこへ物凄も懼しなんとといふばかりなり此二  
朝の地震に人畜牛馬等死滅損傷その邊際を知らず御所よりの四日の火柱七日の地震あわせ記して

京都に注進すかゝる鎌倉の騒動を旅にさくつゝ蓮長師の東條小湊よかへり若南親のかはらぬ面  
影を拜し鎌倉の物語よ春の一夜も明やすく次の朝の清澄に登師の御坊の恙なきを喜び此年月必  
をひそめ修行なしたる淨土の正宗その外諸宗の論議古今名僧の物々たり此此同趣の僧達へも談  
ト聞せ給へば師の道善をとりとり二間寺の道義もこの席に在し淨願義淨との餘寄蓮明心等同寮の  
所化まで耳新しき物語に感入その邊辨といひ才學といひ一山の衆徒膝をうつて驚歎し師の御坊  
は喜びの涙席を沾し給ひける清澄に「一」在すうち小乗權大乘法華真首の四門の飛行の次第を  
詳らかにし戒牒即身成佛義と名づけ山内の僧達に示し給ふこれ法門筆作の初なりかくて僧  
世の有様を思ふも鎌倉の當時日本の大都會なれども法を弘むるにはよろしく道を導ふに益な  
し又かゝる山寺の閑寂なれども書籍も乏しく其上道を談する友もなし干將莫耶の名劍も塵  
せのいかにせん傳へさく比叡山の傳教大師圓乘戒壇の山といひまた三井寺東寺南都の七佛寺の  
今の僧のうとくもあれ其宗々の開山は入岸渡天に難難を渡り苦修練行の跡なれば無餘難題も定  
て多からんいでや彼の山々を遊歴し先師の道をうかへばやと其心持しつ旅の用意も僧の身  
の立ことやと水禽の跡にごさつと道善御坊又同寮へもいとまを告今年も暮る秋の日の日影に  
笠をかざしつゝ京都さして獲足なしたまひけるが鎌倉よ立寄年頃親しき人々に昔信れよ世に  
同家の棟梁と頼つる北條泰時も此六月十五日春秋六十二歳にて草頭一轉の露と消たまひ晴に懸





散山の講  
三塔の傳  
高祖の相  
我を推す



灯を失ひたるが如く政道の古實忍に耐なんどと毒時の類無四郎經時武藏守を補せられ鎌倉の  
 權となる萬端のこと昔に似す人のこゝろも改りそのうへ去年丑の秋より五穀登らず一年の凶  
 作四海くくに因窮一世のめま一の事いふばかりなし遠長師の鎌倉の旅のやせりに思はずも  
 駿山の學僧海邊といふ人に因を結び種々佛理を談十年ころの友の心遣いで感念なくものかた  
 ひ我も駿山も學問の志願あるより語給へば尊海も大きに喜び己の座主信珠の法弟にて經話なれ  
 ざる駿山の四俊とか人も尋る者なるが今般法用の事ありて鎌倉の御所に仕僕一そが用もはや  
 たり御身の才學の壯士とたがゆるを疾駿山に登り給へ我どもなひまいらせんともりけるにぞ  
 灯火渡りに煙願ふてもなき同伴と遠長師とふかく喜び秋の日の一の短くて其夜の徳島に一  
 言し晝酒くらす竹の下けふ越わゆる足柄の關路はどなく駿河ある百度見ても其風に姿さだめぬ  
 富士の雲のけよも見へけり明日のまた宇都の山邊の萬葉わくるも夢か武士の矢矧の橋の一筋に  
 風響とらしてさそく身の問道の渡一風響く旅の疲姿はうつろとけふのた曇る駒山志賀の湖邊  
 國守の道長師の後の尊海も伴はれ坂本より駿山も登給ひつらく四境の風景をながり給ふも  
 駿山山城國駿府よりたり東南は近江國滋賀郡も屬し嶺の四明が嶽とて人跡絶たる高嶺よりて  
 くに登れば晴天の彩雲もさこへつ川大井の二流雲岩高嶺の山より淀川の流れ遠く難波  
 國より玉藻郡よりて帆を懸たる船は昆蟲の畫くに似たり東市の眼下は唐船の松葉津の波

國平の樂波悠として沖の小島竹生島の水鳥の波に遊ぶかどわやいまる山水の英泉四境を遊ら  
 ば古の風色足すといふ事なり其嶺へも學室のわたり樹木森々ど生茂り巖に雲蒸霧滂かに山は  
 明く佛の脚定を示し水に照て如來の演説にかたせる億萬の經論は一山の草木より多一三千  
 の事はい智解を疑してかゝりからづ賢や傳教大帥は下めて此山を關さ給ひ一時  
 列辯多羅三觀三誓提の佛慈我が立軸に冥加あらせ給へと禮給ひいもいと尊く天竺の健川座  
 主の天台山もかくやありけん我此山より久く修學せば一世の大願も茲に成就せしと深く喜び  
 師めて法華經をもつて我が本分とさだめ三塔の學業に親み天台章安妙樂の釋疏を熟覽し天台一  
 乘の學を講ずると其一日の學問餘の借三年の修行もなほ及びかたしこゝもあつて當山の役務に  
 勤めて東塔の圓觀坊といふ一院を任職せしめ此ころ靜明經海又心實なさいへる何れも三千  
 次第の上頭にして博學の慧たかし遠長師の常に此等の人は立交り經を講じ釋を論ずるの外他事  
 なく月日を送り給ひけり今朝もまた常にかつ香を拈り日課の御經も心をうつし梵音既々  
 と讀誦し深く佛慈とかながみ給ふも上行無邊行等の本化の大菩薩法華第五の今に出現し法華  
 をもつて廣く湖池の衆生を救ひ給ふべきよし御經に明かなり我佛縁かひなく進では天台傳教  
 見へつ退ては信の上行菩薩山現の時にもいまだ途半らつ何をたのみ誰を師として今經の利縁を  
 佛がんやと沙汰をゆるに膝をうるはしける折や講世は大衆を聚る鐘の聲溪間の雲の霞もりて



三體一餘々と履を曳て講席に出動なり給ひける此日  
 法華の極説大日經の生蘇味の權教力士こ小兒の腕腕此二經に何の論かわらん當山の  
 從大師に至て開基傳教大師の法水忽ち彼の眞言の泥に濁りたりと粗その餘々を擧て席を打て  
 給ひけり我切法華の元祖傳教大師といふ神護國靈元年をもつて生れ名を最澄とよぶ初り山  
 寺の行表僧正を師として六宗を學ぶ後漢土に渡り天台の教法を傳て日本にかへり大いに  
 三論等の六宗を破南都七大寺の高僧の如く起り傳教大師を佛敎と罵る時延暦廿一年正月  
 十九日桓武帝高雄寺へ行幸ありて彼の南都の六宗普賢勝殿等十四人を傳教に召合給ふ日出ぬれ  
 ば屈かくれ法華の大典ひとたび出現して一切の諸經何の光輝かある唐の天台の釋迦に信願して  
 佛號と四百餘州に揚今此傳教の天台に相承して今經を日本に弘通を稱于一聲吼て百獸騰騰  
 如く南都の六宗跡を削り六十餘州傳教大師に歸伏せりまかるに法弟義真圓澄のその法を守  
 り給ひけれども慈覺大師弘法の眞言になづみ又別り理同事勝といふ義を立て玉瓦をそへ酒に  
 毒を加へたるゆうも眞言と法華と習ひ合せて敵山の宗脈を濁りたるよ一此席にねりて首  
 一動ひけるよと一座興ざりて見へよけり兼ての學友尊海この座よれば一けるが蓮長師の袖を以  
 不請論果て我が坊にともなひかへり筑紫背振山の茶を煎ト鹽うち豆よ蕪苺の漬物なを取いで

一應がてらうち解ての物がたり蓮長師のたまふ横この年月天台傳教兩大師の遺教を深く考  
 ふれば慈覺大師こそ心付ね身のこの山にありて其宗流を繼承がら心は誓と誓の袖にも耻ぬ  
 敵對今の一山のこりなく何時か慈覺の宗風も露果たり其事諒を知ずして在す君かひ君のまた  
 いかい思すと語り給へは尊海もさしうつむさで應もせずひそかに其天機秀敏の才智を感下ける  
 蓮長師の一山の孝順みな其眞學に懐き今年元四年午の春横川華芳谷淨光院に住職せしめ圓  
 坊を兼帯して名を三塔よといるか一給ふ三井寺南都高野山の遊學も皆これ敵山傳教の餘力に  
 て春秋あせせ十二年此山に心をこめられ一期の修行全く當山に成熟すとぞ思はれける此程の  
 一代經の要文の處を抄書一三藏要文といふ書を作て學業に示し給ふ猶當山の宗風の亂れたるよ  
 一を時々參會の序をもつて此事を歎き談一給ども承和このかた三百有餘年慈覺の學風此山に  
 中々ひるがへるべきよもあらず同友の智識博學の輩もこれを聽て悦ばず遠て苦々歎おもひけ  
 るもこれ全く傳教大師の化縁こよ斷絶の時節よやあらんと深くあげき思しけるこれより折々  
 京都に出て内日さす大叢山の春のながめよ九重の空いと長閑に百官百司の袖を列ねて参内する  
 ありさままた赤裳史官女上臈達の花見がてらよ神詣を促し都並の壁巖野に若菜を摘土氣を折る  
 すがに京の春氣色夢と悟り一世ありも現るるの移りもて柳櫻をこそさませ一都を春の唐錦  
 ながめあかね風景を遠近見めぐりつゝその夜は五條油の小路天王寺屋をいへる梅箱を商ふ家



に宿り給ひに主善淨本性質無實に一てはむるものゆきはやくも師の尊常ならむと察一一向こ  
 ゝよひらとりの妻もつともは陳露ならすもてな一けるこれより京都へ出てはいつも此天王寺屋  
 ゝやどりを定め王夫婦も他事なく尊敬せ一も不測の大因縁よて後年よ及び主善淨本との善妙縁  
 ともよ法子となり淨本の弘安三年九月十一日をもつて卒一其無通妙宅を明じて寺とな一本蓮寺  
 と號す永録二年中興に及び本國寺日極上人寺號を改む今の妙覺寺これなりさては遠長師の淨本  
 が厚き情を喜びこゝよ滞留な一給ふに其頃圓爾和尚とて普門寺に住一臨濟を弘むる願付あり  
 長師折々この方よ遊び給ひたるに圓爾和尚もその博學智辨を感ト其法弟等に向ひ師を指さ一か  
 ゝる邊量ならでの衆生の導師よの成がた一と語られけるも其頃人いひ傳へて師を起からずも  
 てはやしけるを圓爾の後に一國師とて世に名高く寛元年中九條關白蓮家公の本願と一て一  
 等と建立す遠長師平日の交り深かりけれハ結縁の爲よ大なる冥縁と一本寄附ありしよ程をく  
 壹結構一てこれを京都五山の第四に准し惠日山東福寺といふ今よその贈り一材木の柱となりて  
 これを日蓮柱と稱し世に奇特の利益ありとて割り取者多かりける又同頃靈興寺よ蓮源といふ僧  
 ゝりて曹洞一派の禪と華洛よ弘通す遠長師又此僧も親一み給へり今京都にハ道深禪師圓爾  
 僧といひ又其上よ唐一の禪僧道隆圓爾和尚後に鎌倉建長寺の開山となり一大覺禪師とて世上  
 聞へたる唐僧の來朝して真涌寺の來迎院に住居し世の渴仰大方ならず遠長師これを聞給ひ眞實

等の禪律眞實淨土四宗兼學の大山に一て開基已來宋初より渡り一經論その外佛具等もあまたわ  
 ゝりと聞能儀ひと來迎院よ入道隆禪師の會下にひとみ禪宗の見性成佛の工夫を極一盡す佛子の盛  
 ゝ又交り給ひけり此禪宗といふハ初伽藍樹嚴經金剛經等を宗旨として其宗風他の諸宗に似も  
 つかす大聖世尊一切經を説終り機縁の辯遊跋提河の邊に入滅の時人天四乘五十二願悲愍の深淵  
 と降す迦葉尊者難足山の洞より涅槃變林のもとに來り給ふ如來寶棺の中に在一て華を拈て見せ  
 給へハ人天大會その意を悟る者な一迦葉尊者ひとどり微笑たまふこれ心を以て心よ傳へ正法眼藏  
 涅槃の妙心と名付たり迦葉この佛心を得て此を如來禪と稱すのちに南天竺の迦摩利和尙益且に來  
 ゝり其心印を傳て教外別傳と名乗り此宗門ハ不立文字と立て一切佛經に依らず一代教經ハ月を指  
 ゆびの如く月を見て後指何の用かある經論ハ瘰癧を拭ひ一紙屑佛供は原空を搗つぐる極木なり釋  
 尊の頭を踏で初て佛果を證とどのハ一り腕を切て明悟し猫を殺して悟道一旌の動くにさとり瓦  
 を投て得悟とこれを直指人心見性成佛といふ醍醐經變場を疎んと坐禪工風を專にす凡俗の耳を  
 驚か一愚昧の臆と奪法外不測の宗旨なり此宗の日本に流り一ハ仁安三年釋の樂西天台山の敵驥  
 師より心印を傳へ歸朝有て建仁寺を草創一これより禪流海内に彌布遠長師ハ此宗風よよりとて  
 し禪機を凝一給ひけるが又思立て江州滋賀郡三井寺に 趣給ふこの寺ハ比叡山に先立こと二百  
 餘年天智帝第五の皇子大友の殿宇を廢とし圓城寺と名つけたり本尊彌勒菩薩に一て五十六億



七千萬歳龍華の成道を期する誓深く其三會の願を契らんと初とて入相の鐘は無常の響をつたへ志  
 賀の花園に無我の嵐を觀するもいと尊一當山の中原智證大師と横州の人なり十四歳の時叡山に  
 登り眞和尙の法子となり後慈覺大師に與同一口に天台を唱へ心眞實密部を存し一かも大徳  
 にして三代の帝王の御戒師となり世上の尊敬大たならずかく盛なり一蹟なれば學匠も亦多かり  
 ひとたび其境に入て不測の法理をも尋ばやと其學寮に入て智證大師傳來の書記書録を讀給ふに  
 皆これ慈覺の同論にして寺門山寺とも法華經の蹟を絶一天台傳教そのれもかげもといめせ日  
 本一宗正法よ背き釋尊の本懷を滅却を哀れこの暗のうつゝに迷ふなる一切衆生は何を願どて  
 後の世を助からんと兩眼に御涙をうかめ忙然たる折一もわれ我を一わけ本院の所化見なれぬ僧  
 を伴ひつ運長御坊よ此はその初め此山よ剃髮したる者なるが久しく鎌倉にありて今又ふたゝび  
 歸り登りし善慶といふ沙門なり此寮も同居させよと學頭の下知なるはとよし示せば運長師は唯  
 々と應へ式禮終て宜やうとても床一と友を得つるかな我さいつと一五歳までも鎌倉に住で親  
 一さかたもいと多一關東の勲爵をさかん普僧さへ絶て六年をへ一こに聖路も遠き鎌倉の安否  
 を問うれ一よととめりければ善慶坊は歎息吐我れ前年勲いと願くて師よ誘れて鎌倉に下り  
 大藏なる大慈寺に住思ふも増る府内の繁華かゝるめたき地に棲こそ世にあるかひの果報なれ  
 て送る月日の節とはやみ幾歳ありし白晝の積る病ひも師の坊の館で歸なき我が薄命寺内の親一

の友連ついと懇よといめりたれ近年つゞく鎌倉の凶變に袖うち拂ひかへり來ぬと舌を巻て  
 の物語運長師の耳を聳てその鎌倉の凶變といひかなる事と根葉分て問る善慶膝つくろふされ  
 ばと鎌倉將軍頼朝公とさこへ一二歳の御時關東に下向なり九歳よして征夷大將軍に任せら  
 れ今年三十にも得なり給はずとかく世を憂事と思召給ふその根は北條一家權威にまこり將軍  
 のわれども無が如く其上諸國に非分の沙汰のみ聞へ被是御意をいため給ひ明一と問る御病惱  
 ことに去る寛元元年極月廿九日の事なりさ白き虹唯一筋日輪をつらぬいて一天に跨りたりこの  
 不測と御所のか一と一と將軍家御庭よ下立これを仰見給ひ一と俄と御目眩 棘毛ければいと  
 ぞ其體御癢につかせ給ふこれより雨風度々吹荒て時候順當ならず是を依て其翌の辰の三月將軍  
 寮御心願とあつて鎌倉中の神社佛閣残りなく御願拜あり同四月廿一日御嫡子頼朝公御元服ま一  
 ま一京都へ奏聞のうへ征夷大將軍に任と給ふ御齡のつか六歳なり同七月五日先將軍頼朝公の御  
 齡廿六歳久遠壽量院に入て御飾りををろし入道なり御名を行知と稱一年來の御本懐ありと悦び  
 給ひ一こと心無き下賤の者まで聞も勿躰なくかな一と限りと昔人いひ合世の中何となく物哀れ  
 る願すくなく覺ゆるに打つゝ去年三月の替屋これまで日本にありとも聞ぬ怪しき形なりと思  
 ふ處に今年資治元年未の三月十二日の夜戌時に大ひなる流星いで、丑寅の方より未申の方へ飛  
 渡る其長五丈ばかり虚空をばたるその光り晝の如く鳴轟く響大地に震動して雷電より凄しく人



雲霧を消ぬ同十七日天氣うららかなる長天に黄色なる蝶の數限りもなく飛來り幅一丈餘長十  
 丈ばかり撲撲亂れず恰かも黄色なる旗絹をひるがへすが如く翻々として虚空にひらめきわゆるひ  
 の高く雲間ふかすみ又の近く軒端に舞けるにぞ鎌倉の町中こゝよかゝこと見物せしがごとく破  
 落しと飛散さるもにひろき鎌倉中の人家は飛入て死しぬ昔朱雀院の御宇承平の初常陸下野の  
 兩國に黄色なる胡蝶多く飛りか程なく相馬將門反逆して東國暫く亂れたる事ありきと昔語り  
 せざるに傳へ安んずる心も有り一は同廿一日の事ありき由井が濱の沖俄に紅ひに變じてその色朱を  
 染一たるが如く大海皆血潮となり紅ひの波岸を洗ひ磯は生一磯はも砂も交る種々の貝も磯も濁  
 るその色に染成て珍らしくも又恐ろしと市中の者見物とさへ爲さりけり御所よりの桃樹を始大小  
 名までそれく由井が濱に出馬ありてその不測を見届給ひけり此月十一日奥州津經の浦々海の  
 潮水血に變じのやうき魚數多く死して流よりぬ其長一丈餘手足の人間の如く脚細にして頭と  
 尾間の魚なりよし彼の國司より注進すこれに依て博士を召て御尋ありけるに先例こゝろよか  
 らつ昔文治五年の夏此魚あつて春衛滅亡し又建保元年四月この魚鎌倉の海に見へて和田義盛亂  
 を興しその一門滅亡せり此魚の性異て世の中の不祥なること論なく但し海水の血に變つたるの  
 和漢兩朝前代いまだ其事をさうつといへども大方天下の御大事ならんと言上せりこゝろ彼とい  
 ひ斯事の不吉の凶惡耳目を驚かし鎌倉の上下方長みな面色土のごく變つたのゝき恐ろしき言ん

方なくはべるのど其を見る如く語りければ蓮長師はまたいび敷患し日月二天いまだ地に墮す  
 水の流れ火の燃る此世の滅する邊劫にはよもあらう其上下天下の政道正しく民を撫下方民の五當  
 を守りて五倫亂れずかく正一かる世の中に天地の怒り烈しきり救護國家の佛法に併りたるの者  
 もやそると思ひあまりて口訕に獨言し玉への菩提の問答この不審仰かな京鎌倉のいふもさらな  
 り陸奥筑紫のさかひまで名僧知識の開きたるその宗門の數多く佛法の繁昌の津々浦々のほてま  
 ても神も佛も敬むぬ人とてもなき此國に何を對して辛目を見玉ふべき事かといと詰詞よさるわ  
 ら下神も佛も妙法の法味なければ此國に形もといゆぬ空禪のものけの敷に人替る邪鬼魔王のあ  
 す事より國も衰へ世も亂る嗚呼あさましと言ひ得にいで止し御意を知るよもなき菩提が  
 たがひに顔を見合せてともみ然然たるばかりなりける斯て實治元年も半を過七夕津女の空近く  
 烈曇のたへがたきに時知りおほにはのめかそ桐の一葉も思立南都の大寺高野とも遊學せばや  
 とねがめし三井の學寮に別を告大津より京都に出玉ふに鎌倉に兵亂ありきとて下賤者の癖ど  
 して路に語り門に傳へいと喋々しく聞ゆるよと蓮長師の天王寺屋淨本がもとに立よりて南都よ  
 り問せんと思立しその志を物がたり且また鎌倉の兵亂とはいかなる事よはべるやと尋玉ふに  
 御本の眉根に皺よせしこと昨日註問の書翰をもたらしして六波羅殿の肥録所の庇まで参りたる  
 に侍所の前衆通その始り終りまで詳に聞玉ひたる鎌倉の爲跡その混雜に我が用ひ得難す



一て歸り來ぬ法師も用なき事ながら甲の法樂なり玉へと矢背の姥が手作として貰ひたる初瀬の湯の湯餅折敷も盛て進めつゝとて鎌倉も在て三浦若狭前司泰村とてこへしは鶴が岡入道の家を在ける愛も又秋田城之助義景といふは藤九郎盛長の孫にて代々長谷の甘繩に住居し當朝の執權北條時頼と無二の交りにてこれまた世も威勢を振舞ける此兩家のももに累代の諸侯も一て右府頼朝卿のかた鎌倉の城廓天下の礎石なりけりまかるに此兩家たがひに權威を許ひ年頃快よかずありけるより事起り前司泰村とかく我意を行ひ我がまゝの所行多く將軍家の下知を蕩り非法の働も多かりければ北條時頼深く心を痛め泰村が野心を宥め泰平の謀ごとをなさんと構々に扱ひ給ひければいよゝ心高振増長して無禮の事のみ多くその兄弟一族みな其氣に乘りて見へければ時頼も今のその謀叛の下心を察し用心いとまなかりける此事を聞傳へたる近國の諸士我もくゝと人敷を懸ひ鎌倉さして參着し御所をとりしめ北條家の邸を守護し事仰山に見へければ秋田城之助の折こそよけれと表も忠義の色をあらわし内心に日頃の意趣を暗さんと假に下知を傳へ大會根左衛門尉長春武藏左衛門景頼十郎公義等はしめとて一族同心の謀三浦前司泰村より神護寺の門外に屯して旗を作り五右衛門の紋掲たる旗をさし搦筋進橋の北に陣取たり諸國の御家人すしや軍は始りたるをて選々此手に馳加ふる三浦前司泰村は不惑を討れ

て驚つゝ家臣郎等に手配を傳へ嚴しく防ぎ取らぬ執權北條時頼も今ははや事破は及びたれば是非もかゝと北條陸奥守實時をもつて將軍家の御所を固め北條六郎時定をば討手大將とさだめ立百餘騎をさしむけられければ塔の辻より馳加ふる軍勢雲霞のごとく既に鎌倉大亂も及び老たる親を負泣叫ぶ兒を引携妻と兄とと逃散ふ家財を荷ひ難具を運ぶの狼狽に病人を踏殺し幼兒を倒に抱懷し西へ東へ辻々泣喚るる物凄く修羅阿鼻の惡境を目前こゝに感じけるさてしも敵味方の陣のころは天地もびゞき軍馬の物音地も震動し御防兵衛入道信濃四郎左衛門軍勢をいげまし北の手を攻破る處佐原十郎左衛門泰述同十郎頼運能登左衛門尉これを拒んで血戦し一パーその妻見へざりけるが伊豆國の住人輕又八と名乗て泰村が南の小屋に攻入り向ふ敵三騎まで伐て落し小屋に火を懸たりかば折ふし風烈しく火焰四方に散亂せり三浦の一族はや防ぐべき手立もなくとも逃れぬ運命あれは徒らに焼死んより法華堂に引退き故右大將頼朝卿の御影の前にて自害し前代の御恩に報奉らんと各北の塀をうち破り法華堂さして引て行泰村が舍弟能登守光村の永福寺の惣門の内にて郎等八十騎を隨へて眼に餘る大軍を引受挑み取てありけるが兄泰村が引退くを見て死生を一所よせばやと一方の敵をうち破り法華堂をさして落行を數万の敵軍をびゞく後を惹て追討よと三浦泰村が兄弟毛利入道西阿大隅前司重隆美作前司時綱等返し合ては引討拂ては退きつ漸く法華堂も引入けるにづいて込入る敵軍を白川七郎兄弟岡本太郎垣生



小太郎佐野三郎も防がせて頼朝卿の尊像の前に居並んで高聲に念佛し三浦若狭前司壽村をへつめど一一族二百七十六人家臣二百二十餘人同時に腹を掻切て同ト枕を死てけれハ申の刻より全く戦の果よけり嗚呼此日いかなる日ぞや寶治元年六月五日累代武威を關東にかいやかしたる三浦の一黨夏草に結び夢の跡もなく皆滅亡よ及びける又壽村が妹舞上総權之輔秀胤ハ下総國一の宮大柳の要害に猶籠り近邊を押領し合戦の要害取々ありと注進す依て大須賀左衛門尉胤氏大將とて二千餘騎鎌倉と進發すこの注進櫛の齒を挽が如く京都六波羅へ聞へ海山隔つ九重の空さへ憂る心地なれば關東にすむ民百姓の心のうち思やられていづるのと思つさあへず物語るを遠長師ハ心の底に斯あらん佛法亂れハ王法亂る左もあるべき道理ぞと明ていはれぬ木地の内證も恐ろしき淨世よは成果ける物かなと深き心を岩が根に下湧水のいと淺いらへなり玉いつく其夜は淨本太妻がけりなくといひるも一夜をあかそれより南都に趣き玉ひけり音丹吉奈良の郷といふ帝王六代の都にして昔の句よ八重櫻けふ九重に移はまたれ古き寺々の多く残りて佛法盛の地なればや世に奈良學といひ傳へ古書經論を高くつみて佛學の達者いと多し遠長師ハ獻山にて知己の僧こよあるを紹介とて元興寺よ入給ひ彼の高麗國の慧深和尚の傳來せ唯心無境と立たる三輪宗を學び又傍に我が朝天平七年支那法師の弘め初め俱舍宗の論三十卷を讀み其宗旨を究め給ふこよ又興福寺の僧釋の道昭律師唐にわたつて支那三藏より傳

へたる法相宗といふあり此等の諸宗をそれこれと習ひ併合近きころは東大寺にうつり住い月日を送り給へども奈良の古跡を見物せんいとまもあらず在けるが程うちついで彌生の空のうららかなるに學寮を立出給ひ振さけ見ればはのかそむ春日の山を真中にて南ハ高麗北ハ若州この三の山を羽買の山と詠によみまた三笠の山とも世に傳ふ萬葉集に  
 一鷹の羽買の山を今朝ゆけハ飛火野の原に雉子なくなり。と見へたるも面白くいま幾日ありて若菜摘でんとある野守の池響消の禪に萌いでてねよげよ見ゆる若州を己が臥處と小雄鹿のねさふ一遊ぶのをけさに心らさみて千早振神現の森御手洗川清流るハ水源の春日の社に臨給ふ當社は大宮四社一の御殿と聞へハ武藏地命にして神體慶雲二年この春日野ハ形向ありて天が下の草民を護ますこといと尊く思はれ猶そこへと尋ねまはくれがせども學ぶべき諸宗の經論最多くて心のまよ遊ぶよよなく狹澤の池の匠藤のたまさかに昔を忍び給ふのみ今この東大寺に在りて華嚴宗を修學な一給ふにこれは孝謙天皇勝寶六年夏辨大僧正勅を受けて入唐一廬山の惠遠法師より習傳へ華嚴經よて三界唯一心を立す六相の法門を備へたりまた成實宗とまこへたるハ跡空無生の法理とて獅子窟三藏が造りたる成實論を根とする宗門なりかれこれ學びの道に今年戊申の秋も深くなりけるころ遠長師ハ泉州左界の浦に待入ありて東大寺をうちたち郡山小泉より龍田にかへり山路のゆる霜風よ散て流るハ紅葉のいさよこらばねを洞川の次



よこゝろの勝れて見送る瀬々の唐錦丸曲坂なる石高路に数珠爪操て丸がらかよ善量品を唱へつ  
 徒行給ふ處に僕よ些の襟を持ちめ推名袖の胴服に黒皮の行鷹ト山刀を佩たる人此方を見つ、  
 聲をかけ珠勝の御経いと有がたく聞はべりぬ御身のいつれの御出家にて何處にれもむき給ふゆ  
 と問はれて後を見かへりつ我は遊長とて天台の僧なれと今の天台の天台ならづまゝて諸宗の多  
 かれと凡僧野師の了簡のみ多く佛の教へに似もつかま出家となり一身の任より其を能く學び正  
 さんと南都に高野に學問なす者にへると應給へば其容貌といひ道心といひ世に稀なる御出家  
 かみ我と和泉の國府に横る江川太郎左衛門吉久といへる者なり明日は先祖の忌日なり狂て一夜  
 の供養をうけ我が方に宿り給へと懇にありければ袖振合す多生の縁止がたゝとそがまゝに  
 吉久に伴れ上土門は植をへ一松の縁も不老不死揚り楯に法衣の塵をうち拂ひ威儀容々として入給  
 へば吉久も家の族に意を得させ一間を淨くしらはせつ敷ですゝむる花菟色も香もあゝる契應のや  
 かて一乗の寶を結ぶ大因縁とぞ知られけるかくて遊長師の供養追善の經終り種々の話に取交て  
 自他とも池沫夢幼の身と忘れ後世の誓み疎客也と云事よりて御經に見へたる月の鼠日の鼠  
 といふ事とさへ語りいで給ふ茲に一人ありて廣き野原に出て虎に追れて逃避ひ數十丈の斷崖よ  
 落入たり斯の協ハトと一株の草を取つる漸く其身は取どりたれと下を見れば物凄き淵に長十丈  
 ばかりの野鼠落なば呑んと待つけたり上を看みぐれれば彼の虎のも一登らば咬んと睨まへたる有

獲はれりいかゞせんぞ魂も身にそのす恐ろしく有けるよさづくよりか二頭の鼠いでかば  
 るに彼の命と取絶りたる草の根を咬切にぞ其人の心のうちいかに悲しがるらんと思ひやら  
 せ給へ我等衆生の身の上全くかくのごとくにて人の上のわらぬか一前の世に造り一惡業の虎  
 と成て廻來りこれに追れて六道の廣き原中よまよひ唯今三惡道の深き崖に落入らん處をいか  
 かる過去に善根やありけん一株の草の手に觸りてとそれを命を取つて漸く人間と生たり前の  
 世を顧みれば惡業の虎の腹腹反して睨まへ居り後の世を見渡せば無量罪惡の網敵師を怒らして  
 神懸たるを哀れなるか我々がいのちとすがる草の根を月の鼠日の鼠といふふたつの鼠かゝる  
 くに出來り昨日の正月今の二月けふの朔日むすの二日と頼て限りある草の葉を咬つくさくれ  
 なの殺の世いかに成ゆくらんされば佛法を知らずて此の世にひなしく月日を送る人を智者  
 といひんか賢人と妻んかよく思ひのかり給へと語り給ふにぞ主吉久をのトめ一家の男女こ  
 れをさへ一座をりてともに菩提の心を誓ひけるこれより年曆十五年弘長壬戌の夏伊豆の佛  
 東に流罪の頃江川吉久は同豆州垂山といふ地に移り住て在ければ不圖そこに再會一本化の化導  
 に預りて法弟となるべき良縁を茲に結び給ひしも宿世奇特の相遇とぞ思われければそれより遊長  
 師の堺津にいたり古郷の人に値て御兩親の雁使をもさく道善御坊まで恙なくいすすよとをさへ  
 喜びの眉を開き給ひ其方へ贈るべき書などを認め此後古郷の物語に思ひつ日數を重ね給ひけるか



事あんとする年華に飛きたるに、比奈長へ立歸り東大寺より紹介を求め招提寺の梅檀林に入給ひける。當寺は天平勝寶六年聖武帝府の鑑真和尚を我が朝へ請待し御師依漢からづ、紫宸殿の側に大戒壇を建て帝をばとり大臣公卿下民に至るまで受戒の聲、四萬餘人この招提寺の戒行律宗の聲なり。統て三論俱舍法相成實華嚴律これと南都の六宗といふ蓮長師の此諸宗の論釋を學びて、れより藥師寺の經藏に入て一切經をひらき彼の宗々の流儀を逐一御經に照合て一パー心と稱り給ふ。これ建長元年の頃にて年餘廿八才の時なりけら。茲又同國平郡法隆寺と云ひ斑鳩の宮の殿にて聖徳太子勝曼經御講讀の舊跡あれば、蓮長師も頻々其跡のしたりて此寺に入て三時成實を講論し程なく高野山に登らんと紀の路をさして旅立給ひけり。高野山と云ふこへ一紀州伊都郡に属すを靈山として昔弘法大師居士より日本に歸り給ふ時かの唐の淡にて船に乗り三結と手に持て日本の方に向ひ此三結大日如來有縁の地と止まれと空中に授給ひければ其三結地なればとも高く雲に入日本の方へ飛去りけり。船中の者これを見て驚歎せざるはな。大同元年丙戌十月廿三日歸朝一嵯峨天皇の御戒師となり給ひければ彼の唐にて投たる三結いつくも落止りしやと日本一州に勅命有てその在處を尋ねしむるに紀州伊都郡高野山にありけると奏聞す天子御威嚴在まて弘仁七年弘法大師をもつて彼の山を開かしめ金堂を建て丈六の阿闍佛八尺五寸の四菩薩を建今の高野山金剛藏寺是なり。蓮長師の紀の路より花坂よかへり矢立といへる處まで

登り茲に一パー休息つゝこゝより俾ひ此山の僧一人加田より歸るに連立嶮一き坂を登り給ふに路の右りに捨石とて手をもて扱たる如き岩角あり又押搦岩とて大磐石を押わけ下面より左りの手の跡凹かに見ゆる彼思ひかななる故ありやと尋給ふ。路邊の僧うち咲嗽さてとよむか。弘法大師此山を開玉ひに大師の悲母うれしく思ひ登山な給ふを弘法大師れしとらめまらせ女人結界の山なれば協まらさし給給へば母公の直やう我が子の開きたる山に其母の登られぬ道程やわると強て登山し給ひけれ。一山俄に鳴動して火を降せければ母公の御身たちまちも焼焦れんとす。大師愕てかたへの巖を押搦その陰に母公を隠し給へり。母公御怒の牙を咬わたりの岩をまたかへに扱給へばその御手の跡岩角につきぬ。今の扱石押搦石これなり。遺恨やるかたなく猶登り玉ふに鏡石とて石面瑠々として能物の形をうつと石あり母公我が姿の此石に移るを見たまふに、變うち亂れ眼血一り惡鬼の形に似たり我が身あがらもれそろし。思ひ召兎角女人の身の生身の佛も値奉らず。得脱かなひ難しと明めこれより天野に下り巖窟に籠り茲母出世の處を得て入定なり給ひ。天野慈尊院彌勒堂これなりと喘ぎくいと誇りかに物語るを蓮長師の唯聲々といらへつゝ心のうちと思すやう。淺猿哉弘法大師唐に渡り天竺より越長難修行の功積で御身ひとりの佛果を得たれ母を救ひまらさすと誇らず。現在この山に地獄の炭を降せ牙を咬石を撰て恨を末世に傳へ恥を後昆に晒めせ奉り。大罪無量徳劫無間の愆よその身を焦すとも此罪積消難



かゝるべし佛敎に父母の恩第一と定め備身より五刑三千罪不孝より大なるのなりと見へたりた  
 とひ其身天子の御戒師となり下方民に生如来と仰がるゝとも豈本意なき事ありやも此事  
 實あらば眞言の宗門には三界の女人たすかるべき道なく一切衆生父母も奉行の道絶のべし心  
 に秘して山吹のさへ色ある花坂より實をも結ばぬ無益語のじか一語りに路りかめ五十八町橋  
 内もや一程近くありよけるこれより密殿の淨域に入頭をめぐらして其山嶽をうち詠め給ふに花  
 葉不動坂いづれも五十有余町の險路を陟り上峯又廣き平地にて一四嶽八山屹立して内に大日  
 靈王の淨土を開東西の龍の臥が如くにして流をくま南北の虎の踞するに似て坊舎その間に立  
 違ねたり五川の水源より五道三毒の水を流し御廟の橋は五障造惡の濁穢渡さず扁栢黒松いや  
 茂り夏青塞々伽藍の澄淨又曉の枕に弘法僧聲すみて無明の夢をたせろかす此鳥はその形容  
 馬橋も似てその色碧綠なり其體聲弘法僧と喚が如一歌よ  
 我が國の御法の遺の弘けれを鳥も唱ふる佛法僧かゝる。後鳥羽院の御製も思ひ出られ誠は佛  
 門の柱石鎮護國家の山とぞ思ひければ當山の起源たる眞言宗といふは同一弘法のうちにも釋尊  
 の教法と大ひに事かゝり用盧舍那法身大日如来虚空の阿伽陀天法界宮にいまして金剛薩埵の  
 實に口より眞言手に手に印契と結び意に觀野を開くべき此三密の秘法を傳へこれを大日經と名づ  
 け給ひ又密敎と定む釋迦如来の同ト佛なれども應身下劣の凡軀よりてその説たる御經も又いや

しくこれを顯敎と名づく其相違といひて釋尊の無明の凡夫にして大日如来の履探も及ばす又  
 大日經の圓滿具足の密法よりて法華經の如きはその牛飼もたらすといへり此宗言の中天竺の  
 善無畏三藏と云者將來して唐土よ渡り玄宗皇帝の御師となりて眞言大日經を弘通す金剛智三藏  
 不空三藏ついでて天竺より來て其宗門をたつる此時に當て漢土四百餘州眞言大日經を流布せり本  
 朝に空海和尙實龜五年を以て讃岐國多度郡に生れ延暦廿三年五月十二日三十二歳よりて勅命  
 を蒙り唐に渡り青龍寺の慈果和尙より眞言密法を傳來して日本よ歸り彼の傳敎の弘めたる法華  
 經の位を考ふれば顯密合その中に大日經第一華嚴經第二法華經の第三よりて大日實經に就れり  
 法華の類の戲論とて幼稚もの、顯密に似たりと罵り高野山を開て眞言の二宗を弘む一宗の君尊  
 徹法からぞ萬民誰か仰ざらん弘仁九年の春天下の疫癘を攘除かんと祈り玉ひかり夜中に日輪  
 出たり又朝廷にて即身成佛といふ事を疑ひしかば手に智華の印を轉んで南方に向て現身に佛と  
 なり光明を放けれり天子の玉の冠を傾け大臣百官地上みれよ玉ひけりかくて承和二年三  
 月廿一日金剛峯寺より手に毘盧の印契を結ひて入定なり玉ひけりそれより後八十七年を經て  
 延喜廿一年十月弘法大師と姓名を受給ふかゝる尊の五智の瓶水三密の法印かゝるしく他家に  
 授くべきありあらざりて運長師のとりなく其真義を研究せんと座より禮ひ誓の中に一藏を送り明  
 れば建長二年の春どひかへ雲間の草の初みどり都の花より珍らしく心も春といふみつゝ高野を







善日に侍るかといひ入れて先生いたと呆れ幼稚ぬしへ見處たるを年華高くて忘れは我ながられぞまゝかろきといひ歸て一別以來の應答もむかへを思ひ出けり此儒者といふは鎌倉二代の將軍頼朝公の其頃より比企の判官能員とて世に時々に一稚貴の家さるを北條時政が攻子の方と心を合せ腹悪くも能員をわのが邸に欺き迎へ名越の亭にてたま討そのまゝ手勢を引具して比企が邸へ押寄つゝ不意を伐たる殘忍毒毒比企の一族のこりなく邪見の及に身を裂れ一門こに斷絶す其時判官能員がいとく季の男子ありけりそれさへ殺し捨へきとこの頃比企の親族に伯耆坊とて戒行堅固の沙門あり鎌倉の北山の内なる龍菩提寺に住けるが此事をさへつ身を捨てその稚兒を法衣の袖に附うけてその玉の緒も取どめつ其儘に成がたしと房州に流されし此兒の二歳の時なりけりこれより配所も人と成貫名の家も程近けれを訪ねとつれ罪の配所の艱難をかたり互ひよ心をなぐさめ給ひける其後は比企氏も伯耆坊もともなけれ京都に登り衰ふ東寺に入て出家となりぬと聞へ置實は才學いと頼母よく經學文章拙ならねば流罪のつみ咎も代る月日の久しく年々繁き諸國の成敗今も毛を吹紙を求むる人もあらじと儒をもて家も興大學生三郎能本と名乗都の人と仰がれて何不足なき身なりけり運長師のむかしの好といひ之儒道にも望み京都ありけれを折こそよれと大學三郎も厚く交り 堯舜以來周公孔子の道とする仁義五常の教のものとす時時論議の儒書を研究能本に學びたまひ一時能本歎息一師の

才智にて儒者となり給へ世上に功高し人倫も益あらん惜哉法外無心の佛道も身を陷給ひしことよと歎かれけれ運長師の體を正し先生その儒を知て未其佛を知給はず唐土宋の世に觀文殿の大學士張商英といふ人その初め強達博學のさへありて大觀四年六月召し應下て參政し始めて徽宗皇帝に御目見ありしに此頃久しく旱魃にありけるが此夜俄に大雨降出天下を潤しければ徽宗御 悅斜みらすこれ張商英が徳の雨なりとて褒封を染て商英の二字を大學に書して賜ひきこれより位階丞相に登り天下の政事にからつらひ其頃無雙の儒者なりしが或時大寺にて釋尊の一代藏經たかくつんで塵よく莊嚴し燈明を點し香を焚いと飾りなす張商英これをみて憤りを含み天竺邊士の夷狄等が書し無益の書籍をかきまてに尊敬することいひれなし從來佛といふい虚無空門の教もして其體非すその體なき道を求んとて迷ふ人これ多し我れこれより取かへり愚昧の邪説と進倒さんすと家に歸り久しく籠りて無佛論といふ書をかく其妻向氏あるとき夫婦は問君は日夜何事を爲給ふや張商英答て見れ無佛論を書て彼佛法を破らんとし其妻笑て無佛論といひんに何の論かあらん先有佛論を書て佛道を篤と見あきらめ後にこそ無佛論もよかるべしとありしかば張商英默然として詞なくこれより心よかけて一切の經論を讀漸く儒道佛道一致なる事と辨へ大ひに佛教を扶たりとさく我こゝろみよ些これをいひん斯す地の始終りを佛は成住壞空の四劫とて無量萬々年限り知れぬ劫を説誓の邵康節は一元十二萬年とて此天地の滅すとい



佛の三世を教へ備道よと一世を示す其説とてろに大小あるの其道に大小あるゆゑなり譬の聲  
 辯といふる虫はその朝生れてその朝直に死す世に明暮ある事を知らず又聲は夏生して夏終る世  
 界に春秋あるを知るによしなり周公孔子の忠孝仁義を教へて備道といふも釋迦牟尼世尊の地獄  
 畜生人間等の十界を立て備道を教ふるも唯夫一尺と一丈との長短の差別にて其教法もとより一な  
 り天地の間に二の道なく愚人に二の教のあかるべし我が佛門に不殺生戒とて物の命を取ざるの  
 備道に示す仁なるべし不偷盜戒とて盜せざるの義を守り不邪淫戒とて道ならぬ婦女を犯さ  
 んば禮多し不妄語戒とて人を欺らざるの信と云べし不飲酒戒とて酒飲事を戒めりたるの本  
 戒と失つされど教ふる智にめらすや君が仁義禮智信の五常も我が殺盜淫妄酒の五戒と別なるも  
 のと思ひ給ふや此五常五戒と持て身を慎むの戒なり 志しを善道よとだむるの定あり此二法を  
 明へたるの智慧なりこの戒定慧の三學の身を修め家を善く直道の根本なりされば五戒三學を修  
 行する人家に一人われは其家二人よく治り百人これを行へば千人和順ならん此教千萬人よ及さ  
 ん百萬の人ねのつから陸一等ひ家に愚刑罰國にすくなければ國を治り天下を平かにするの道外  
 り求へからず法華經第六の卷には世を治る語言一切みな我が正法なりと佛の説たまへり先生の  
 善業と立給へる備道のもて我が佛法十界のうち唯人間一界の教にてそれも佛の道なりと云ら  
 せ給つて在るにやと齒ふ衣させぬ物語に大學三郎能本の格の側に手をさし入れ黙然として始終

をさしてありけるがこれより 志を佛業よ憑ひ備を教へ佛と學び魚と水との交りも後年  
 再會し大士の化導を扶つて其身も剃髮して法弟となり家さへ轉して寺となし比企が谷妙本寺本  
 巧院日學と喚れし世にも不測の前途なりけるかくて蓮長師のこの比企氏の親かりける冷泉  
 宗にたよりて我が日の本の教なる教島の道をさかばやとこの事を能本よ語給ひければ其の  
 御よりとて能本よ案内せられて冷泉宗を尋たまふ今の冷泉高僧といふの定家卿の御子にて  
 代々既道の名家なりそのうへ去つ寶治二年勅命もて續後集といふる歌書二十卷を撰びて歌  
 にあづかり給ひしよりいよく其家かちやとて學びの門人は八百日ゆく漢の砂の數多し蓮長師  
 の掃所の杉原十束よ字賀の昆布を取るとつ心ばかりの路の宿儀 夫よまた一つ、式體正しくね  
 となし給ひければ爲家卿の柳さびの立烏帽子に標色の水干を着し立出て面陣しその志の遠から  
 んを祝ひ喜びつとて宣ふやう我が教島の道といふの天地の成の隨意直なる人の心を種として萬  
 の首の葉をいひいでし尾上の松の霞は咽び谷の柏の風に喚ぐも昔その雨に籠なる神代のつた  
 ん取らも初學初心の聲に唯その道を語ることも甘辛と味ひの味するのみ其身は益なり直なる  
 道の味はみづから嘗て知には如く皇國學は我が國の古き書類を讀こそよけれとまづ古事記神代  
 の巻を取らでし授けるそれより蓮長師の日にしこの許よ立入て古書をもと問明らめ和歌よの  
 奈良の都やで古言たしり萬葉集神代久しく傳へてしそのてよを初めとて秘事多し歌の



まで心益に學びたまひけるに爲家卿もその俊才の器量を感じおぼせしが又和歌を詠たる筆  
 と見そなはし此僧の才學といひ又その手蹟の妙なること道風空海佐理行成卿これ本朝の名筆  
 とつたへよび我が家も其筆跡は藏し持りかゝるに此僧の書法の絶妙なること彼の四人に較ぶ  
 ともまさしく劣らぬかしと舌を巻て驚きつこれより爲家卿の深く師を尊敬し文庫も秘たる  
 歌書のいろく取出て其表題を師にかゝせ深く秘藏なり玉以今に其御家に傳へけるとなんこの  
 頃蓮長師のしをらく暇を見合東寺に遊び玉ふ此寺の山城國紀伊郡に同じ秘藏法華勸修山教王護  
 國寺號て嵯峨天皇の建立なりといへり此寺の法華堂に眞廣法師といふ僧ありて一度師に相見て  
 一さうに其智徳を慕ひ厚く交り尊敬大かたならせ有けるが此眞廣の紹介にて東寺仁和寺の學寺  
 室入眞言に廣澤の二流あるも大概これを學び玉ひけるとかや  
 眞廣法師は此眞廣と結び後弘安四年辛巳の春老病を杖と扶けられ遠く身延山に登りて本  
 門の大戒をうけそれより法華經一千六百二十部を誦誦せり大士滅後の日朝聖人に法を問答  
 ぶ經を讀て本化の宗を修行す其東寺の法華堂今に我が宗門の一寺と成て成就山法華寺とて  
 靈跡を遺せり  
 一日蓮長師東寺の法華堂にれば一眞廣法師の願望にまかせ法華の開經無量義經を誦讀なり給  
 ふに眞廣の梅檀を柱らせ頂を低て其梵音をまなすまじしたる折油の小路なる淨本の聲來てその微

妙の誦經は會釋も遺れ竹縁に蹠り揚り共に聞法の縁を結びけるが御經終てるといふやう今日  
 用筋わりてこれより直に天王寺に往へる御師の望をもかねて其僧寮へ願置たればさだめて書  
 の書類も取いだして置つらん障なくばあそびがてらに往たまへ御伴いまわらせんとあるに聞  
 喜び給ひ御身の用の妨ならずは伴ひてよとうち連て淀川づたへ難波なる天王寺に趣き給ひけ  
 りこれ津の國東生郡にある古梵刹にて用明天皇二年聖德太子みづから淀河の館にうち向  
 せ玉ふ時白膠木をもつて持國毘沙門廣目增長の四大天王を刻み怨敵退散の冥助を祈り物部守  
 を誅戮して此寺を造立し四天王寺と號す日本國佛法最初の靈場にて西の門に大鳥居をたて高  
 二丈五尺賴は小野道風の筆よいて釋迦如來轉法輪處當極樂土東門中心の十六字を四行に書す蓮  
 長師は此を仰き見つこの寺に入り敏達天皇六年百濟國より始て渡り一經論又聖德太子手づから  
 書たまひ一法華勝曼維摩の三經の註釋はトめ許多の書籍を拜見し終り京都よかへりたまふ路の  
 ゆくては佐女牛の八幡宮に參詣し京都より比叡山に歸り横川淨光院よひをみて専天台の事  
 訶止觀を讀智者大師の己心中の法門を了解し天台の藥王菩薩の後身傳教の天台の再臨ある其法  
 門の次第古今獨歩の妙説なるを悟り給ふ然るに比叡山は宗風亂れて諸派に別れ檀那流悲心流安  
 然流など互に其流を争へども龜の甲の毛の長短兔の角の有無にて云に足ざる論なれば正統  
 肯たまひす唯傳教大師の正義を求たまふのみこれまで數年諸宗よわたり一切經の披覽をへ能



圓宗守護  
の三十番  
神叡山  
影向小









名地を惜み素綱に纏へる料なりとて加賀綱一匹に別離の涙をそそぎ馬の口むけに成給ひける  
 これより遠長師は京都より出て年頃日來漢からより一淨本がもとよ音信晴國の事を告たまひしに  
 夫師は驚き餘日もあらず冬空の雲備るすきのふけふ御出家の御身にいらづとも假の宿なるを何  
 うとき給ふ事かはと其誠實にとりゆられ振分がたき旅の袖今年この新玉の巻をひかへて  
 寝くさゆる日影より立ち立たまふ淨本夫婦のどいめかね美濃上品の袷衣綿の帽子は樽子手巾城  
 の末廣取そろへ未消殘る雪路は情も厚き温草鞋をころづくの鏡別を受たまつゝ腹を告心  
 そぐの法の爲世に鍛たる鏡石心本國安房に立歸り身命を三寶に奉り此法華經を弘通せんと今日  
 九重にさく花の帝都をあとに見なつゝ霞ととも打立て吾妻をさうて下りたまひけるこゝに  
 伊勢天照皇太神とてこへへ日本開闢天照一ます御神の宗廟にて人皇の始め神武天皇より五  
 百三十餘年の間は禁庭の内天子の御坐近く崇り祀りたまひ一かき十代崇神天皇の六年神と同皇  
 なるとたそれみ給ひ始めて御廟を和州笠置の里よいとなみ内裏よいませし神代をこゝに移し  
 り皇女豐饒入姫尊をもつて神に事一りたまふ年後大和姫尊これにかりて神廟に事ふそれよ  
 り神廟に任せて神を遷し改りたること十四次遷仁天皇二十六年勢州渡會郡五十鈴川の水邊に  
 遷るるとよし神代に依て神廟を遷す今の伊勢の神廟これなり遠長師は道と伊勢ももとり  
 ●山淨明寺といふは天台宗に於て此寺の住僧は叡山にての知己ありければこゝにやせりて旅の

を解神廟に詣り玉ふ神路山春曉子鳥よびつれて吹神風ものをかなるみもとそ川の水清み移  
 八千代の若草杉のむら立竊くとよびいまだ廣前にぬかづきて神拜終り御經取出しとも静  
 法施の時をうつ玉ふ四邊まづけり神殿の扉を隔て鈴の音いともかすけく皇々とひら  
 神にかけ神鏡より輝と音して輝く光明樹々の枝葉も神垣も同ト色なる府紫金色内外へだて  
 八百萬神も納受とみぬにけり師の此奇瑞をかこみつ神前近く進みより傳らく天照皇太神は  
 本地久成の釋尊にて迹を東海秋津洲に靈玉ひ衆生の利益百萬餘載正像二千の其間の法華述門を  
 もつて法統として威光精力を増たまひ今末法第五の濁世に當り諸經の利益盡滅たりとわれハ  
 衆神も無明濁惡の世に堪たまひ此述土と捨て本覺の妙土に歸たまふらん此事御經文に於て  
 長坂よりこれを知れり我輩ならぬ身なれども佛勸まかせ法華本門を此神洲に弘通して末法  
 衆の闇をてらさんとぞ神慮いかにとありけれハ大地六變を靈動せりこれ此御經末法に流しと  
 地動瑞とぞ知られけるこれより靈時淨明寺にとりまりて日にく神廟に詣り法樂の體經いと  
 響く聞えける時に又妙見大菩薩の示現も有て今に其地に妙見町の名を残す者これ正法の不思議  
 とぞ思われける

間の山淨明寺に大士こゝに靈體の跡手づから彫刻し玉ひとて一蓮菩薩の本尊その下に  
 長六年甲寅四月十六日日蓮敬白と十五字を石面に彫附たり衆するよ宗旨建立の翌年鎌倉  
 日蓮大士異實傳 六十三



果が谷に在りて天照大神法皇の爲書賜給ひしを鏡の石に影てこゝと見しものと思はるる傳の説又冥途輪等その理當らず

神風や伊勢の社の感應奇瑞心よかけし注連繩日も霜氷さ春霞翅はやりてゆく瀧雁の占郷いそぐ旅の友日數かさねて房國の彌生の空も十歳経歸りて見れやいとけなき稚遊びよ我植一門の構もや老て茂るを宿の目當に蓮長唯今歸國せりとさきて次郎は歡びつ母梅菊の取分て轉か如く走り出は種どかし洗足すいりそれかれと旅の疲れをいたはりて積る話ば四方山よ今を春節と出る草葉の數も及びなき其喜ひの知られけり父の次郎の心づけ何時くまでもこの宿にとりまはしう思へとも道善御坊もさいつ頃より蓮長の安否の聞はへらすやと厥を幾度か所化付や登見をたこて問たまひさいとき御師に見はわげ厚き情を報てよといそがせば蓮長師も意どなてやかて清澄は登給ひ諸佛坊にたとひ給ひたるに師の蓮善の宿席一席も居らず嫌みて年月寺が事問にその憔悴もみえざるはとて喜でうち笑ひ又修行にも程のわれ老たる我久く咬を思ひせたるの腹たゝとて呵も一つ俯時さらぬ袖の露まはれまのなかりけり蓮長師は慈恵につゝんで在すのみ事を委細に述べたまひせもその話の佛法の事移らんとすれば色を和け詞を細く一敷山の峯の高かりき高野山の麓かりきと他の話に紛らして更ふ佛法の事にわたり給はす師の御坊も亦慈悲愛護してそのみの修行の事も問給はず相互よ心懸む物語よ時を移し給ひけ

又別派の法兄弟圓照淨願後淨始とてればなき離僧兒孫までかゝるゝ無事を脱しぬ又師の坊の人を馳て次郎夫婦に悦をのべ給へば次郎重忠も使ともよ山に登り道善御坊は式禮一禮からぬ慈恵を謝しへるは道善の手の舞足の踏をいらす庫裏の司を召換で蓮長師のめ其が父も亦師内の僧どもへも些の饗應よわれかれと指揮あるに順て折敷の木椀に豆腐の羹黒煮の蔬とへ持出る弦鍋の備後の酒の味に似ぬ其片白は許しても肉はゆるさぬ差酢の和布煎煮の糖餅とりすゝり過飲一盞の賑はしく飯後の菓子に糖餅に糖菓をさへ添さしつ最十分のもてあしよ春の日影もたそがれたれば貫名次郎の道善も厚き造作の喜びをのべ又蓮長師を見かへりて明の眼を實ふて來ませやといひさして足下暗き夕黒を送る奴僕に松火にさし照させて高低と麓の方よ歸けり蓮長師の聖の朝御坊も首て山を下り小港にいたり玉ひりに慈父重忠機嫌よく師を側近く招きよせ昨師の御坊の我にこそかま直やう此山に僧多く我法弟あまた有なれ我山を譲るべし此蓮長も限るか我も六十を超たれ程なく寺を彼にゆづり心安かる身とならば我身の傍侍御身違も老の特怙にわらずやと語たまふと聞つけこれまで長き旅住居一處不住の癖つきて又鎌倉よ往もやする京に上やとぬらんと御師も我も心よかへり侍かこれより心たちつけて彼清澄の主となり人も仰が其身の立身登庸のみか我も夫婦も世の人に善見持たりと羨まれ此世後の世安かるべしと思さすやとありけるに蓮長師の默頭をば一思案よ枕たまひけるか武藏館にわ

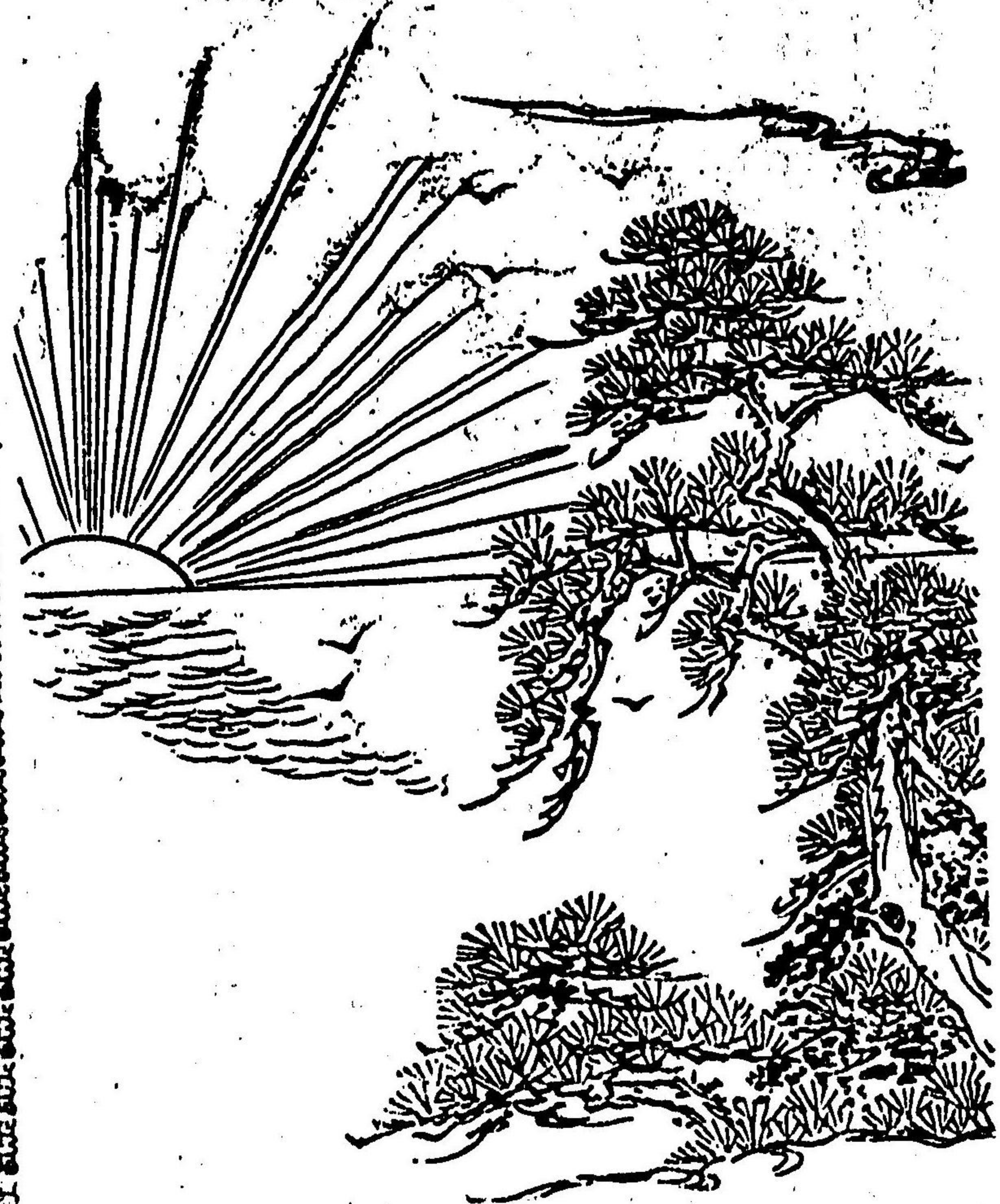


らねばならずが、思てたもふにも言で果なき事ならねば思ひ切て宣やうわれこの歳月釋尊の御  
 體を幾度か拜み奉りしに當時日本に弘まりし念佛真言釋尊の諸宗の祖師に、試多しその誤を傳  
 へても其とも知らぬ八宗九宗堂塔沙門のありさまの佛法教旨を見ゆれども更にかひなき脱處の  
 救ごに佛の入滅より正像二千の時くれて今は末法第の闕其を照すべきは法華經に限るなる佛  
 の教を身に受て妙法の蓮華を一天に咲せんす大願すでよ決定せりたとひ八宗九宗よわたまる、  
 ども其をばさらよ念とせず強盛に説のべて世を救ふこそ末法の本因妙の立行ぞと御經にの地  
 はべりぬと詞をばつかよ語りたまへば母梅菊の法衣の袖に取絶麻をし、わとはいのねども道徳御  
 坊の深情と慈父の今の詞どかれこれと思合せて餘の事に心移して給へるなど女の胸の井  
 の淺きものから洩いで夫婦次郎を勸つゝどもにその弘通の志を贈給ふあさましども蓮長師の  
 しく手を支へ元より出家と成給ひし衣衣に富で位高く榮耀を求むる爲よりあらじ父母の御手  
 を離て廿一年千辛萬苦も法の爲にせし學問修行その効験で御經の大小相實顯密の諸宗の強  
 理を直下に見ひし身をも惜まらず末法の衆生を救ひ得せんと身も不應大願も佛の教是非なし  
 と心定めてあるものを今父母の障たまふこれ唯事ども思ひれすむかし唐の天台大師法華四  
 妙の觀念を疑して在ければ父母左右の障により深ながらに其行法と妨給ひし事ありこれを御  
 經よの惡鬼入其身と説給ひ蓮長いと一と思召御兩親の淨心に惡鬼夜叉のつけ入て慈悲の詞に叙

をかしく今正法を妨など覺ゆるぞ、熟思しかへられよ受がたき人界も生をうけ値がたき佛  
 教も過奉りもし今生を厭止なばいつの世にか菩提を得てん生々世々無益に捨たる身の骨は杖に  
 山とも成ぬべし其中は佛法の御爲も棄たる骨の指一本たよありども覺せず幾生か問恩愛別離に  
 そいざたる涙の大海の水より多からんもし其うちも佛法の御爲も涙一滴もあるあらばか、  
 る凡夫と生いせし世度優曇華の時を得て身を傷ひ命を捨て佛法を修行し御兩親の御菩提を助け  
 一切衆生を救はんこそ出家となりし面目ならんぞ稚幼ときより何ひとつ鬼の毛の尖の露はせ  
 も親にそむかぬ蓮長が本懐大事を身に受て篤く教導なし給ひしよと御父次郎も稍顔面のいろ解  
 て善らぬ事を爲見とてそれも定まる因縁なるをまして廣る大千世界人も渡さぬ善海も法の御船  
 と身をなして多くの人を救へき平等慈悲の心をばいかてと、めん止など妻梅菊をも言諭し給ふ  
 にぞ蓮長師へ兩親をよし拜みその御詞こそ廣宣流布の大願も満足すべき切なりと御歡喜の色見  
 ぬて清澄に歸山なし給ひけり今年の春も稍暮て卯津木花さく夏山の茂る樹間の清澄よこゝろ世  
 して思すやう今歳正しく如來の滅後二千二百一年に相當に天の二を以て清く地の一を得て奉く  
 玉公の一を建て天下を治たまふ況我が大覺世尊一佛衆を以て一大事因縁と説一問釋提の一切衆  
 生の爲に一成道を示したまふ一の數載ももつて塔中別付も與當せり此時を過すべからずと卯月  
 末の二日より一室に籠り香を焚て大禪定に入給ひ時に御齡三十二歳建長五年四月二十八日  
 日蓮大士御實傳



建長五年四月八日  
高祖朝  
高士  
初日  
題目  
給  
吟





の空はからかよ旭日東天にかいやすき登り給ふ時安祥に三晃より起て念珠を御掌に懸ながら旭日に向ひ高聲よ南無妙法蓮華經と十遍ばかり唱へさせ給ひけり其山々の稍吹夜半の嵐の音絶て今朝の高嶺に萬代と唯一聲の誓の音これと二千二百一年の昔大聖世尊より上行菩薩附風ありし一呼百諾の金言末法相應本因下種の題目といふなり聞くも此本化大慈の日輪今東海にさ一登り平侍大慈の光明大千界を照し盡未來際の間を除たすよ始にして誠た法運開闢の時節とぞ思われける此日兼て人を馳て觸たりければ午の刻頃より龍の男女檀越の人と別て常郡の地頭東條左衛門景信も若侍に下僕召連忍びやかよ登山す南面の本堂に雖も得立ぬ參詣は今日しも當山の藤長坊數年京師の功積で歸來て此山に始て法を説なれりいかなる尊き事ありや都學びの法因を聞さしものとかしきしく波羅婆梨多耶の圓言と南無阿陀の念佛よまよしつ鳴も止ざりけり藤長師の出世の太鼓をうたせ除くと高座にのぼり講書教誨よ心を澄せ四弘誓願を唱つゝ法蓮經の經を解第六の經を讀めけたまひ顔色と和氣梵音まづかよ宣やう我年來一切經論に百廢く諸宗を學びたり八宗十宗見ざる事なく聞ざる事なし大集月藏經の第九の卷を見るに如來入滅より五百年の間とは解脱の時とて取よ成佛する人多し又次の五百年を以て禪定の時とて坐禪工夫を凝し得道する者多しこれまでも正法千年といふ又次の五百年を以て開闢の時とて能御經を嚴修行して佛道を乘る又次の五百年は法華の時とて靈塔伽藍を造りもて利益を得べき時節なりこれを佛

の千年といふ此二千年過終て後五百年を白法隱沒の時と名づけ如來一代の聖經利益一切に盡る一切衆生成佛の運たなたりこれ末法萬年の始あり其うへ正法二千年の間は本已有善とて佛よ成へる種を兼て釋尊より植置れたる衆生なり今末法よ入て二百年當世の衆生の本未有善とて本より新よす種を植ざる赤凡夫也抑佛の種といふの妙法蓮華經の五字なり此事經文に明白なるぞ然るを淨土宗の法然の小學下劣の念佛を弘むるぞと選擇集といふ書を筆て其法華經を讀み閉ると罵り願宗は教外別傳とて法華經を蕪どり眞言は天に二の目なく國に二の王なきものと大日如來を本佛と立て釋尊を落し法華の大日の應取にも足らずと謗り建宗よ二百五十劫三寶を算へ持て大乘法華の經玉よ隨ずかゝる諸宗の邪流を以法華經第二譬喻品に佛説て宣はく佛の種を斷す者なり其人命終て無間地獄に落て無量劫ももうかふ時なかるべしと見へたるを圖り眼あらんものつこれを見聞て邪正を辨へよ念佛の無間に隨る惡法願宗の天魔の眷屬眞言の佛を亡す邪法律宗の國賊なる事敢て私の詞にあらす神御經文にて見定たり諸宗無得道隨地獄の眞元法華獨一の利益さらば疑ひし時知鳥の不知歸今の野井に聲高し山田の早苗植後れ實のりの佛に後悔すな時の今法蓮經流布の時我はこれ如來の使あるはと右手に御經たかく捧げ左手に經巻を打て説示たすふにど一會假にかいまくわな勿昧る一彌陀を誦りたのが宗旨の眞言まで圖にせめて言罵る狂僧よわたら即を誦たりと口々に惡口一國は欺り又ハ笑ひ珠數を輪廻して



腕を屈する腰も支添て最婆来よと牛は牛馬は馬遠しく群が堂を蹴立て踊りゆくこれ本化の臥  
 佛末法下祖の始なり就中圓智坊とて此山に年を拾ひし老和尙遠逝たる聲知らし我も法華經を信  
 ずもて讀誦する事五十年又三年此方は一字三禮に奮奮ともきたれ何を痴迷てまかりに法華經  
 を信たりとて諸宗を惡口はべるぞやたれかある其狂者の遠長を疾挽出せとまかりに法華經  
 以る事と振り疎に残る齒を咬でいとかしましく叫喚けり地頭の左衛門景信の諸佛坊に突と入  
 て道誓御坊よわの爲跡を見とるはしたるか他の事角もあれ御師の山といひ此地頭景信は後  
 無禮の連長奴獅子の高座を引おろし一切を捨るは易けれ無垢清淨の此山の靈地を穢せをたれ  
 見て其坊の免一置たれどかゝる不法の痴漢を其まゝ置て地頭の不念寺門の恥辱我請受て速戻ら  
 ん許たまへと有ければ道誓坊の恐懼聲公の怒も道理ながら狂氣の遠長をいかみせん其儘この坊  
 に預たまひね能言懲りて正氣にかへらば今日の鹿忍は我より詫んどいたさらけられたる鬼  
 さいもの地頭も詮かたなく頰ふくらして立出ぬ道誓坊のいたと呆れ連長師を坊に招き性根の  
 き其耳に老の廻らぬ舌をもていふも無益の事ならから十二の夏より手に育て見處多き法華なり  
 と末頼母一き年月も却て後の仇となり此寺をまゝへ願へま心構も水の泡消も入たき我が心東條左  
 衛門景信刀の鋒になれかじと此春秋を願ひてせと今日の心をるがへ改め難きことならば此山  
 よの置がたしうへなむともみまかくし願ふ東條景信が眼に當らぬやう心をつけよ此教訓

の身に一みて先非後悔せしうへ疾我坊にかへりてよと幼稚者を懲すがせく着りも一つ此も一  
 つ夕日さし入遣戸口送るよなき師の恩を後に見ると往空に雲林もとめて立騒ぐ在色時數論  
 の下路さして降給へば誰ともはかぬ二人連後を導きて追來よと近くなるまゝ斜視ればこれ別人  
 ならず法兄の淨願義淨の二人にぞありけるともに師にうち向今血祖のしもべの語をさく又地頭  
 の怒尙解す山を下らば待伏て切て棄んと半途の辻堂を待どかきく此道とくだり給ひいと危  
 ざすれは小湊の親のいへに猶往がたし我々がよき隠處を思つきたり此方へ來り給ひねと後と  
 前とに淨願義淨師をいたりて血祖のけりし問道うちめぐりその夜の闇まきされつゝ當郡西  
 條の郷華房の蓮華寺といふ眞言密寺に身をかくし其難をのがれたまふ不測や此經を末法弘通  
 せば刀杖をもて惡人に追れ又常住の寺を擯出されんと御經に脱れたる刀杖遠難の法難と今日こ  
 れに現前たりさのわれ又諸天善神晝夜に守護あるべきよ一五の卷の御經に逸らす今宵危き劍難  
 を兩人に救はれたるも此將奇特の經力あり

華房の蓮華寺今に眞言宗にて現在す又淨願義淨の二人の後年大士の化道に受戒はえられたる  
 も其頃大山の住職にて綱位經からざるをもつて名利よつながれて其宗門を出ず然れども内  
 心深く其宗義を信し淨願の日尊義淨は自在と呼弘安元年大士筆を染て本尊を書しこれを授  
 與ありしこと祖書にみえたり







力用にあらずして其の父母の功德ありと三體一身三人の親子の海に筒井筒井の香をこめてけ  
 ん波初る法の水日蓮大士の懐中より御經を取出て今身より佛身に至まで能持南無妙法蓮華經と  
 慈父妙日悲母妙蓮の御體に御經をしめて授たまふこれ我が宗佛にわいて本門受戒の始なり父母  
 御喜にたへ給ひて昨日の我が子今日より未來永劫惡業を救ひ給ひたる大導師布施の品よそれ  
 かれと取柄もて供養一つ門外に見送る老夫婦これまで涙一雙別の身を知雨にふりかへて今も  
 一と觀喜の涙心直なる一筋の門田の畦を高聲に御題目を唱へつゝ鎌倉よりて飛足なり給ひけ  
 りさても日蓮大士の五月の中旬船の便と求つゝ相摸の國へ渡海せんと名古の海邊に飯さ給ひ  
 る此程梅雨を吹送る其北風も浪高く往來の船も道絶て因果給ふ所に平郡泉澤と云里に權の頭太  
 郎といへる人有けりも伊勢の國の由緒ある人なるが久しく此地に住てありしが不圖大士に相  
 見し一樹の蔭の旅の宿その弟次郎三郎ともに大士を敬つ其化導を蒙るに思ひて日數を置てし  
 大士の此頃渡海なす風の日和を待ひて後の山も雲霧り海上のるかにみりたり八大龍王護念の  
 爲雲時御經よみ揚給ひしに龍神納受やまーくけんこれより空晴風穩になりける此地の足  
 入その奇特を言傳へ地名を南無妙法谷と稱と今は聖一て南無谷とよびなせり奥瀬瀬の太夫兄弟  
 その母の爲に法華堂をいとまじ弘安二年日蓮上人をつかはして開堂して寺となし名付て成就山  
 妙福寺といふ妙福は其母の法名にて大士自家の本尊と授與なし給へり斯のこれより廿六年の

後其事なり其體經あり古蹟の法華塚とて今も現存せり

南無谷妙福寺の開基日念柳の松本坊と號しもと天台傳學の僧なり宿縁有て異間の日頂聖人  
 値て改宗一又大士を拜して別明の秘法を受命に依て此寺を草創一 大士を開山と仰ぎ其身  
 の二世も居又日頂聖人の舊恩を忘れず寺を以異間の末寺とせり

日蓮大士の風風海平にして船出をいさむ湊口こゝに便船を求めつゝそよ吹南風に異帆  
 取表根に聲かゝり船路やすらふ相摸なる三浦郡深田の浦米が濱に若船一給ひける此浦の濱の  
 濱邊にて船を岸より寄がたし砂よさよはる 船よ大士の法衣の裾を掲持己に下立たまふを見て  
 舟楫拾ふ海人が走より我渡しまらせん御務ぬら一給ふなとて大士を背負負奉り片山岸の岩  
 ぞうつ敷波の荒磯を渡しまらせし大士その志を喜つ見かへりたまふに其男の腹に血し  
 度の流るゝを驚きていかに爲しやと問給へば桑螺の殻に踏つけて其角に腹を傷はるゝと應け  
 らへ大士憐みたまひ持る藥もあらざれば是好良藥の御經取出夏の日影の潮照岩をまのく濱  
 磯の狭間に立よりてまへ御經讀誦なし西をさしてせ立去たまひける不測や是より此磯に生る  
 磯の角折て今の世までも米が濱角なし螺の奇特を以此地を尋て知ぬべし後年こゝに寺を建  
 の遺跡を以し示す法海山龍本寺とぞ聞へける大士はこれより山路にかゝり必無の里より守取  
 給て遷葬し多古江川を渡りたまふこゝに三位龍聖の御子六代御前の討れ給ひ一處よて流るゝ山



を幾期川とよび傳へ其御墓も青葉がくれに見へ渡り賦に一朝の花と時めき一平家一門のなれの  
 果いと哀れに思へ出御題目を唱へつゝ襟も暗き木下開ゆくて船一も名懸坂洞なす山の切通一  
 無月ちかき此頃の曇り日影にたへたまひを茂る木蔭も一揃の水もかなと衆給ひ一も岩の間も  
 とくくと音して清水の涌出たり大士喜で御手に結び如以甘露とねーいたゞき咽をうるは  
 かまひける其味甘くして且清冷に類ひ稀なる水なりとて其頃鎌倉五名水の第一と稱し今に名  
 越の路側に残りいかさる早魃もも潤ことなく日蓮水と尊稱す大士鎌倉も入て世の体相を見聞な  
 一たまふに思へば此地は遊學せしりや十二年の一昔去る寛元二年執權北條經時鎌倉四代の將  
 軍頼朝公を京都も追登せその御子六歳にならせ給ふ頼朝を將軍となし奉り此幼君の補佐を名と  
 一北條一家我意の振舞多かりければ前將軍頼朝公京都に在てこれを惡み北條を討亡すべし御願  
 願を企て給ひける此事はやく露願に及ひければ今の將軍頼朝公漸く御齡十四歳なるを謀叛人の  
 事なりとて深く惡奉り相撲守時頼朝與守重時の兩人より京都も奏助一頼朝公を逃け後醍醐天皇  
 第一の皇子宗尊親王とて今年十一歳なるを關東に迎へ征夷大將軍に任下さらし世の中も事あら  
 なまりて見ぬにける日蓮大士の鎌倉大町の南名越の東の山原にいさゝかなる餘地あり一をこ  
 に土を均し地を担め杉木の柱ふーとげく竹垣わたりて椽とし尾花坊許我老も七堂伽藍にいやま  
 ざる久遠本果の古佛場大士のこゝよ日を送り經文讀師の外さらに他事なく見ぬよける大町米町

村木座傘町名越この邊の人うのさして彼處に御經よみそます道徳不思議の僧ありとて尋さ事  
 請つたへけるとなん大士は鎌倉府内の諸宗門北條一門師依の僧天下の有様世の姿まで心をよ  
 め撰に言を出したまはす身を如法堅固にまもりつゝ雄氣を養ひ在すうち社司大伴に紹介を求  
 鶴ヶ岡の經藏も入給ふこれの去る建暦元年十月十九日實朝將軍永福寺に在りて供養あり一宋  
 開元の目錄五千四十八卷の經藏あり此等の事に秋暮てきのふの露も置かへる大路の霜の村消  
 履音もづかよれとつる、者あり大士雖といらへて對面あるに三十あまりの氣商も法師容貌  
 和に腰膝を折大士を三禮し奉り我の故山に修學なす成辨といふ未熟の僧にはべるが久しく彼の  
 山も在學しこれまで年頃學たる天台佛敎兩大師の書類をもつて三塔の學者に論議するに法門  
 らも相合す尙弘く其義理を尋ねしに慈覺大師の佛敎の法流にありながら還て其法流を亂したる  
 隨敎なりと見定てその不審を學問に告一かは其許の蓮長が弟子にはあらぬやと問れて其は辨へ  
 ず其蓮長とはいかなる人ぞと尋一かばこれの近き頃房州より來て此の山に學問せしが慈覺大師  
 を佛敎法敎と罵るゆゑ其は佛敎を知て未だ慈覺を知らぬなりと言諭しても心解すそのまゝ、山を  
 離さぬ御坊の問るゝ處能其蓮長に似たるいと問も嬉しくその人と何國にありやと尋ねしに無  
 事の尋海とらへる僧その席にありて蓮長こそ國にかへり近き頃の名を日蓮と改めて鎌倉も見  
 たれど風の便よきけること一示されて嬉しくも其師に似れば我が胸の月に照らす雲霧も晴すや



大成弁  
阿闍梨  
鎌倉松葉谷小  
高祖を  
訪く  
師弟の  
契約をかす





いどて山を下り音羽の瀑のほとけにきく其名ばかりを知りて漸くこゝに尋ね得しと其真心のま  
 びついとねと色にみねにける大士のその始終閑終り不測も同道ふむ菩提の梯わたす教のな  
 からずやと此より御側ま在て日々疑難の條々を書もて大士に問奉り大士喜でこれを解釋  
 食を忘れて教化なり給ふ成辨の坐に感涙拭ひあへず幾日もわらで本化の宗流を顯得て暗し心  
 のうれしさよ本門の大戒を受取て法弟とあり給ふ大士も此鎌倉に入てかゝる學匠の法弟を得  
 ひ一事實も百萬の加勢を得たる心地して其か父の名を前昭と云ふ一聞召北昭の字に我一字を  
 て日昭とぞ召れけるこれより水又新に朝夕の炊さへまめやかに立舞て大士に事へ給ひける一日  
 大士御經半途に日昭を召れ我弱年よりの志願こゝも満足一上行所傳の妙法を四海に弘むなる者  
 此御經を經の如く弘むならむ三類の強敵とて當時の名僧智圓第一に怒を發し上は疑義を掃へ上  
 も亦其邪正その善惡を正さば度々島へも流しあるひに顯ふ及ふべしと今顯したる五の卷勸持  
 品二十行の偈の文に見むたり御身我が弟子ながらも我よりひとつ齡たか一今日本國中に充滿た  
 る念佛眞首禪の諸宗この諸經中王の法華經の勸命に背し方便下劣の分際を忘れ法華の利益を  
 いんどす我是より忠勸を抽て征伐に取かゝり其權門の諸宗を退治し一天四海みな妙法の民とな  
 さんす然かはあれども敵は多勢我れ唯一人あり身命を期とするとも弟子をもつて磐石にうち  
 當るより猶危し若我討死ともなすあらば末法萬年の罪を誰かたすくる者あらん御身けふより

を決し日蓮大敵と合戦を挑みいかに成ゆく事ありとも必ずこれを願見す信心有縁の味方を四り  
 ついて旗を掲られよ共に討死するも忠又惜からぬ身を存命て再び家を興すこと却て拔群の大  
 忠なるぞ努を遣れ給ふなといと丁寧に宣へば日昭師も涙に咽び歎ならぬ身も法の爲難事を忍び  
 御遺狀にの戻らド御心安かれとありければ大士は満足の色を顯し給ひ日昭師も同音も勸持品を  
 を讀上給ひける此六老僧の第一位大成辨阿闍梨日昭聖人として大士常に辨殿と喚給ひし此御坊  
 にぞれりける抑此日昭聖人といふは下總國葛飾郡平賀の郷も平賀祐昭といふ者の子なり其  
 は福有にして田園に富郡郷も敬敬せられ輕からぬ郷民なり兄弟三人もて姉の印東次都左衛門有  
 國に嫁す又一人の舍弟なり日昭師の承久三年を以て生る生質篤實にしてまなきより禮義正  
 て進退度にかなふ殊に書籍を讀事を好で僧に交り寺に遊ぶことを樂とす十二歳の頃より靜な  
 る事を愛し人に應對するを喜ばず父祐昭才智の人にて夙く其宿縁を察して十六歳の時出家せし  
 む後年叡山に於て奇遇の因縁を奉鎌倉に下て日蓮大士の上足とあり末代法華弘通の後殿と定ら  
 れ大士鎌倉府内を退出されし事廿餘度また伊豆も三年佐度に四年の流罪に處し又龍の口死罪の  
 大難かゝる大士の急難にも兼ての約束日昭師は些もこれを念とせず師依の人々隨身の徒弟等四  
 散り落行べき味方の殘兵を圍り濱土の邊よかくれ住大法將日蓮が法運途に開くべき時節をいか  
 り給ひしこれら亦六萬の副將軍本化薩摩の再身とこそ思われけれ



日昭聖人鎌倉松葉が谷に来て大士の法弟にたり、州三の時にして大士より給ひどつ立起給ふ年華といひ、導導といひ、智徳圓滿の法弟の任を命ト給ひ、又立あり我か宗祖既に開け大士入滅の後は鎌倉の濱土に歸り師恩報謝の爲心と興に籠り、願經履歷十三年に及ぶこゝに比叡山の尊海老居して九十一歳日蓮大士宗門を弘め給ひ、より成辨も亦その弟子となり師匠の跡を繼て在すとさ、昔なつかしく正安二年の春、春通を鎌倉に歸り本門の大戒を受ざるを悔たまふ文牒を見て日昭聖人も此時七十九歳こゝかたの空しく思ひけん二か一日蓮聖人いまた蓮長といひし頃鎌倉の旅の舎も初て知己となり我もむかいは男山屋なる身の張つよく聖人を此比叡山に連來も今折折算れり六十餘年の昔なりと老の臉に涙をうかめ在一世の物語にとりませて本化別頃の法門を踐ト受戒終て鎌倉へ歸たまひけり日昭聖人五十餘年の間法と讓て在したる由井の濱土の塾居の草庵この程越後信濃兩國の大守風間信濃守信昭大禮那と成て一寺を建立し弘演山妙法華寺と名つけ法弟日昭をもつて住持とす時に元亨三年三月廿六日日昭聖人世壽百三歳よりして示寂なり給ふ大士入滅より四十三年の後なり此濱土の塾地も種なく正慶應武の亂に毀壞となり妙法華寺も兵火の爲に焼失なれ日昭聖人の寶物はづかよ襟にかけて池上よ逃去漸く豆州安金村よ東金山妙本寺を建てい

まゝか古蹟とといひ其後法孫十三代日包聖人文祿年中同國田方郡賀股村よ鎌倉濱土妙法華寺の號をもつて一寺を建立す元和年中第十六代日亮聖人新に今の伊豆玉澤を開基し昔の寺號に倣て妙法華寺と稱し山號と經王山と改む第二十一代一乘院日發聖人といふは俗姓薩山氏よりして紀府水府兩館の御母堂發珠院殿阿萬の方の姫なり此ゆゑをもて濱山とれより萬觀を監し諸堂觀々として一方の大本山となれり實にや開山日昭大聖人のむかし由井の濱土に竹を編流れよる瀟沙草をかき聚り家根と誓つ、雨霖を凌ぎわびて一五十年艱難辛苦の護法の功德後年こゝも願ひれけりと別て尋く思ひれけり

愚者は愚を知らずしらざるもゑにこれを愚といふ賢明故本化の肉身日蓮大士去る建長五年この鎌倉に來り今年甲寅の四月廿八日名越松葉が谷の御草庵に天照大神三十番神を勸請し奉り御筆を現て南無妙法蓮華經の七字を大文字と御認ありてこれを法樂に捧げ給ひ名越の往還間近ある處に高座を設け法利生の華を雨せ給ふに去年よりこゝかこに附の聞たる事おれ米町辻町の邊より遠近よ語傳へ言繼て聽聞する者いと多し高祖大士は一代の御經も權教あり實教あり方便あり眞實あり又正法あり邪法ある事を説諭し日出ぬれば星かくれ末法の今に至ては法華經の外諸經に利益はあらぬよ一慈愍にさし示給ふこと幼稚も乳房と與ふる母の如く一日いかりしく末切を佩たるひとりの武士人目を俾かる編笠深く御花室の外表よ佇立始終聽聞し居たりけり



説法果て笠履棄聖人にいさゝか不審あり如來從來偽あしつはりなきゆゑ佛といふ念佛眞  
 實傳の經々と方便無得道と説給ふのその所謂なきも似たりとありければ大士笑と舍給ひされ  
 ばと塔を建んに先その足代を組これを方便といふ大塔全く成就せば足代を取捨るありこれ  
 と眞實といふ大聖世尊法華經の大寶塔を造立せん爲に四十餘年の間禪念佛の諸經の足代を説た  
 る今これを切棄ると正直捨方便と御經に見ゆたるはと説示し給へば彼の武士しやし默然とい  
 てありけるが立て三種一奉り此程出勤のかへるさに度々聖人の御演説をききまわらせ何となく  
 御徳の感一く今日も見参に入らるれ一は我は北條の一門江馬遠江守の近臣にて四條金吾  
 藤原といふ者なるが近き頃遠長寺の道隆禪師に参拜し専ら坐禪工夫を凝しはるうち聖人の  
 眞法に心傾きふかく隨喜一奉るにこそと疑ひある條々を問まわらせ過々その理も感伏し忽ち邪  
 を捨て正法に歸りたりけりこれぞ江馬殿の家臣にて府内も名高く武勇の勝れたるのみならず文  
 藝ことに譽たかく醫師の術にさへ通し眞實の聞ゆる雄士なるがこれより深く大士を尊信し  
 仕の暇には日夜御側に在て法をきき妻も亦ともに歸依し奉り朝夕の食物より其折々の衣服まで  
 悉くかけて供養し奉りける頃も水無月晝の晝を厭ひつゝ夕日傾く百時日蓮大士の御邊橋より  
 御宮小路にかゝり名越の方に歸らんと思へたる途中俄に白雨ふりいでたるにかさず法衣の袖笠  
 も脱ぎかねたる驟雨いかゞのせんと見たまふ處に袴の裾を高く取揚年猶若かき侍のそれなる御

僧と此奉に入給へとも一相くよといと嬉しく會釋して其人は伴はれたまふ他生の縁の縁や色り  
 我の名越へ歸なる御身は何地へ往給ふやと問れて我も名越の者なりと答給へばそのよら同伴者  
 りはあらば御僧彼の地に日蓮といへる法師を知たまふや大士答て我の其日蓮にて侍るといへば  
 彼の侍らるる御僧といつ頃より人の語をききいへるに天下の御師依違からざる禪宗と天魔の御  
 罵と宣ふよ一出家にも似ぬ雜言と我のいはねと世間の取沙汰實よる緯もいはるゝにやと遠く  
 離ればうちうなづき出家の身の元來佛の使なり世を畏れ人に媚てこれをいはずは道立す抑禪  
 の宗流の教外別傳と學ひ不立文字と示すなりかゝる宗旨を御經には我入滅の後の大慈大悲とも  
 つて文字と成て衆生を利益せんも一佛教に依ずして成佛得脱すといふ者あらば天魔の眷屬なり  
 と説れかせ給ふ禪宗の魔縁外道なること御經分明なり天魔を天魔とさしていふ我が惡言と思ひ  
 たまふのいかにぞやと離トかへされ半句も出ず我の進士太郎善春とて北條家の近臣なり册封四  
 條藤原が聖人の噂して進れども受がらず今日の内不測の命命は觸る袂も法の縁壁あらためて教  
 を受んと目瞶し心も雨もやみ晴し迂り邪正の別路いとまを告て歸ける進士善春のこれより大士  
 と信する心厚明善世の暇にも御經室を訪まわらせこゝに在日多かりける夏去秋も奥竹の軒  
 端を拂ふ音を以て燈火はそら有明が大士は奇異なる夢を見となりけり山も崩るゝばかりの  
 大雪の降つたため此經室の床をうちぬきて其所に隨たりと見るうち忽ち天氣明かになり



けりとの側の人はその御夢を語給ふ折から下總國筑前郡能手の人印東治部左衛門有國聖人よま  
 むらまのらせたきよ一言入るよぞ日昭師業内にて席に居し有國（一）く頼づきて我度々此地  
 傳來り聖人の説法を聞奉り其深妙の法晝夜に忘れたく國よ歸て妻よも語らひ一人の男子吉祥と  
 いふ聲を徒弟よ附んと逐々此兒を携來ぬ此兒の母は法弟日昭の姉なれば伯父甥といひ法兄弟宿  
 賢寺の因縁とおぼし願ひよ任給ひねとありければ日蓮大士（二）たまたま昔の隨たりと夢見しそ  
 の前に處もかはらず吉祥聲が起したるも正しく此兒の法弟となるべき瑞相ならんと其位御劍に  
 置し置せたまた天朝（三）なり一夢に因みて日期とぞ名付給ふ此時齡十歳にありけるが常に大士の  
 御跡近く事へ奉り給仕のいとす手御尋問を同じこと一方ならま見ぬよけり

日期聖人は寛元三年己八月八日の誕生にて幼少のときより外柔和にして内に勇猛の氣を  
 含みかりそめよも他の意と交り違はず稚なくして爾年高たる人の如くありけり大士御一生  
 の間く事へて孝行第一と喚れ給ひ大國阿闍梨といひ又筑後公と稱と大士滅後三十八年元應  
 九年庚申の正月廿一日に示寂す御遺命に依て松葉が谷に芥毗阿闍梨の山の嶺に葬る塚の  
 上の松を隨涙の松といふ此地の文應元年宗祖松葉が谷に焼討に値給ひ一時御身をかくりた  
 る塚あり越中阿闍梨期慶聖人といふ寺を建て猿山法性寺といふ日朝聖人に九人の弟子  
 あり世にこれを九老僧とて日像日輪日晷日範日印日澄日行期慶の九人といふ其うち朝

慶師の在原義宗の末子なり

茲に下總國筑前郡八幡の郷若宮の里に宮木播磨守胤繼といふ諸候ありけり清和天皇七代の後胤  
 にして本國の因州宮木の城主たりしが今に此下總國若宮に住居し上總下總兩國に知行を領し世  
 に聞えたる名家なり實名の次郎重忠が妻梅菊が父は此宮木氏の一族なり梅菊實名か妻となりし  
 より懸れば繋がる宿世の縁宮木胤繼も折を得て鎌倉殿は訴訟實名が無實の事を首解て本願安堵  
 させんものと久しく心に掛られたれと天下に非分の訴のみ多く政所の混雜も盲出もべき潮も  
 なくそのまゝ月日を経うち實名の一子善日磨が出家と成りしを喜びたまひ我れもと佛法歸依  
 なれば何卒これを能出家に生立し大道利生の聖人ともなさせ彼の家を再興より百倍ならんと鎌  
 倉の遊學叡山の修行廿年の食料衣服を贈る筈なる兩親の世に榮られし羽拔鳥我が子を狂劫も  
 なく宮木の家より何くれと皆これを慰まれしは龍の水を施し火は風を添るが如しかゝる大導師  
 を發立し宮木の大功實に佛門の柱石とも謂つべしかくて日蓮大士のいよく鎌倉に弘法の志  
 をさだめ妙法の輪を一天に翻がへさんと思ふものからかゝる重忠の宮木殿に一度此法門を傳へ  
 ずば須彌八萬の頂より高かる恩を知らぬに似たりと今年霜月初つかた武藏よかゝり下總國若  
 宮の館にたもむさかくと案内を請れけるに生憎に殿の今朝鎌倉に參勤の首途して船よりかこに  
 遊さ給ひぬとて大士の本意なくの思せども時今己牌の嶮角よりそこしとやかり便船もとめ



て御後慈ひ御船に追付奉らんとそこへに暇を告二子の瀧に立出て船場はるかに見やりたまへ  
 へ高樓造の御座船より紅白吹貫の船印水色に桔梗の紋の幕打廻し木子母取は一橋の出立に障籠  
 一橋拍子取て唄連船出後一地風に沖合遠く漕出るを日蓮大士の槍の笠をさし揚て富木殿の御船  
 一ばしと呼たまへば富木殿耳を聳て幕の人見よりかいまみ給ふにまふ方なき蓮長印なりけれ  
 ば彼の僧これへと聲のした直に小船に迎來て目通ちかく招入たまふに日蓮大士兩手を支へ蓮で  
 絶て久しき挨拶の詞真中ふ富木胤繼大士をとつたと睨へていかに其方天魔破句の其身に入去年  
 古郷安房にかへり諸宗を惡口なまよいは儘にそれと聞定ぬ悔てかへらぬ事ながらこの年月衣食  
 を贈り性根の惡き遺心を養立し身の罪障いつか汝を招寄言懲さんと思ひも繁き公務にいとま  
 なく今日のいまいで過たり我目前ふ諸宗を罵り惡言なまよ一殺多生の慈悲なれば細頸討て捨  
 んすといさまた給へや大士些も憐れ給ひも富木殿一ぱ一待たまへ法門一とつ問告さん本より殿  
 の信仰深き比叡山慈覺大師の邪流の法門妃の腹に卑夫の種を孕たるやうに法華と眞言とを習合  
 せて法華經を穢し其上此法門佛の意も憐ふやいかよと佛前に七日の間祈誓を凝したる五日目の  
 夜寅の時日輪を約として放箭の弦音たかく鳴ひいさ日天子を射て落たりと夢に見てさての我  
 が法佛意の的中したりと喜でその宗流を弘めしをこれを邪法の證據なり釋尊の御名をば日蓮と  
 よふ夫のゑにこれ須臾多羅の日の落るを夢見て佛の御入滅近けれと知り又唐土に榮といへる

國王の日を信じて箭を放ちて其國を亡したり又我朝の日本とて日の御神を主とすこれを獻  
 て吉夢と思ひたる慈覺大師はよも正氣に在すまじ定て惡魔の入たるならんと眞言と法華とい  
 七段の相違ある事を問に答へ語るに應ト眞言亡國の法理を説給ふ富木殿の握り一拳の張ゆる  
 み宿因催す後悔懺悔大士は深く鹿忍を託たちまち眞言珠數を切り今身より佛身にいたるまで  
 能持べき妙法の誓の船のいと早く武州久良岐郡六浦の濱に着船し互ひに再會を期して立別給ひ  
 ける日蓮大士のこれより一心決定し名越の菴室を根城と定め日昭聖人のまた後殿の任を身に以  
 き受大士の御手を扶法弟檀越を教化して専別頭の法門を弘通なり給ひければ大法將日蓮大士の  
 日にく辻町の東小町往還の路も立て往來の人の足を止め念佛は無間地獄の業因し祖宗の天魔  
 の邪法眞言の國を亡す大惡法律の國の賊なりと聲なりと聲を限りに喚り給ひ末法當今の衆生  
 の爲より南無妙日蓮華經の外たすかるべき正法なりと御經を響かへし標かへし説示たまへを説  
 る水を塞が如く眠る獅子を擲がごとく立すたふ俗俗男女黒山の如く眼を怒らし牙を咬惡口過言  
 とするもあり氣の狂ひたる痴者なりと笑ふもあり阿彌陀如來の現前ばかりるものとして石瓦  
 古履雨あられ御身に當るを事ともせず諸宗無得道地獄と高聲を喚り給へば一人の老人あま  
 たの群集押わけて人の騒ぐを宥めつゝ御身は出家よりなからんたたくも路地に立て説示し  
 入ふ罵打るゝが修行ならんやいと見皆と懸けり言給るを大士のいやとせし量給へむかへし不  
 日蓮大士眞實傳



菩薩の石瓦を擲うたれながら法華經を弘たまひ又龍樹菩薩の赤き旗を建王城をめぐると七年法道三藏の面火印を當られながら佛法を弘む今末法の一切衆生五濁亂離の心濁海を山と見西を東と心得る天地轉倒の濁惡世正法を弘る者怨敵なくて協ふべきやと盲懲せば首を抱て後述す又一人の青侍御出家に物言さん備道佛道ともに禮義あり往還し佇立て其大法を説くとは非禮の振舞心得がたしと立かゝるを人間の座して食するが禮なれ共亂軍急場の兵糧の立て食するも亦禮なるを知給はずやと返し難じて打釘に又立替てさればと念佛の諸宗門御上に立置法あるとこの好悪をいふとの片腹痛といひ詰るを王侯貴人は皆在家の俗衆あり在俗何を法の邪正を知召さん出家の衆は佛法の偏圓邪正を教てそれを導くが出家の本業なるぞと過々に説問せ給へども道理を曲る邪智愚昧皆口々に罵りて果の崩るゝ人の山資昏時法服はて御題目高らかに唱へつゝ御菴室立戻り給ふかく日蓮の辻説法に諸宗惡口の塵を揚僧俗誹謗のひびきを傳へ餘倉殿肥近居士の面々も此をさし是を見れどもいかにともせんぞなく鎌倉一河の取沙汰區々なるに建長寺の道隆禪師光明寺の良忠上人極樂寺の良觀大佛殿の別當隆觀その他多寶寺長樂寺等みなこの頃道學の譽たかく萬人の師依深き名僧なるが松葉が谷の日蓮とかいふ痴迷僧が面白く諸宗を誘り往返とぞこれも一時の流行ならんと口には嘲諷一笑へども心のうちに胸熱れ胸熱し怒の剣を鍛けるこれを末法三類の強敵の一類にして僧徒増上慢にて後年惡法家の

大怨敵とぞなりにける其辻説法の古蹟小町の路傍に日蓮聖人腰懸石とて今にその名の残りけり今年乙卯も歳暮て庚元元年丙辰二月廿九日の事なりけるが俄に大雨大風吹荒て關東洪水たなと六月十四日の曉天鶴が岡八幡宮の社震動して鎌倉中も鳴ひいく其日の己の刻を空に白鷺はどのもの飛めぐり忽ち碎て火の車の形をさし大さ五尺ばかりよて絹を裂が如き聲して一線の跡を東西の方に飛去りけり白晝の飛星の前代未聞のよかたり傳へて去る寅年より諸國凶變多く四年このかた五穀登らず氣候不順に去て寒中桃櫻の花さき曇中却て雪霜をふらせ田畑次第に瘦損かくては人命いかに繋ぐらんと末恐しき世の有様なりけり執權北條時頼も十一月飾をれる一祖門に入覺了坊道崇入道と稱しその子正壽磨七歳なりけるを將軍の御前に於て元服せしめ宗の一字を賜つて時宗と名乗一族重時の次男武藏守長時をもつて補佐となし大事は皆時頼入道決断せられける此頃青砥左衛門藤綱といふ奉行あり此人は始眞言宗の僧なりしが佛法の偽り多きとて廿一歳の時還俗して廿八歳にて鎌倉殿に奉公し天下の政道にあづかる常々細布の眞垂に布の大口を着て問註所より出勤朝夕の勝部は乾たる魚と燒鹽の外と一のへず其廉直世に知成なり上には最明寺時頼あり下には此青砥ありて四海の成敗上下の仕儀道に當らずといふとさこのうへ世に變災なくは世間物なれどもトと萬人ひとしく天下の御座をぞ解ける時に日蓮大士日々十字の辻よ立て而強毒之の鼓をうち諸宗權門を攻伐給ふ珠數を切て降参するもあり



いよく怒て怒じもあり妻の信下て夫と追れ子の歸使て親に怒らるゝも亦すくゝからず折伏  
 引導のその中に房州天津の領主工藤左近之丞吉隆御所勸諭のいとま化導を受けて檀越となるこゝ  
 に又池上右衛門大夫宗仲といふ士あり代々作事の奉行をもて將軍家に事へ武州荏原郡千束の郷  
 を領地に賜り池上に住居一天下は盤纏をもつて職とする者ハ属命をこの池上に受ざるハありこ  
 うをもつて田圃のたかに家畜さかへ春秋兩度鎌倉に出勤のいとま建長寺福福兩山に入て禪學を修  
 行けるがちかごろ名越に諸宗を忍口する僧あるよりかゝる者より近寄ぬこそよけれとて途中  
 にて大士の説法を見れば耳を驚で往過ける然るに此池上宗仲兼て四條金吾頼基の親一と友な  
 ければ頼基種々に教導して名越に伴なひ一が宗仲一度大士に見え奉り涙あがらに前非を悔て  
 棄てせり其弟兵衛志も共々檀越となる又池上の縁家ハ荏原左衛門義宗といふ人ありけり八幡太  
 大士ハ師檀の契を結びけるが此家に先祖甲斐守頼信以來頼義義家三代軍中守護の八幡の神像ハ  
 一夜靈夢の神光に依て大士ハ點眼を願ふ後年ハ及び義宗の子傳次郎といひ一を日明聖人の法  
 則となし九老僧のうち明慶聖人これなり此師中延に一寺を建立し祠を立て八幡宮を安置し八幡  
 山法蓮寺と號す今に中延の八幡宮とて諸人渴仰せりこゝハ鎌倉慶長川の邊に住居一と者ありて  
 其父母ハ死別れ世に力なき孤獨の輩と一十六ありけるが宿世ハ積一積ありや深く大士と師

傳一奉り服の子なれやかひなくてせりて世を早うせし兩親の善徳のたけ御菴室に炊せばやと願  
 ひければ其意よまかせ名を龍王と叫びといふ眞實に事ける此時よいたり輝依の檀越池上荏原宮木四  
 傳我もくといふ供養を捧げ松葉が谷の御菴室に朝夕の燈火一て法弟隨身の環も何一不足な  
 く道心の中に衣食ありといかゝる事をやいふ成べ一又甲州巨摩郡波木井に住居ある南部六郎重  
 通といふ人あり新羅義光六代の血統よ一て當國飯野御牧波井三が郷の領主たり性質篤實にして  
 慧眼明か深く佛法を信す初て大士ハ相見舊來の檀宗を察て本門の大戒を受信力ことに勝れて  
 一宗に輝き餘年其領内の身延山を大士に寄附一奉り末法萬年妙經流布の慈を聞きたまひ一大檀  
 越にぞ在しける

佛法はもと佛法佛法本より世法なり天附ぬれば地明かよ法華を講る者豈世法よとからん法華  
 の信者ふかく此理を察すべ一されハ建長康元もさのふと嘉今年正嘉元年丁己の春にいたり四  
 の氣候不順にて四月の月餘五月の日餘とも恒ならず同十八日海の潮泥に變下たるこはいかに  
 と思ふうちにその夜子の刻大地震そのうへ三月より此方雨一滴もふらま田畠涸乾て野に一様の  
 野草だになし六月加賀法印雨晴七月鶴が岡の僧正も雨晴ありけれども一切に驟なく大地熾熱  
 人問さへ合つぐさ一とも思われや有けるに八月朔日より地震ゆりはじめ同廿三日夜の戌時地  
 震のありさす地底一はらく鳴動するよと見へ一が大地を揺動たる事大凡二丈ばかり大名小名堂



増伽藍の差別なく其外町家農民の住居海郎の磯舎にいたるまで瞬間に微塵となり人畜とも  
 大半これが爲よ命を喪ひたましく免れたる人も傷つかざるは稀なりけり其山岳の鳴きよひこる  
 つまたく大地は三尺五尺つゝ破れて泥水を吹出―又青き火焰十丈二十丈所々より長空に立登  
 りそれより百日ばかりの間震動止す又十月十三日一天俄に五色の雲を播亂を又いかなる夏目を  
 中見らんと思ふうち鉦の如き電光八方に散亂一人の眼を貫ぬくわかり―ばしうて大雷鳴りた  
 めら磯原障子をうち外と又同十五日にも大雷地震れりかさなり打ついく凶變の東鑑も徹て洋  
 かなりこゝにはその大器を述るのみかれば鎌倉をはじめ關東廿八ヶ國農民は鋤鋤を取らず流  
 着は網を曳によしなく米穀諸色賣買の道絶果てよ―天災を免れたるも餓死者多かりける日蓮  
 大士此ありさまを見となりてあまたの歎息―近年の凶變別て今年の有様は時運にもあらま  
 天災にもあらま全く法華經沈布の時節なるを念佛真言の諸宗門その大法の妨なすを天怒り地獄  
 一給ふよ疑あらず此事は房州清澄南都の藥師寺下總土橋東漸寺鎌倉鶴が岡と四度まで一切經  
 願入てこれを考へ置たり今一度經藏を開て證據となるべき諸經の要文を撰ばんと正嘉二年正  
 月六日鎌倉を立て駿州岩本實相寺の經藏に赴きたまふ日明師は御側さらす襖包を脊に負て大  
 士に従ひ奉りけり七日の夕月山の端にかくれ沼津の海邊に行幕てやとるべき方もあく倅ひあや  
 一草葺の辻堂のありければこゝに一夜を明―つ今宵の七草の嘉辰なればとて香を焚て御經

讀誦在しけるにぞ軒端に近き海原より龍燈去ばく往來して夜も亦還て蓋の如―これ正しく八  
 大龍王護念の供養とぞ知られける此堂のもと當地の齋藤彌三郎利安先代妙覺禪門の爲よ營む處  
 なるが此龍燈の奇瑞を感得明の朝山本重安と共に來て大士に朝餉を奉りこの日の強てといめ參  
 らせ一家のこりなく受戒して御題目を唱へつれ大ひに佛事をいとなみけり

後年中老僧但馬房日實山本重安が宅地を寺とし龍王山妙海寺と號―また齋藤利安も家を轉  
 じて滿松山妙覺寺といふ兩寺ともに今に毎年正月八日法會を修してむかしの式法をのこす  
 とぞ

駿州富士郡岩本實相寺といふの比叡山横川に属する天台の寺院なり當山の一切經の智證大師唐  
 土より二部を持來り一部を三井寺に納たるの治承の兵亂に焼失―一部の此山も傳來す高祖大士  
 この經藏に入給ひしに常院の學頭智海法印は下めて高祖も値まらせたるよ世に傳するとの其  
 人跡天地雲泥の相違よして道德たかく智解ひろ―智海の恐れうやまひよき折柄ありとて摩訶止  
 觀の講釋を願ふこれに依て經經を讀給ふいとま時々止觀を講論なり給ふに聽聞するとの甚だ多  
 くして歸依の心を發すものも亦すくなからず就中當山に伯耆坊といふ所化ありて齡十四歳こは  
 信濃國司 梶善根が裔孫大井庄司の子にして甲州巨摩郡藤澤の人なり母駿州由井氏河合入道の  
 娘ありその母腹よ白き蓮華の生ずると夢見て懷妊―寛元四年丙午の五月八日よ出生し頃の 頂



黒子七ありて七曜破軍の星に似たり八歳の時両親携て岩本實相寺に登り清康二位總持  
 の徒弟となす此兒の我が一宗の宗傑にならんとて三井寺に登す此頃母の身まかりたるも依て  
 其意を察しひそかよ我が寮にまねさるて言やう我ふかく日蓮聖人の大徳を慕ひ願く其弟子と  
 りりて履をも採んと思へどもいかよせん三井寺より當山の學頭より附られ我が身の上を考す  
 なし御身はまた若輩なれども末たのも一器量なり新世上を考ふるも諸宗の佛法皆未結た  
 り今出家の本懐を遠んとたれもい聖人の法弟となりて一佛乘を學び給へと思にすめけるに  
 ぞ伯耆坊よりこびの泪せきあへず在しけるが此春の季高祖の慈父次郎重忠逝去ありより一層  
 より告來る大士これ聞いて哀成またへず聲をあげて哭慟なし給ひ三五日の程の飲食もな給  
 ず歎きよ春もや暮て涙をそく竹の杖力な身と扶けられやがて鎌倉より歸り給ふこに彼の  
 伯耆坊は智海法印の計らひにてひそか實相寺のがれ出漸く沼津まで大士に追つと奉りその  
 志願をのべて歎きけるにぞこれを不便と思召どもに鎌倉より携かへり名を日興と召れまた其  
 の夢の緯をさとしめし後年白蓮阿闍梨と稱し六老僧第三より列り給ひけり  
 日興聖人大士入滅の後その遺命に任せ五老僧どもに身延山に籠り常在院を建てこよ  
 を終り其後輪番に此山を守護し給ひけるこに大波那波木井六郎實長ある時身延久遠寺

詣で大士の滅後わづかに七年接養食鉢石柱に埋む實長歎息して六老僧に談し給ふやう此山  
 を輪番に守護せると高祖の遺命なればこれを改めがたしとらへども法の爲山の爲持たよる  
 一處にあらざるの故に當山主職な一當番の主りこに居事旅の舎に居るが如く疎する  
 とにのあらねども各我が寺の修復に心取れ本化極神の靈場も年を追て衰ふる事のありも  
 やせん早く住持を定て万年の榮へを計るのいかにとありければ各詞を揃へ法に出家に依て  
 久住し寺の檀那も因て榮ふ波木井殿の寺の永續を專一するに任なれば其義實意に借せし  
 とありけるに日興聖人ひとりこれを承諾たまひを法子檀越の身として師の遺狀も背く法や  
 ある寺の盛衰の在家の御身等が預る處にわらずと答へ給ふ波木井殿甚だ不興の色をわら  
 一一座の老僧皆然りとす貴師獨非禮の首を述給ふはいれな今日より御身と交を絶ん  
 とありけれバ日興聖人も法衣の袖を拂て立給ふそれより時の當番日向聖人をもつて身延山  
 の住職となしけるよど日興聖人のいよく波木井殿と中絶たれぬ吉木比企池上も自然管領  
 を通せず大檀那四人かくの如きゆえ日昭日明日向日頂日持の五人もみな疎縁となりゆき日  
 興聖人の唯一人背くまじくればせざる自然と身延一山の敵の城郭のやうになりゆきける  
 よそ十月の初めつきた願禪に在りて一蓮の書を賜り下野坊日忍を使として波木井殿よつか  
 はし和枝の心ありければも實長一言の遺言に及ばれずこにたれて日興聖人も憤りそ



日蓮大士真實傳

舎み房州北野高保田村に後を隠し門を杜て隠匿なし給ふと久し今の中谷山妙本寺その古跡あり上野殿の法の因ふかりければ後年日興聖人を迎へて大石寺を建立し又北山本門寺を建正慶元年壬申の二月七日日興聖人示寂す時に八十八歳なりけり此傳によく心をこめて見るべし日興聖人の脚劣一涙を立んとて身延背きたるにあらず身延山と中不合にありき一ゆゑあれたのつから一派の流義も獲れり誠は師檀の中間にいさゝか是非を辨てより平等一味の海に別派の波を起したる事悲しむべし願くは其末流を汲ん者我慢偏執の風を収め相互に平等大慈の本誓に根つかば真如の法水從來諍ふ處なからん若又彼と此との黒白の相違ある別流なりと専らば高祖大士かねて六老僧と稱して末願しく御覽ありし御目途ひか日興聖人五老僧といふもに二十年來高祖の御側に在て法門を助給ひしは皆耳か塔中別付上行所傳の法理は何ぞ二三の別流あらん廣く考へ深く察して一と一と信下不二取訶衍の佛海に歸入し現世の大願を満足せん事佛門の肝心あらんか

も打づくも變災に人の心も弱りはて年々五穀登らずして淺ましき草のみ多かるも今年五月朔日颶風洪水にて非命に死するもの數をいらずれなり其廿八日の夜は災歎といふ惡鬼いでし一六

の曇み光を奪われ一かのみならず狂星長さ四丈ばかりなるが乾より巽の方へ飛きたるそのひき山岳に鳴轟くこれより諸國大飢饉そのうへ疫病流行し一萬民なげさの中に今年もくれて明れば正元元年の春歳あらたされども壽き祝ふ聲もなく國中民の食盡てそのうへ疫病いよ／＼のけい／＼／＼かも手脚の協ふ者は病煩らひながらも説を提鎌を腰よ／＼野山をさまよひあるま木の皮草の根をせりそれを咬ちがら倒れ死するも多かりきまた歩行協はず家に居るの飢も實み病に悩み泣呻吟親子兄弟夫婦の間にいさゝかの喰物を得れば互ひよゆづりあひ其大切とれもひ最愛と思ふ人よまづすゝめて嘆ひるゆゑに情ふかく實ある者の其家のうちよも人よりはやく命を興ひける在原義宗名越の御庵室に來り高祖大士に物語やうけふも村岡の邊りも通行かきり咽喉の乾きたるまゝ水を一杓貰ひばやと或る農家に立入たるに主翁とれが一き五十ばかりの男壁に倚か／＼いと悩ま／＼げに見へけれり流行の病も苦みはべるやと問ば頭をうち掉て丸匂このかた食料つらして糠に糞も吸つく一壁士をさへ口に含み今は食たへ廿日あまり妻のその病の下に死てあり土間の曲籠の下に弟の死骸もありその亡骸をさへ取飲むべしすべなりと涙を拭ふ袂さへ手を搦かねし越の氣息納戸のかたをさへ覗けば何やらん古藪籠のうちに横じしる物音するよとわれ何ぞと尋ればさればとよ五歳と七歳となる男子二人ありて妻のそれをたつるどて己れの腹すふたりの見舞にのみめたつ／＼それゆゑ早く死たりき五七日このかた

日蓮大士真實傳



二人の兒童も聲泣暖一悲母は何處へれば一たるを歸さず早く物陰して給ひねど此世からなる  
 眞實道の仇よくる一みたへかねてや兄弟九がひも相合類先手脚も噛つきて血はに染るありさ  
 まの眼も當られぬ振舞を今の見兼て兄の方を權に入弟を古葛籠に入見給ふ如く繩もてからげれ  
 きたるの千代も祈る我が子さへ早く死ねか一と願ふのみと絶をすりて物がたるを聞てあり  
 れるやるかたある風につけたる一袋の乾糶をとりいだ一彼の主翁にあたへたるに主翁はこれ  
 を押敷御志はうれしけれとて生ながらよへき親子が命ならぬを今なまトひも食物を得て  
 一時なりとも生延なば又一時の愛目や見ん許し給へとさし戻しぬさて恐ろしき事かると歸る途  
 中の噂もいつぞやより京都に人を喚ことはトまりて新に葬りし墓を發又社倒れたる人の肉を  
 喰ふよ一此頃鎌倉にも移り來て昨夕巨袋坂の墓所にて死人を喚ひ居たる者ありと取し人の語り  
 へるとありけれを日蓮大士も共々哀れを催して御法衣の袖を絞り給ひされば末法法華經の弘  
 まらせ給ふべき時節なるを諸宗の邪説に障られて正法の立ざるを天怒り地罰し給ふなりいでや  
 佛事障を鎌倉殿に訴上上人此事を辨へ給ふ程ならば下萬民の幸ならんと二卷の書をつくり給  
 ひ正法を立て國を安くする義を取てこれを立正安國論と名づけられ兼て前年京都にて闢らる國  
 會あり一比企大學三郎能本の近き頃鎌倉に召下され備道天文を兼て御所に昵近一大士とい脚  
 履の裏縫からざりければ幸ひ彼の安國論を大學三郎に見せて文章の連續文字の誤通をきらへ給

ひけり例せそ天台に縁あり妙樂に樂あり傳教も眞綱ありて其時の素傑の備佛法を扶翼  
 たり今高祖大士も能本ありて此安國論を校正去けるもみなこれ三寶諸天の所爲とぞ知られける  
 大學三郎能本の住居せる比企が谷といふの去る建仁三年九月二日父判官能員北條時政の爲  
 に滅亡ありし其舊地なるを拜領一文章博士をもつて世に時めき一が先年比企落城の時庭前  
 の池よ入水して果たり一姉嬢岐の局の靈魂猶付脱せを榮を爲とて御所より此地にねらて一  
 日願寫の法華經の供養を還らる大學三郎も亦法華堂をいとなみ高祖大士を請待して佛事を  
 いとなみ姉嬢岐の局の靈を蛇若止大明神といはひ祀り給ふこれ比企が谷法華堂の始めなり  
 これより妙本寺となりて二百年の後當山の檀越佐竹常源入道家督の事まついて管領上杉謙  
 定と合戦一佐竹入道この山は橋籠り應永二十九年十月三日早天より軍始り其夕方上杉方よ  
 り燒草を積で寺に火をかけ既に堂塔灰とならんと見るうちに井戸の中より一道の白氣立昇  
 り忽ち震動雷電一大雨篠を衝が如く燃へ立柴もたゞちに瀧りて火の消たり此時黒雲の内よ  
 大象をも吞べきは邊の大蛇紅ひの舌を閃とひらめか一火焰を拂と吐出し伽藍の燒亡を體  
 ると見へければ兵士も畏恐れて逃失けりこれいぬる弘安三年日蓮大士認め給ひ一十界  
 の本尊を此時の住持日行善人此兵亂に灰となるべきを悲しみこの井桁の裏に隠し給ひたる  
 如此御本尊の不測を現したるなりこれより蛇形の曼陀羅と世に言傳ふ本尊紙中長三尺二寸



廣二尺三寸七分今此企が谷に現存す此時任竹常源も大將の牙十三騎釋迦堂の前に切腹して相果けり此等の祖傳も預らざる事なれども比企靈場（たにがはら）の兵亂また本尊蛇形の曼陀羅の利益によつて茲に附す

○慈正元年の春疫病急々止す二月十四十五日の兩日日輪色赤くして物の色皆紅ひに見ゆすべて去年より日蝕月蝕時ならずして度々かゝり一天海變て日の色もへ定かならずこれは世の滅する時節にや成果けん人々生たる心地もせざりけること、又駿州富士郡上野より領居する南條兵衛七郎といふ人あり北條時政の親族よりて駿河國を大半に支配あり世に上野殿と稱して難からぬ事なり上野一門はもと岩本實相寺の檀越たりしが岩本の一山奉て高祖大士を尊宗などにと上野殿もこれより大士に師檀の契りを結び深く信仰し奉りけれども國中の政事よいとまなくして度々高祖に倣するとかたぐ時々布施を捧げ衣食を供養してその厚志を盡されければ高祖も又其問暇なきと雖も一書通を以て印々御教達ありけるなり又日興師の本岩本に所化たり一時より上野殿知己なりければ折に歸ては我が邸に請待し高祖を見ゆる心地にて隨で教化を受給ふ日興師も亦其信力の厚きを喜び高祖の御側に在て朝夕聞つる法門を悉々に書し上野殿へ贈り給ふ世に此を日興記と言傳ふるあり時に文應元年庚申の七月十六日高祖大士は奉行諸谷左衛門尉兼則が邸に推素し拙僧の御府内名越に住居なす日蓮といふ者よはべり近來つゝの天地變異一

代藏經の就よかけて當世日本國をうつり見て書認たる立正安國論といふ一巻の書なりこれいさゝか國恩に報ひ奉るのみ願くつゝさきの執權時頼公の賢覽に備へ給れど其書をさし出されければ左衛門光則請取願て御所に出仕あり此旨披露よ及ひたるに將軍の御前よあつて北條一門をばとめ列國の諸侍伺候し侍讀學士比企大學三郎を召てその書を讀しめ給ふよその願念よ日く國の法よ依て榮之法は人よ依てたつ近年うちつゝきたる天變地天の末法應時の法華經諸宗の種種利益をわらはれず其正法誹謗の罪深く諸天善神の此國を捨て守らず惡鬼國土よ充滿するゆゑなり金光明經よ正法よ背けをその國に七難おこると見へたり其七難の中五難のこれまで聞かれたれを二難いまだ起らず其二難といふ此國に軍起ると異國より此國を攻るとの二あり又聽師經の三難すでに二つ起りてなほ一を殘す兵革とて破の災あり若國王百官此法華經を御信用なくいよく念佛誦律等の御師依ふかく此國の滅亡程近きよあらんこれ我が言にあらす釋迦牟尼世尊金口（あまのくち）の佛説なりとぞ書たりける時頼ととめ並居る諸士も一同顔見合互ひに詞もなかりけり北條時頼此書を見て甚だ快よからず同二十四日高祖大士を我が邸に召寄東の窓よ喚入てみづから對面有て宣ふやう今度一巻の書をさし出して天下の政事を傳り萬人の信心を感しす事出家沙門の行にあるべきやと仰ありければ大士答てひか一周の世に賤き寡婦あり我が機杆を織すして周の天下の亂れんとせしを案下煩ひ老婆心在傳の昭公廿四年に見へりぬ況て天下の安危の



佛法の邪正に依これを告さずの出家の本業に違ふに似たり抑法華經は正法の中の正法にして諸經に優れて在すこと一切の江河の中より海の第一なるが如く一切の山嶽のうちには須彌山の第一なるが如く又一切の星の中に日月を第一と仰が如く開燈火渡りに船譬へは高十六萬八千由旬の須彌山を剝削めて硯となし大千世界の艸の葉を筆に結ひ大海を硯水としてこれを煮るとも湯つくし難き法華經の功德なり然るを諸宗の經々に其廣大の利益をねり奪んと邪正俱して明白ならず願くは公深くこれを察し給ひやく念佛眞言禪律の諸宗を停止して我が一乘法を御歸依あらば四海の太平とならんこと掌を反すよりも速かならん有ければ時頼而色怒りをもち一人の詞を信して何ぞ三國傳來の諸宗を破らんと中啓扇取て立揚り振うち拂て入給ふを高祖大士は御聲たかく若我が言を御用ひなくを自界叛逆難とて御一門も同士討の軍のトまり他國侵逼難とて他方の國より此國を侵さるべし其時腕を斷給ひんと喚はり給ひに近來風俗の面もあな恐ろしきことをいふ日蓮かなど面色かはつて見へよけるこれ天下陳言のトりなり一人の心下萬民にれらうつり彼の名越の日蓮坊いまは北條殿も疎んと給ふとさく討殺たりとも答はかゝらト阿彌陀如來の怨敵目に物見せんと百人許り手にく得物持擣名越の御菴室へ押寄たり時に八月廿七日今宵の當る庚申帝釋天へ法樂せんと大士はまばし御經讀誦終り月

もや出ると進戸細目に押明て東の空をうち見やり給ふ折竹縁づたへ白き襪大士の御袖をいさうりに更ければこの不審と思しめながら何なる事の喻しよやと彼にひかれて往給ふに路いと暗き山つゞき東をさして七八町山王堂より與まりたる窟の洞に入奉る大士西の方を顧み給へば我が菴室とればしき邊りれびたしき物音此の聲猛火燭々として天を焦しけれをさてと我が菴室の燒失するにやと思しける此夜御菴室に人すくなくして進士太郎善春と能登坊と唯二人ありけるが念佛禪の諸門徒ども日蓮を溺すなど聲々に喚かひし松火を投懸く燒討にぞ進士善春刀ねつとり扱はなし無益の殺生なすまると當るを幸ひ扱打に難倒し踐踏る能登坊も聲の割持のやうち折て逆倚敵を捉捕へ日よりも高くさし揚て丁と投たる人殺討手の難人かあはしと昔いつくへか逃散て夜ははのくと明にける高祖大士は人まらぬ岩窟のうち御經をよみそまいて在りけるに不測や猿のうち群て柴栗穀盆子榎の實なんどかはるく手折もて供養奉るにぞれもはずこれに飢を忘れこゝまかくれ給ふこと三日の間後年此處に寺を立て御精進法性寺とて今よその靈場をどめけり其頃鎌倉市中に日蓮名越にて燒死たりと專一風聲せしとかやさても宮木掃磨守は憐憫たる家來をつかひし大士の在處を探り索め漸く山王堂の山奥に之を尋常御手を取てひそかに下總の國若宮の館に伴ひ參らせ宮木殿その無事を喜び尊敬日頃も百倍一邸持のうちよ法華堂をいとなみ茲よ法華をひらき家門一族のこりなく大戒を受奉りこれより日々の說法敷



化の外他事あらざりけりけふも富木の法華堂に来て受戒せし曾谷入道教信と云は代々祖前の國を領し曾國曾谷に住す此人佛縁淺からず日を追て大法を禮得せり二人の子あり嫡子は四郎左衛門直秀といひ次ハ女子よて芝崎と呼ぶ生長して千葉大隅守胤貞の室となる兄弟ともに大士の化導預り清淨堅固の信心者にぞれハける

曾谷教信後年身延山に登て剃髮して法蓮日禮と名を賜ひ家に歸て法蓮寺を建立して正應四年辛卯五月朔日八十歳にして示寂し嫡子四郎右衛門直秀家督を繼いで信力父に劣らず妹芝崎の父存生の日興和地蔵堂を本化の寺と一日勤聖人を請いて開堂つ長谷山本土寺といふ火焼大隅守逝去の後尼と成て妙林と號し其居宅を寺なして神林寺と名く兄四郎右衛門は後に山越入道道崇と云其子典久末子を大士の法子とす筑前坊日合是なり山城入道其日合の爲に千葉郡野呂の邸を寺とあし妙興寺と号す又平賀六代日願も入道の孫あり曾谷の一族本化の宗と信下たる事斯の如し

高祖六士法華堂に在て日々の説法夜々の講談老若男女取交て聽聞するものと多かりける中にも曾國自井の住士秋元太郎一座の説法いまだ聞終らざりて珠璣を切て改宗す又柏井村に鐘阿彌といふ念佛者ありしが念佛無間の法門を難ト來て一首のもとに念佛を捨て法弟となる名を日唱と賜ふこれまでの念佛を言滅んとて眼を暗拳を擲り強情に題目を唱ふ其聲夜となく聲となく一

種にひくこれに依て普題坊と呼給ひなりその子も亦法弟と成て日惠といひ父の家を轉トイ  
帶と今島山唱行寺これあり斯化導のその中此處より一里ばかり去て千足といふ里ありその  
寓の人なりとて年關たる婦人日にく來て聽聞する日我が法名と御本尊とを請大士本尊を  
て法名を妙正と與へ給ふ婦人喜んでかへりける其郷の人もあまた茲に居たれどもその婦人を見  
知らずとてあやしんでその後をまたひ覗ひけるに千足村の池に入て見へず本尊は池の邊りの櫻  
の枝ふかけたりこれより奇縁の事なりとて祠を建て妙正大明神と崇め今は姥神とて痘瘡の守  
神と仰ぐかゝる不測を語りつたへ參詣群衆のその中も太田大衛門乘明は人跡重く身分いやし  
からず富木の内室ハ此太田乘明の姉なりけれバ日こゝに在て大士の化導を蒙り粗その宗意を  
辨へ脚を踏依ること大方ならず嫡子太郎を剃髮せしめ法弟とす帥の阿闍梨日高これなり  
太田乘明老後いたり夫婦別々の室に住んで五辛を食せず肉を啖せ法衣を着し袈裟を掛た  
りこれに依て高祖も常に聖人と喚び給ひ其宅をも直に本妙寺と稱せらる弘安六年四月廿六

日に寂す  
構の林は海草なく須彌山に近づく鳥は皆金色なり曾谷秋元太田をこトめ此法堂に入て邪宗を  
捨て正法を歸する者其數を知らず教化の果敢ゆくにれものす日數を重ね給ひ蓋の木枯吹絶て露  
凍りたる庭前富木胤繼の法蓮堂に入來り優曇華の花さき匂ふ千歳の一時御説法も既に昨日の百



處に滿給ひぬ鎌倉名越の御莊室も去ぬる八月焼討の後番匠左官をつかひて今の漸く成就なしたりと今朝しも鎌倉より告げ來りぬとく御入在て大法弘通なり給へ法弟も檀越も待わびたりと聞はべりぬとありけるにぞ高祖大士のその志意の從からざるをよるこび其日鎌倉にねもむさかへり再び本化折伏の勲を願ひ給ひけり

富木播磨守胤繼の性來書を讀ことを好んで篤く佛乘を信ト日蓮大士いまだ遊長たり一時より衣食資財を見繼て即問修行をばけま一給へり實よ末法万宗第一の大檀那なりことをもつて日蓮も一上行の再圖ならば富木殿は無邊行あるべ一火を盛よするものは風なりと遊ばしたるは此ゆゑなりけり百座說法の道場を寺と成て正中山妙法蓮華寺と名つけ大士手ずから彫刻あり一尊四菩薩また鬼子母神を建て本尊とぞ大士を閉山と一富木胤繼の建治二年の夏身延山に登り大士の御手を勞して剃髮一名を常修院日常又常忍と號す大士入滅の後初て袈裟をかけて中山第二世を繼大士御在世の時かねて此人の志の堅固なるを知召て一切の書類は多く此家へ傳給ひしゆゑ今此山は納る處高祖の直筆二百餘通よ及六齋未來門外不出と定め今猶其控を覆る在世の時より六老中老とも富木殿を敬ひ見ること大士に變らず正徳元年己亥三月廿日八十四歳にして示寂す中山三代日高四代日新聖人此人の當國佐倉の御三平兼大隅守胤胤の子なりこれに依て佐倉より富山に寺領一萬石を寄附すこれより寺門

盛になりゆき關東關西末山末寺五千七百餘ヶ寺よれよび今に總攝と一日常聖人の餘光病門にかゝやくこと仰で尊び備て信せよ一

國は道あり法も傳へあり我が神國の道の學びといふの京都吉田殿二位兼益これが長上たりこゝは吉田の御神領武州都築郡恩田御厨の代官益行といふもの年來日昭聖人と交り厚かりければ高祖大士これをよき紹介なりとて益行の吹舉に依て吉田家に門人あり五十一兼益一度詞を交へて大ひに驚き日蓮聖人の一代勲經の才覺を極たる異人なれば三十二の神號より神秘口訣の相承殘るところなく傳へたるよ一の二位兼益の筆記に密詳なりこれを極秘の語にあらざれば誰に利益なりといふ日蓮所立神道の根元なり此頃高祖大士の折伏弘法の針尖するぞく念く諸宗を攻なびけ僧俗男女落降て徒弟となり檀越となるもの目を迫て盛なりくるに北條時政守重時權人の鐵首を信と一居士を惹き事ばしけれどもいかんせん今は道世の身の上なればとて徒よ宗を破でれりけるが執權時宗幼少につき重時の子長時天下の政事を稱佐する身となりければこれを能き時節なりと重時ひをかみ子息長時にこれを談ト時に弘長元年辛酉五月十二日の朝諸小路の辻日蓮大士を召捕へ問詰所の吟味も遂すして情なくも由比が激にひきもてもさ船にうちのせ伊豆の伊東へ流罪とぞきこへける菅原池上進士等の檀越も我もくと驚き聚まりておければともはや嚴重の囚人なれば番の兵士棒うち撲四邊へ人を近よせずかゝる處へ日蓮聖人こ



の日に企が谷に在りけるが斯と云くより徒然にて出出か浪濤に版來り給ふにいまや御出船と見  
 へければかよはき腕に綱を引どり我れの流人日蓮が弟子の日期はばべるか一我をも共又岡  
 瀬させて玉ひねと聲を限り宜へを船人いかりの聲あらしげれのれ背道心奴大切の御用船に瀕  
 瀕なさは目に物見せんと持たる標と扱扱て網に釣りし存の手をばつーとては日朝御人あまか  
 のまはもこらゆべき一聲あつと叫びつゝ磯の渚に打せへられ其儘動と倒れ玉ふ餘處の見ら  
 中く一あわれ果なきありさまあり日蓮大士の船路に立揚り官人の衆中よ彼の幼少より我が  
 弟子よてまばしも側を離れざる不便の者よはべるか一何條一音の暇告させ玉はれと會釋して  
 此方に向ひ日朝くと御聲高は喚玉へその聲の御聲の耳入てや起揚り御船は未だ出さ  
 ず一かあら婦一や南無妙法蓮華經と合す掌も右の折れて片腕あげて泣人血の涙大士も臉をた  
 にかよ日朝日頃の教化を忘れたるよな今末法に御經を臥ればはたもて打れぬるは又遠く流罪  
 に成べしと法華經持品は脱れかれたる其明文二千餘年の今日唯今故の打揚りれの流罪如來の  
 念言違ひぬらへん廣宣流布も疑ひあし願て赦免の時を得て再びめらう値までは法の御爲その身  
 ま愛せよ此地と伊東の西東八重の潮路の遠くとも朝日青天に登り下り日朝鎌倉に在りてもよ  
 一月西山に傾くを見るときは日蓮伊東ありと知れさるべし一珠を指此經難持若誓持者  
 一塔塔品の偈文を唱給へば御船の波にのちられつゝ一聲りてく一聲りてく一句の延一句の縮り波

の間にく遠ざかり沖合とるかに漕出たり離依の男女隨身の法弟遠異口同音は御題目を唱へ  
 のおだなみならぬ磯際に袖まばりつゝ見送るうら沙風吹たつ朝陽は御船は見へまなりにけり日  
 朝と下め法弟越御名残の慕ひくして御船にさこへ一此經難持自然に節づく御經をその節に唱  
 へ覺へ沖の節の此經難持とて今の世までも傳へけり斯て御船の西をさして走りけるが程なく雷  
 風吹起り潮と風とに立合て逆巻波をねりさりくその日の中の頃伊豆の岬は近づきけり船中の  
 官人大士に向けん生憎風あれて船の進退自由ならずあれ見給へ彼處の風を改りこそ伊東の岬  
 にはべるか一此處の磯は程近ければ歩行給へと船よりねるしまるらせて鎌倉さして走りさり  
 ぬ大士のかゝる若海の船にのちられて御心慟しく疑ふ疑をうちかけて見やり給ふに往べき伊東も  
 程遠く巖石嶮と横たひり苦あめらかよ水草生岩にせかれてうつ瀝は白蛇のかけり狂ふに似た  
 り大士の御聲まづかに題目一まをし休み給ふ折から嵐の一葉のさし小船竹の子笠に隠みの一で  
 楢拍子高く漕ぎ來り大士を見て大いに驚き御僧は天より降てれいせ一か霧に捲れて來給へるか  
 これの伊東が岬の魚祖岩とて磯根別れ一離島今さみつる上潮時この磯伊の沙みちて願て願  
 瀕間の巖石あな危うひかなと舌を巻ての物語り大士のこれに應答して我の鎌倉の日蓮といふ  
 僧にて伊豆の伊東に流罪の身なるが爰も追揚歸り一死を死ねが活とても活がひもなく鎌倉  
 と思憎まれし者とれもひ芥のごとく棄たるならんと語り互へば何れもひけん漁者の小舟を岸に



さよせ我はかこの川名といふ磯村に彌三郎とて日にく此御事又傳説して世を渡る者なるが今宵は亡母の十三回忌の待夜にわれは佛事のたてたき此風の荒吹に命を助の救生もなされぬ協へぬ業報人御僧をたそけ参らせなばせめての迴答いさこの船に召れよと御子を取て舟又打のせ奉り人顔不分日とも一頃おのが伏屋の脊戸近き邊りの岸に舟さよせ妻の名を呼立れを妻も戻りの廻きを案紙燭ともして走りいで船のうちに大士の在すを見てうち愕くを夫彌三郎附なりと言さす話半途に灯を吹消し今日も村の莊官より洗罪の出家を歸依なさへ幸き目見せんと觸たるのと耳に口よせさやくにを彌三郎も心得て人よ知れてのあしかりあんどひそかに我が家に之のバせ奉り妻ともく一疋走り手水洗足何くれと足ぬがらの瘦世帯心ばかりの夕餼を供養し掛て見かくす蕪籠納戸のかたに休らひせ奉りこれより夫婦の人知れず大士の教化もあづかり茲にかくまひ供養すること三十日餘り高祖もふかく感下たまひ男はさもあるべき事なれと婦人の身とて共我をわかれみ何處も米の乏しき時節なるに久しくはごくみ給りり事いつの世にか忘れのべらん定め一我が父母の伊豆の川奈又生れり來玉へるかさらせばいかて鎌倉殿にいみ悪まれ天下の人よ嫌はれたる日蓮よかくまで信仰なり給らんやとて御涙とにもによるこび粉ひけり

大士船より上陸たまひ一處は篠見が浦とて伊東より南二里その磯を今日蓮崎といふ小田原

北條の家臣今村若狭守この地を領たりし時初めて堂をいとまじ萬治二年江戸大久寺の日蓮師これを寺となして海岸山蓮藏寺と名づく今は越後本成寺の末寺なり又川奈の篠見が浦を去事一里餘彌三郎姓の上原と云大士の船守と喚玉ふ其跡寺と成て船守山蓮藏寺といふ處

一處は彌三郎の法名なり

雨ならば宿もかるべき夕暮の露にそいたく袖ぬらしける今日本國も佛法渡て七百餘年念佛真言禪の諸宗似て非分なる如法の毒氣いつしか上下萬人の骨髄に染徹り今正法の法華經弘まらせ玉ふべきを惡み嫉むことたとへば、魚の毒を嫌ひ蚯蚓の日の光りを畏るゝも似たり其上鎌倉にねゐても伊府内を懼りなく名越の御莊室は火を放ち夜中狼藉なしたる無法人への何の詮議もなく正法弘通の高祖大士をば遠く此島に苦しみ奉るは世界不測の政道なり日蓮大士彌三郎夫婦に語り玉ふやう傳へさく一向門徒の親鸞上人の一流をたて妻と妻として色欲なく肉を食て貪念なく堅く菩提をこころざすとこれを清淨の梵行と名づければとて三夜を身に纏ひながら肉食妻帯を表織とす釋尊一代の聖經にかつて例なき魚鳥を喰ひ妻子を養ふ法外の付り却て万人の歸依をうけ又身よ一分の過失なく唯一切衆生を救はんと思ひ日蓮のかゝる實は値へり天の地とあり陸の海となり子は親をうち家臣の主君を罵り轉倒亂離の世なればこそ今惡鬼國に充滿し種々の凶難有て五穀登らば惡病も流行すこのうへいかに成ゆく世なるらんとありければ彌三郎もさううつ



むき新れとろ一き悪世に御題目の外頼みならずと夫婦念信心をばげまけること、當國伊東の領主莊司八郎左衛門朝高五月の中旬より流行の毒病に犯され既正氣を失ひ見る目いふべき大病に醫藥新念の驗も見えずのや命の際と見ゆるにぞ此伊東の親族に綾部正清といふ者が深く事を考ふるに此國へ流され来り日蓮聖人鎌倉殿の惡みはさることなれど其弘る御經は法華經といふ尊き御經なりとさくそのうへ不測の名僧とて御府内にも信する人の多しとせいふなるありし領主の病ひを救ん事を頼まばやとみづから大士に見へ奉りその祈念を願ひければ大士眉うちひそめ宣ふやう御經文にも一正法の妨なれば其頭七分に碎くべしと鬼子母神十國刹女の怒ひあり今その誹謗正法の罪を惡んで諸天の怒り甚し我祈るども憐れとも覺へずと辭退な一玉ふを正清強て願ひ奉りければ六月十七日伊東和田の邸へ入給ひ朝高の枕邊に坐して續經あし給ふよ三日にして正氣にかへり五日にして病ひ大半に除く朝高正清を始め妻も族もその奇特に驚き晝夜擧て題目を修行す朝高すでに本復に及びければ我が命は穢人の賜なりとて大士を仰ぎ奉ること大方ならず或時朝高聖人の何を持佛と成給ふやとありければ久遠の釋尊なりとてその法門を除給ふ朝高よろこんでいふやう茲よひとつの妙なることあり前年よりこの伊東が崎の海上に夜々光明を放ちたりしが一鉢の佛像を漁者の網より曳揚げたりこの阿彌陀如來なりとて近御衆て念佛せりさかるよその頃熱病諸方に起りて死すもの多し彼の佛像よく見まら

ちすれば釋迦如來なりければ村中の者呆れりて熱病の流行も此佛の所爲あらんいまはしき佛かなどて我が方を持來りぬ我れも生氣味をろけれと地頭の任に預りたぬこれを聖人にまわらせばやとて盛うち擲て大士に渡し奉りけり高祖の御法衣の袖もてこれを受取れしいたしき拜し給ふよ相好微妙の釋尊の立像にありければ尊ひかな久遠の本佛久しく苦みの海は沈んで在したるも今末法第五の時を得て光を放ち出現ありし正しく法華經の弘まらせ給ふべき時節なりと御願よかきくれてまばし自我尙の文を唱給ひける誠に入成の釋尊肉身の上行菩薩にめぐり値本地の世界に御對面あり其師弟の御喜びの本結大縁の現證にやあらんといとも尊く思ひければ伊東が崎海中出現の釋尊は大士一代の隨身佛としていま京都本國寺に安置せし八郎朝高その出現近き海邊に海光山佛現寺を建立と今この總堂と號し大行寺妙照寺蓮昌寺龍仙寺廣仙寺いづれも伊東山と號して其靈地を護る又朝高の邸の寺と成て佛光寺といふ今日將盡る夏の日の樹の葉にとよぐ風もなき茅の軒端ははし近く大士の夕涼にて在しけるが庭の切戸も書づる人あり誰なるにやと見かへり給へば去つと一和泉もてもくりなく因みたる江川太郎左衛門吉久頼の布被物もだらして釋來つ絶て久しき面會をよるこび我の近きころゆかりありて此菲山といふ處は住はべりぬ近來聖人のこゝに在すときくむかへ懸く防たてまつりぬとさこへげれば大士もよろこび年來の修行路より今は弘むる妙法の深き法門をかたり給ふに



昔久遠つしんで御經を頂戴とくだいしこれより深く佛乘ぶつりやうを信まず一門いっもんのこりなく晩宗ばんしゆ一時いつとき此配所こゝよれとつ  
 れて供養くやうを捧げ給ひけりさても鎌倉かまくらに在ては工藤吉隆くどうきちろうをまり四條通しじやうとほ上尋伊豆じゆんいずの伊東いとうへ入  
 を騎衣きい服品ふくしんを送り奉つることひさもさらず日朗にちらう日興にちかうも折まかしこに安否やすひを訪たづ大士だいしの慈あはれなきを  
 言續ことつづで共に喜びあへりけり時に天台たいたいの僧大乗坊松葉だいまうぼうしょうはが谷やよ來て日蓮にちぜん聖人せいじんの法弟ほふていとあらん事を  
 へともいかんせん伊東いとうに流罪りゆうざいとあれバ力ちからなし一の徒弟ひとてい日昭にちしょう聖人せいじんは大士だいしに代て法弟ほふてい檀越だんごつを教育くわうい  
 うけれバ大乗坊だいまうぼうも日昭にちしょう師しの法弟ほふていとなして給ひれど望のぞめども日昭にちしょう師しの兼かみて思召しめしめを事有ことあり元もとより  
 願ねがひ取給はず茲こゝも聖人せいじんの法弟ほふていあまたわれは何なにれなりとも御身おんみ撰せんみて師匠しせうと願ねがみ給へどありけれ  
 大乗坊だいまうぼうをば御遊おんあそ室むろにとまり其弟子そのでし衆しゆの立撰たてせんまたその學力がくちからを見むたりしが心こゝろに感あずる處  
 ありて一日いつひつ日朗にちらう聖人せいじんも向むかひ我われの願ねがひに在て本化ほんけの宗流しゆりゆうを見も一聞いっもんもいよく宋法そうほふの要行やうぎやう  
 の精進しやうじん細こる事を粗辨そべんへつりぬされ玉たまをつらね鐘かねを續つづが如ごとく僧俗そうぶくともにあまた御弟子おんでしの  
 在ありとも我宿縁われしゆくゑんあるにや類るいりは御師おんしと慕こくもひはべる何卒なにぞ我われを徒弟ひとていとなして給ひれどあり  
 けるよ日朗にちらう聖人せいじん笑わらて宣のたまふやう御身おんみの廿一歳にじゅういちさい我われは十八歳じゅうはちさい師匠しせうの若わかく弟子でしの年長としながたるも似につかひ  
 一いっからずとて辭退ことひな給ふと大乗坊だいまうぼうこれとさくこの漢あまじき仰おほかな百歳ひゃくさいの翁おきなも迷まよへば小兒せうになり  
 評ひやうに負おつ見みに漢あまじき教しゆへられたる例れいもあり胎たの多少たうしやうは優劣うりやくはあら下くだと理ことわりをせめて願ねがふよとこれ  
 をゆるして授液じゆえきさせ師弟しでいの契約けいぎやくを成給なりひける大乗坊だいまうぼう日蓮にちぜんとさくこへり此人こゝろなり願望ねが望ぼうの日朗にちらう聖人せいじん

願ねがひ願ねがひたる日蓮にちぜん聖人せいじん凡人ふたふんならず又また高たかき日蓮にちぜんより願ねがひされたる日朗にちらう聖人せいじんの智徳ちとく人品じんぴん五百ごひやく

のむかへを今いまに慕こいていと慕こく願ねがひけり

日朗にちらう聖人せいじんの大士だいしに別わかれ奉りてより願ねがひの御名おんなの忘れがたく朝夕あすは由比ゆひが波なみにいで伊東いとうの  
 方かたをよ一拜いっぱいみ御願おんねがひありけるが或夜あるや波なみ間に光明くわうみやうかや雲木うんぼくの流ながれ侍まけれバ日朗にちらう聖人せいじんこれ  
 を得て手づから高麗こうらいの尊像そんざうを彫刻てうこくし奉りこれを尊敬そんけいすること生身なまみの大士だいしに事ことふるが如ごとく御  
 飯いひを供たじ茶ちやを献けんじ丁蘭ていらんが親おやにつかへ一熱いっねつの奉心ほうしんたるをかるらず在ありけるが諸天しよてん感應くわんごうの時ときい  
 たり御教おんしやく発はつ有ありて大士だいし鎌倉かまくらへかへり給ひ此像こゝろを御覽おんらん有ありて汝なんぢが至心ししんの誠まことにて我精神われしんの此像こゝろよや  
 入いぬらん伊豆いずの配所はいしよに在て目めゆるむ夢ゆめよ日朗にちらうを見み一事いっこといく度たびどやと悦よろこび感あつ給ひけるこれ  
 高麗こうらい大士だいしの尊像そんざうを彫刻てうこくの始めなりこの尊像そんざうもとい武州ぶしゆ碑文ひぶん谷や法華ほふわ寺じに安置あんぢありしが元祿げんろく年  
 中故有なかつこりて同國どうこく堀ほりの内村うちむら日圓にちげん山さん妙法めうほふ寺じ日性にちじやう聖人せいじんの時とき此寺こゝにうつ一奉いっほうるまかしてより此こゝかた  
 願ねがひの利益りやくいらとるく世上じやうじやうに被かひれり又また大士だいし伊豆いずに在ありて伊東いとう八郎はちらう朝高あさたかが病やまひを加持かぢす  
 るとて御おんまたへの願ねがひを日朗にちらう聖人せいじんへ御相傳おんさうでんありしを此尊像こゝろよ因よみて今いまにこの妙法めうほふ寺じに傳でん  
 へ世よに御張おんちやう護符ごふと稱なづけて信心しんしん願ねがひの聖奇せいぎ特とくをいひるもの多おほくこゝに又また日朗にちらう聖人せいじんの徒弟ひとていとな  
 り大乗坊だいまうぼう日蓮にちぜんといふは相州さうしゆ小田原せうでんげんの人ひとよして漢名わんめい重俊しげと守時しゆじ成なりの子こあり三歳さんさいにして父母ふぼを  
 喪なひ遺母いぼの妙珍めうしんといふるよ育そだてられ亂國らんこくの世よのならひさしもの大家だいがも人に仰おほ望ぼうせられ願ねがひ



く東も亡びければ自製を切て天台の僧となりて今和化の宗と稱す後元亨辛酉年父母の跡を小田原にたづねて妙珍山蓮昌寺といふ一寺を建立せり又尾州名古屋妙光山本蓮寺も幽

師の草創なり

ひか前漢の世に于定國といへる官吏誤て孝行の婦女を刑罪ければ天下三年雨ふらず又燕の昭王人の饑夷を信として忠臣鄒衍を獄舎に繋ければ六月霜をふらせ一人の非道すらくの如いかにいはんや國のため世のために正法を弘通する僧を流罪と處していかで其現報のなかるべき弘長元年の五月高祖を伊豆に流してよりいくほせもなく陸奥守重時たゞならぬ病ひに犯されて氣狂ひ一くなり其年十一月三日あへなく逝去し其子長時また執權時宗も毎夜あゝ夢にのみ醒れ重時炎の車に乗て泣苦しむ形状も長時の幼現見へ病ひあらねど五淋麻痺胸うちさばいで何となく物恐ろしく覺へければ僧をあまた請待して一日五部の法華經を讀しめ其追善を營猶日蓮を救しかへさすの惡しかりなんと心に悔み今年弘長二年十一月十一日敍免の狀を認めさせ得ありければ其彼と障る事ありてその年もくれ今夏五月廿二日高祖伊東の海邊に立て日天子を拜し讀經ありしに異相の人來てこのまゝのや御名殘なりとて禮拜して去りぬ大士あやしみ思しけるに其日錄倉より知文をつたて伊東來る其狀に日蓮法師敍免あるべきよし仰出さる早し召遣さるべし家教久家承るとぞ辨たりけるこれによつて大士彼の地の人とに別れを告て鎌倉よ

かへり給ひければ師依の信者みなく御菴室も馳聚りかゝるゝに喜びをのべ徒弟連の何れも涙よくれたりける其夜人々皆燈臺のもとに聚り三年このかた營地のありさまをかたり大法すでに關東に耀き聖人の御本懐も稍満足の色現れたり此上の折伏を御罷あつて宗門の御教化のみあらまはしと口々に諫めけれども大士さらに開入給はず今末法強毒のいじめなり折伏を捨つべしに藥を止るが如く慈悲も似て慈悲もあらず猶この上は他宗權門を征伐せば三類の強敵いよく烈しかるべし其時こそ御經の利驗も現るべしとて益々既相辨けり此秋八月廿四日朝より雨風烈く人家を吹潰し山崩れて谷を埋め大雷八方に鳴いたためき由比の湊より大船八十餘艘微塵も碎けりとぞ同十一月廿二日にはさしも賢君のきこへありし最明寺殿御とし三十七歳にして逝去ゆりしかば上下の諸人親に別れし幼稚も等く世に力なく見へにけり爰も駿州菴原郡松野の邑主松野六郎左衛門といふ人あり同國上野なる南條兵衛の通家なるを以て高祖大士の權越となり夫婦ともにも歸後漢からすありけるが松千代といふ一子ありはじめその母夢に蓮華の咲を見て懐妊せり八歳の時四書を誦し生長に隨て十三經十七史諸史百家の書をよみよく文章をつくり生賢凡ふならず名利を物の數とせず出家とならん事ねがひ比叡山に登て剃髮しけれども彼の山の宗法に協いすとして本國に歸り或時岩本實相寺に遊ひて學頭智海寺印に此事を語る智海を以てめりて今鎌倉に日蓮といふ名僧あり實に當今の英雄あり我前頃この山の妙彌伯耆坊をすゝめて其法



と云一今の日興と改名して隨身するよりさくの御身も佛敎の模元をさりりんとなれりて御身も  
ゆき給へどありけるにぞ夫こそ近き項我が兩親の侍依ある僧なれば因縁備からずとて後葉が  
よ來り事の轉末を物がたりけるにぞ大士も別て喜び給ひ蓮華院日持と名を賜ひき此時廿一歳  
年六老僧の一人よ加へられ能登阿闍梨日持聖人と稱したる英傑なり

松野六郎左衛門本願として其地一寺を建立し日持聖人を明山とすその徒日教日圓等  
の嗣を繼でありけるが後年兵亂の爲よ寺院頽廢し元和四年紀伊の宣室寶珠院殿松野の地廻  
狭小として同國有度郡香が谷に移し伽藍を再營る一給へり今の貞松山蓮永寺これなり日持  
人は高祖大士入滅の後つらく思召やう我が師本化の再興として此日本國府松原くこに  
垂跡なり給ひ大法今大半國中よ弘まつたり此國の弘通は日昭日明等よてはや事たりぬべ  
間浮提廣宣流布とあるから日本一國は物の數ならず願くは我れこれより外國開闢よ渡り  
佛縁うすら靈夷の諸國を弘通せんと大願を發し給ひ今茲永仁二年甲午九月十三日高祖の十  
三回忌を我が山に營み十月十三日御正當身延山に登て大士の御廟を拜して御暇を告奉り明  
れば永仁三年正月元日給加て四十六歳元初の喜びに益と擧法を弟子に譲り寺を檀越に  
任せ唯一人法衣を兼て放立たまひ奥州津輕より弘前にかゝり路の傍の大石よ題目を刻て是  
を日本の名産として松前より林福よ渡りて行海知られせ成給ひけることをもつて日持聖人

は今よ正月元日旅立の日をもつて今日正當と仰奉るなりそれより年歴五百年その教化利益  
の跡一切知るべからずといへとも和漢ともよ泰平久しく彼國々より渡る書籍いと多き中に  
日持聖人化導の跡と覺ゆる事尤も多一行唐懸志地理の部よ分轄阜平の西に法華の五社とい  
ふ祠あり又題目村あり題目ばかりを唱へて諸宗の僧の入事を許さず又蓮華寺といふ寺あり  
東國府地勝覽といふ書に朝鮮の開城府に題目を唱ふる妙蓮寺あり長瑞府に蓮華院慶山縣に  
法華寺靈光縣の蓮華寺みな法華をもつてその宗旨を立るよし其書に記す又文祿年中朝鮮征  
伐の時大明より加勢の軍中に題目の旗見へたる事清正紀事といふ書に記せり近年相州備賀  
の船難風に流されて唐土よいたる船中十六人船長勘右衛門日蓮宗の信者にありければ十界  
の本尊を楢に掛て十六人高聲に題目を唱ふ彼の國の人々これを見て小船をもつて迎へた  
りければも言語一切は譯らず彼のもの勘右衛門の袖を更て多く寺々に參詣せしむ寺院凡十  
八ヶ寺みな當宗門にてその内の大寺を日蓮山法華寺と名るそ此寺に日持聖人の遺あり石碑  
よ五月十八日とあり年號は唐國の年號にして見馴ざる文字ゆゑ船子に讀せしめて歸りぬと  
年譜獨致よ見へたりこれみな日持聖人靈難弘通の跡にしてこれを見聞こと兩夜の星の心地  
して床一くも亦尋くぞれもいれける

此秋の最中の月もや、處て初雁が音を渡るなる古郷の空なつかしく日蓮大士老ききりに慈母の事



高祖大士 偶故國小 坂り給ひ 唯今死滅 人の狼狽 里





案下わび日朝その徒弟日澄の兩人を將て旅立つ、安房の國にたもじき給ひ絶て久しき我が宿を  
 それと昔信たまひに鍼藥と取交て家内に人の立騒ぐよぞ何事にやと尋ねたまへば御母公此  
 程病にふりて在せしが今朝も秋の良寒に俄に瘧のさしつめて唯今相はて給ひぬとさくより大  
 士の走りより日蓮にのべるはと喚べとさけへて亡魂の消て果なき今はの映れ大士の取直し其機  
 慮の厚さの定業も又かへ轉する法華の利益今一度我が母を蘇生させて給はれと本尊を書きた  
 りぬ機牙の極にこれを掛け御經讀誦わりけるは病即消滅の文よいたり粹切れたり悲母の氣息  
 次第に立かへり御眼を見ひらき手を舉て南無妙法蓮華經と唱へ給へば大士は嬉しく御側に寄  
 り御介保に日を経て次第は快復なり玉ひ涙ながらに御物語りかぎりえられぬうれしきに思はず  
 こゝに日數をかさねたまひけりこの頃安房上総の兩國に疫病大ひに流行し死するもの多かりけ  
 れば彼の御母をいのり活し給ひたる其奇特を言傳へかたりつぎて大士を尊信し此惡病を掃除さ  
 給ひれと願ふよぞ大士の白布に御題目をまたくめ其端を船の櫓に結びつけてこれを海に流し與  
 つ、浦々海上を漕めぐらゝ又小湊ちかき澳津の村なる井戸の中は護符を御認めありし石を沈め  
 この水を諸人に飲しめ給ふ程に忽ち疫病退散して萬人の喜悅いんかたなかりき今その井の邊  
 りよ寺を建て巖長山釋迦本寺と稱しけるこゝは當國男金村に小林民部實信といふものあり一乃  
 藤十郎齡四歳よりて世尊凡ならず常に寺に遊ぶを喜び出家を見て嬉しき歳も扇紗を結んで

袈裟と一木の實を連ねて珠數を造る父實信もこれ前生の約束ならんとて實名は舊き朋友といひ  
 幸ひ其兒の出家とあり道學たかき日蓮聖人必れかれぬ昔の好みをもて此兒十一歳なりけるを高  
 祖よ奉りければいと愛み給ひ御側さらず出家の學行満足して後年六老僧の其一人として大士入  
 滅の後身延山第二世民部卿日向聖人の此兒よぞ在ける

日向聖人は佐渡阿闍梨と號し博學智辯にして問答に長たり高祖の滅後十九年正安二年の  
 秋中老師天目錄倉圓成寺に在りて本迹勝劣といふ義流を立圓極實義抄を造て大ひに門派  
 を導る日向聖人名越え在りてこれを聞召天目を召給ふて御身の大士の御側在の日短し在  
 世の時曾谷教信誤て其義を立しも大士丁筆に教へ給ひしこれの御身等も知事ならずやと法  
 理を説て曉し給ひしに肯心解せず又七ヶ條を問聖人猶また其邪義を折く天目も懺悔して退き  
 たり其餘宗門も譽れ多し後年藤原兼綱本願として上總國植生郡藤原に一寺を建立し師を關  
 山とす今の常在山妙光寺これなり正和三年甲寅九月三日六十三歳にして示寂せ  
 斯て高祖大士の師匠道善御坊も教導養育の恩を報せんと九月の中旬華房の蓮華寺よ入て清澄に  
 かくと通達あり給ふ此蓮華寺は眞言宗よして住持淨圓といふも清澄よての知己にて十二年前此  
 寺を彼の念佛宗の爲に退出されし事もありけり身の上の昔話によそへつ、諸宗と法華との  
 勝劣をかたり給ふを淨圓種々に難しければむなく詞も言葉んより紙もえるといひんと九月



廿二日これを書きたり、住持淨圓に渡り給ふこれと念佛無間書と名づけたり、道譽和尚の紫竹の筇に扶けられ越なやみたる老の坂けり、路をたどりつゝ、蓮長に値んぞとて遙々華房の坊に来り、大士を見て心弱くも涙にくれ、練かへりたる縁言も權實わかぬ身の果敢なき言で止なば幼き時物よみ手習ふすべとて一教へ給ひ、一師の恩をいつか報る時あらんと思きりつゝ、念佛諸宗墮在地獄の業なるより聞耳うとて老僧に物がたりま、淨圓坊止宿して夜を日にあかぬ教化の法區海る心の感すみて釋尊の本佛なりといふよりを精辨へて清澄に歸山なし給ひけり、こゝに去る建長五年宗旨建立の其日より根ざり久き東條左衛門この國の念佛者をかたらひて高祖大士に種々に難し綺へども雀の鷹を怨み、蚯蚓の巴蛇を敵たふ如くかゝる邊界の念佛者果敢なき願宗の疲態よていかで囁得ん本化の鉄壁みな遠々に攻伏られ口れくも齒牙をなして在けるが此頃天津の領主工藤左近之丞吉隆大士を師依り奉り、時十一月十一日使ひ華房へ遣りて高祖を招待し奉るよぞ程遠からぬ天津あれば午の刻頃華房を立出給ひ御伴には日朝日澄鏡忍、觀師依の男女十餘人高聲よ御題目を唱へつゝ、霜に荒たる曠徑天津をさして急ぎ給ふ處に彼の法敵東條左衛門景信は兼て期一たる味方の腹心小手腹巻に身を固め前後に伏たる百餘人小松原の路真中大士を矢頭よ遣とぐり合圍を鳴りて打て出射る箭の雹劍の稻妻歸依の信者のその中に鏡忍左衛門次長英等もの、用に立べきの僅か四五人に過ぎれども手頃の護物を引提て大士よ怪我わらせ

トと目に餘る狼藉人に馳合せ、こゝらへて見へけるが東條景信馬上よ在て鎧を合せ鐵槍無礙に蹴たつるにぞ何かはもつて支ゆべき鏡忍坊は亂軍のうちよ肩先切れて動と坐を左膝次も左りの股に矢を射ぬかれ乗觀長英は袖を結び玉禱さかけし撥ひも法の爲身の惜まねと多勢に無勢す、でよ危く見へける處に工藤左近之丞吉隆は東條景信の住士北浦忠吾同忠内を連立て大士を途中よ出迎へけるが此体を見て大ひよ驚き、妻手刀の垂緒を取て袖ひき校り、袴の側を蹴折つゝ、眞一文字に馳來るを東條馬上にさつと見て弓に箭番ひて切て放つを工藤の躬を沈めて其箭を避射損たりと東條景信乙矢を番ひて射る處を矢よりものやく飛來る吉隆東條目かけて切てかゝる景信はや身をかり七八合闘たりするとき切尖ちる火花景信あやうく見へたる處を郎師凡十八餘吉隆が前後左右を追取巻滅多打よ切立られもどより金鐘にあらぬ躬の終よ多勢に切伏られ、こゝに討死ありたりけり、東條景信の自餘のものあり目もかけず高祖大士の御側へ馬一文字に乗よせて年來の遺趣れもひ知れやと此方の徒立彼の馬上二尺七寸の太刀眞向に振かき、唯一打と切つくるを大士右の傍手よ念珠をいたし妙法蓮華經序品第一と九字をさきり給へば太刀尖のびて珠の母珠ふたつにわれ餘る切先、傍右筋邊に三寸をかり切つくる仕損たりと太刀取直し既に斯よと見へたる折柄空中に鬼形の鬼子母大菩薩現らはれたまひ日月の如き、傍眼よはつたと睨み給へば景信が五體とくんで動と得ず眼眩んで馬上より倒と落たる時しもあれ、堀と吹來る夕風よ



文永元年  
七月十日  
東條景信  
高祖を討ん





露立舞て遠近の物の装目も分ざりければ大士の間にこそと逃れ天津小湊に身を置も却て便りありかりなんと武藏往還市が坂にさしかかり給ひに日の暮かゝるあやにくに空かきくれて雪ふりいだし北風さむく身にまみて眉間の御疵も痛のたへがたくれりければ傍の山根に洞のありけるを見そなり一此中に入て今宵のこゝもやどり給ひ夜もすがら降雪風に御疵移みて惱ましく御經をよも夜の明るを待て給ひに明の朝人の往還もとたへたる此坂の雪胎分年いと闇一ひとりの老婆念珠を杖よ持て漸くこゝに登り來つこの洞をさし覗きまば一驚きたる体なり一が我と此郷の土生神へ日參の歩行を運ぶものにはべり御身いかなれを雪に埋み一此洞に夜を明し給ふぞよ見まらすれば貴頼に疵もあり此雪風の疵口に入れば御爲あしくべらんにと自身被し綿帽子を脱て大士も奉る大士はこれを押いたし御疵を覆ひ給ひけるこれ當來今の世も高祖の像に御綿を着奉る事の始と知られけりても日朗日澄の兩人漸くその在處を尋ね當よろこびあへるうち此日の夕つかた昨日小松原に討死なしたる吉隆の父工藤行光高祖大士のこゝに在すとさして御迎ひよ参り自御手を取て我が天津の邸に請下奉り我が子吉隆小松原にれいて法華經の御爲よ討死したるの天晴佛門の忠臣なり其妻も懷妊すでに臨月も近し吉隆存生の日出生の兒も一男子ならば聖人の御弟子にならばべらんといいし事猶耳も残りぬと物語れり大士もまば一御涙も咽び給ひける後にこの子男子よてありければ父の遺言もまたがひ徒弟となく刑

部阿闍梨日隆といひ一は是なり高祖大士は工藤吉隆が討死を哀れみ出家の儀式を以て送葬し法名を妙隆院日玉聖人と賜ひけるこゝも佛敎東條左衛門源信の小松原の時願いいさゝかなる御疵を負けるが其疵より物身腫爛次第も漸入その夜大熱火焰を揚五體の節々鐵の杵をもつて搗るゝがこどく牛の吼るが如き聲をあげて泣喚り目も當られぬありまにて相果ける惡き見ひ一室に備て妻子とら其邊りへり寄がたく非業の死を遂たるもこれ全く正法敵對の現罰なりとてこれを見聞もその不測を感下却て高祖を歸依するもの多かりける工藤行光は我が菩提所なればとて天津領内眞言寺といふに大士を入奉る住持の僧快よからすして此宗流を講るこれよれいて日澄師の此一問答をば我に許し給れと大士ならびに日朗聖人に願ひ住持の僧を捉て眞言の邪説を論破る其僧たちまち改宗して名を日宗とあらたむ大士に寺號を賜れとねがひければ大士笑て日宗が手にて改宗なりたれば其儘日宗寺にてよかるべいとて即日澄聖人を以て開山とさだむ其寺今に歴然たり

刑部阿闍梨日隆慈父吉隆討死の地に寺を建て觀忍坊日曉剛を開山と慈父日玉を二世と一其躬三代に順列せしめ妙隆寺といひ今は觀忍寺といふ小松原御難の舊地の今の聖人塚の地なりといふ古今道筋もすこゝの違ひのあれと地理をもつて考ふれば其理あたる歟



宗の寺は宿り給ふ住持の僧敷講にものかり法勝となり名をも日正と賜ふ寺を蓮華寺と名づく  
 たる威法を弘め諸宗の法敵を攻まひけ給ふこれより常陸の國筑波山の麓を過給ふよこの山男體  
 女體と峰を分たる靈山にてそのかみ釋の得一こよ住で法相宗をひろめたりと首傳ふ霞が浦  
 より筑波峰に見渡す遠き山水の風景を賞譽して野州奈須よりたり給ふ斯の近き頃中風の御心地  
 にてありければまよこゝに温泉に湯治して御身を養生な給ひつゝ此地を發見ありけるに原  
 中五尺ばかりの大石の見へければ御筆を染て題目を認め玉ふ後人そのまゝに彫刻て今に傳ふ  
 中古野火のために焼れたりとして年號見へず二年四月十三日とあるのみあり今の小兒の歐初にと  
 必ずこゝに供物を捧るゆゑ世にこれを歐初佛といひつたりたりゆくてに藤原といふ里あり里正  
 治郎助年七十ばかりかひくく大士を我が家に迎へて師檀の契を結ぶ師依のあまり次郎助泣  
 ていふやう我年老たり再び聖人を拜一がた一我れ死せば誰を導師とて冥路の燈とせんと  
 ありければ大士四流の旗を製して上行無邊行淨行安立行の四大菩薩の名を書て是の汝が導師な  
 ることと與へ給ひければ治郎助よろこびにたへき寺を建て藤原山清隆寺といふこれより路を宇  
 都宮に求め給ひ君島氏に宿り給ふ其家の老母剃髮して名を妙金と賜ふ後年日印聖人を請て一  
 寺を建立して法光山妙金寺と名づく此寺は夜光といへる御本尊を什寶とて宇都宮の城主下野守  
 深河の姉大士の高徳を慕ふ名を日正と改て受戒す後文永十一年こゝより一寺を建て名を長宮山妙

正寺と賜ふ城主景綱初め妙正尼も高祖の御身の懺ま一げなるをいたり中風の病より常陸國藤原  
 の温泉功能あればとて勸め奉るよぞ前業所感の疾なればととも愈へとも思さね人の心は戻  
 らトとこの温泉は三日ばかりも在けるか程さく宇都宮を歸りまよこゝ此地は法を弘め給ふ妙藤  
 といへる老婆ありてふかく大士を師依したるも此時のことなりけりとかや茲は十月の初めつか  
 た上總國夷岡郡奥津といへる地より墨名五郎といへるもの尋來て大士に見へ奉り檀で首上るや  
 う我が主人佐久間十郎左衛門重貞元より佛道を師依し一領内に釋迦堂を建て香華を供養する事以  
 ち一近頃墨人の宗風をつたへさ、且その書物を拜み奉り何とぞ今度墨人を請待し奉らん爲ふ  
 と此五郎御使ひを承りぬとありければと大士その建路の威志の厚さを挨拶し程さく墨名五郎を案  
 内として奥津に赴き十月十五日より廿五日まで彼の釋迦堂に在りて御說法ありけるよぞ領主重  
 貞一門のこらず敬宗一其歡喜にたへず今年七歳なりける長壽庵といへる我が兒を徒弟となす  
 然るに重貞が季の會第ありて竹壽庵とてこれも今年七歳なりけるが長壽庵が出家するを見て我  
 も僧になして給ひれど泣て止すこれ宿縁ならんとて子思長壽庵會第竹壽庵とも釋迦堂にて剃  
 髮せしめ法弟とす同七歳あれども伯父と姪となり大士ふかくこれを憐み給ひ伯父の竹壽を日保  
 と名づけ姪の長壽を日保と名を賜ひ兩人ともに餘年増進して後年廣くこの近國を弘通し中風信  
 十八人の列に入給ひけり



此奥津の阿彌堂と寺として廣榮山妙覺寺と號し日家日保ともに此寺に在りて弘通す弘安年中  
 兩人心を合せて小湊國住寺を建立し高祖をもつて開山とし日家の二世日保は三世と大將す  
 又奥津妙覺寺の同く高祖と開山と一二世の日保三世の日家と定め世の體法の交り斯の如く  
 なりしゆる此兩山を今に同根一寺とす

此時にて鎌倉には國うちついでたる凶變に今年も奇怪の事のみ多かりき六月三日秋之助義景  
 十三回忌の大法會無量寺にて行れ十種の供養を遂若宮別當隆辨僧正導師とて隨侍わり伊勢入  
 道行願始め並居追善最中に大雨大風荒いで、本堂の長梁くけ委縮あまた即死しければ諸人の  
 奇大事と述べる處が谷の山々崩れ落家人ともに牛馬までみる土にうつりられ親類縁者を見廻る  
 こと觸れを捨て人々の驚わりくも前代未聞とさこへけり又八月十七日相模武藏大地震十二月四  
 日の夜彗星一天を照ること去年七月五日の 晴の彗星より廣大にしてその芒尖七十餘度に及ぶ  
 この天災いかいあらんと掃部頭範元をばとり晴茂國權等の司天曆學の輩出仕よて將軍家庇の御  
 卿も出御ありて是を問召在府の大小名ハ實の子の牀に列座せり司天の官人言上すや、世に皇  
 帝の時初て此星出てより今に至るまで八十五度一度とて凶變あらざるハ一傳へし其芒  
 氣の差どころ必ず災變ありその光りの色青き時と王公將軍破られて四海因窮すその色赤きは盜  
 賊國に起て上下の歎ふか、また其色黄なるハ文人權戚を没て國宗ひたる又色の黒きは海邊に賊

民起て中國を惱ます海國土に在ゆるよその色天も顯る、なり天下の御大事これに過すとわり  
 ければ府内の宮寺に仰せて御禱り初りける若宮の僧正金剛童子の法を修し安祥寺の僧正ハ如法  
 尊勝王の法を行ひ陰陽師業昌ハ天地災變の祀を修行し同國權は属星の祀をなす又翌日陰陽師少  
 允晴茂を御所の西の蓋に召て如法泰山府君の祭祀を行し將軍出御有て鞍置馬一匹銀造の劍一  
 口手箱二合に紺の絹を入れて取せ給ふ賊も重き御憤とて將軍とて恐れ給ひけり此御禱正月十  
 二日又始りて蹠蹠なる鎌倉山の春氣色も絶て味る人もなく潜み渡りて心さびく日を送ける中  
 に二月朔日の朝日ハ出てありけれども空墨のどとく暗くして物のあいろも定かならずたれこと  
 ならぬ日の光りやと思ふうち已時雨ふりいで、小籠な一申時にいたり雨の色うるしのごとくこ  
 はいかよと見るうちに頻りに泥をふらしその夜よもなりけるに樹々の枝葉は泥よれされて倒れ  
 ん鎌倉の町中の田の中をあゆむが如く開闢このかたの珍事かあとこゝろなき野夫農婦まで  
 身をふるはして恐れけり又時の將軍宗尊親王も北條一族の我意も奪められ思ひに曇る月と日の  
 惠みかひなき傍身を歎き表はは傍病惱と聞へさせ給ふ密に松殿僧正法印嚴養なきいふ名僧を相  
 執權時宗を調伏な一給ひけるが隠れたるは顯れ易く陰謀のやくも露顯よれよび將軍も是非を  
 く夫人興よ召て京都にかへり給ふ十一歳の時に鎌倉にとさめき下り現どもなき十五歳入しく住  
 馴し修所を立いつるとその名殘を惜み給ひ河瀬川を渡るとて



かへり来てまた見んともかたせ川濁り一瀬の澄ぬ世なれば」と遊ばしてなくく帝郷に還給ふ其御子惟康親王心すか三歳にして征夷大將軍に任せられ天下の御主と成給ひ一も偏に御幼君を名として政道を自在になす北條の計ひとこと知られける今年文永丁の卯高祖大士の御母妙蓮尊尼久しく病の床に臥て在しけるが己に去る年妙典の經力を以て定業を請延たる事四年なり今の此世の縁もこれ限りなりとて臨終正念の御題目の外他事なく見へさせ給へば大士も御側を去すして晝夜看病ありけるが日朝日向日澄諸師もともに師のちからを扶け介保し奉れり檀越工藤行光佐久間重貞小林實信の誼は新に一切の費を供養し奉れば妙蓮尼は何も事慮たるよしもなく其秋八月十五日睡るが如く御臨終ありければ大士も悲みにたへたまひ老弱みづから葬式をいとなみ塚を築き石を建て佛事をいとなみ往て歸らぬもの年月よりかかれて再び相見ざるもの親なりとて百日の間其淨土を禮經し名残れくも房州を立て下總に赴き給ひけり御兩親の御墓のちよ寺を建彦名を合て妙日山日蓮寺と號す又遠州賢名の淨土敷跡にも賢名山妙日寺を建立しともに慈父妙日尊儀を以て開祖と仰げりこれより大士は下總國植生にさしかり給ひ一處路すがら雨の降り出ければ茂りのうちの注堂と立入給ひしにこゝの傳教大師の開基より大慈山笠森寺とて觀世音の靈場ありければ高祖と仰りあへず

うきに降る雨の雨ぬれとてけふ笠森を身も着ざるかな」と口吟み茲に一夜を明し給ひ

よ戸の間をらむ有明がた墨田の里なる高橋五郎時光といふ人なりとて畏るく此堂に入來り大士の前より掌を合我の常は此尊像と持念するに昨夜更闔て枕のうへに夢かわらぬか觀世音現れ給ひ我が堂に侍りし人あり早く廻へ奉れよとありければ夜露を拂て御邊ひにまひりぬとありけるよど大士其家に入て教化する給ふ後年中老日秀聖人此地に寺と立て庭谷山日福寺といふまた滋原の邑主齊藤兼綱も高祖を禮待し檀家と成て晴依淺からずかくて大士の鎌倉を歸らんとて若宮の邸へ立寄給ひ一は主富木胤繼大士は向ひ奉りもはや今年も餘日な一殊は近年受へぬ悲さなれに枉て此方に年を越給へと強ちにといめられ大士もそれと心定めあら玉の春を待たまひけり此年のうちに古河の邑主千葉氏富木の二門なりとて大十の徒弟となり名を日胤と賜ふ後建治元年本尊を御授與ありて故郷古河にかへり法興山妙光寺を開基せり一日富木胤繼大士に言やう我に一子あり性質學問を好み今度日向師聖人の御座る在て立願せし見てまきりに出家せんとと願ふおはれ徒弟の數に入給はらば彼が燒律一家の慶びならんとありければ大士これを許して大戒を授け名を日頂と召る時年十六歳なりける大士も文永五年の春とこゝに迎へ日頂をも伴ひて

日頂聖人は伊豫阿闍梨と號し真間山弘法寺の天台宗の檀林なりしが先年住持了性僧都富木殿と論破られて還天せしより學寮の所化も四散になり失今は住する僧も一此寺の富木



代々の香華院よりけりけり、凡庸との無住なるを悲しむ大士日頂こそ有縁の山なりとて入山せしめ開堂ありし廿六歳の時

後年大士入滅ありて三回忌を池上よて營み一時日

頂聖人の鎌倉宗論の事ありて此法會は値給はず父日常大に怒り宗論の一生の所作なり

三年の法會の又と來ることなく殊に其身六老僧の一分にありながら不維不孝の所爲なりと

てこれより面會なしたまはず日頂聖人その過失を悔て中山の門前に來り銀杏の樹のもとに

立て寶塔品の偈を誦で七日の間晝夜御赦あらん事を願へども聞入給はずかくて正安元年の

春日常病は罹りし時日昭日朗兩聖人その病を訪ふ事春日頂師の過を詫給へども聽ずその

躬は着て在たる法衣を脱で兩聖人に渡し給ひ三月廿日日常聖人示寂そ日頂聖人の邸にいた

り勘氣の身おれり門に入給ひ老圃に跪つき兼て賜ひし御記念の法衣を兩の手に捧げ御經を

讀誦し聲を限り泣て立去給ひしがそれより何地に在しけん其終る處を知らず日常聖人無

慈悲の親に似たれども高祖を諦使するの厚きなり日頂聖人又不孝の子に似れども宗義を守

るの固きなり此親此子兩人の行狀その是非得失凡慮の裁斷却て恐れありとぞ思れける

昔天竺の蘭伽を賣者ありけり此を買者この蘭伽は期爲んと思ふとを立願してこれを離るよいか

なる願も協はぬいなし其蘭伽の耳の孔の深きと淺きとによりて價に高下あり常は正法を聞たる

耳は深くして一生佛法を聞ざる耳のその孔淺しとかや茲に日蓮大士今來法に入て二百餘年日本

の萬人その耳の孔の淺きを憂ひ玉ひ本地秘妙の大法を脱論し給へども身の爲にする良薬は口

に對かる世の誑語却てこれをいみ悪みするらされば愈々彼を不便に思召給ひけるの誠は

佛と聞つべし今年戊辰の春唐土大元の世祖忽烈その國の至元三年黒龍といへる陛下を使と

て書翰を日本に贈る朝鮮の國王王植權書をなして臣下藩草といふものを案内として正月十八日

京都に達す其大元の書翰を披見る大蒙古國皇帝より日本國王に首す我が太祖天命を奉り來國

とて今中國に居て四海を治む高麗國もいや我が手に入願く日本我が國と好を通り利親して

相交らば四海一家の如くならん事を思ふて使を遣す處なりとあり又高麗國王の藩書に我が

國大元の命に従て其徳に愧く皇帝今日日本と好を遣せんとするは利慾の爲にあらざる偏に萬國一

體の體をなさんとの心あり早く貴國の返翰を待と書たり京師宮の除穢區々にて其書翰の文盲無

知なればとて返翰も及ばずそのまゝ使者を遣歸されけるこれ大元蒙古の日本にたりなす始に

して高祖大士乘て安國論を説たる諫言に符節を合せ宋代の不測これに過たるはあらとと

と思われける此大蒙古といふ國の府土の西に當る戎夷あり其先祖の起り一人の寡婦あり與

梁き腐のうぶも獨起ありけるか夜毎天より光明ありて其婦の懷に入其光に感して自然と

孕めり月滿て安産し三子を産中にも季の男子孿生れながらして機杼拔群なりし其子其孫

ついでに才氣すくれ終る廣大の威勢を成し難陀と合体し雲中九原の地を侵して九十餘部を征伐

す

す

す

す

す



し所阿山渡數千盟の間に打殺さるゝ人民算を知らず燕京を亡し高麗國を降せしめ六十六歳にて  
 薨死しこれを太祖皇帝と稱し第三の子窩淵後を繼いで太宗皇帝となり陝西の丘州城を攻落し金を  
 亡して宋國に及ぶ太素死して憲宗位を即その命弟忽必烈世を繼いでこれを世祖皇帝といふ至元元  
 年都を燕京に轉へ且に大成乾元とある詞に依て元の世と唱へ今四百餘州を伐城め其威勢高麗を  
 ても驚き虎も畏るゝ國の名を大元蒙古と號になんわりけるか其國王日本を奪ふ心われをも表に  
 仁徳の詞をかきり此國に使をつかはせむたとへば道と違たる劍のごとく日本の厄難この時より  
 はよりその危きこと風前の塵の如く尙書よわらうすいかも變りゆく世の權をと思ひ煩ふうち五月十二  
 日の朝日輪二たつ並び出たり因東國西見するものなり此時に當て日蓮大士書通を認て奉行權  
 權左衛門尉光則に捧ていふ抑々正徳の大地震文永の大津風飢饉また疫病日蓮これを御經に考へ  
 なるに念佛禪宗等正法の法華を邪魔なすゆゑに此災を招けりもし我が練を用ひ給はずは他國  
 佛道難とて國國より此國を犯すべしよ一去る文應庚申の七月一書の書と因の御手を以て御館に  
 奉れり老かしてより此方既九ヶ年今年大元蒙古より使を此國に來らしむること我が先言に符  
 合し終れりこの異國の敵と相くもの念佛等の諸病なり又此外敵を逐活するもの唯日蓮一人  
 なり國の爲法のためいふんかこれを言上すと書たりける奉行光明有無の返答なれこれに依て  
 庚申十一月十一日また一書と書て東國北條時宗に奉つる天下の安危存亡は法の權實邪正に依る

と前年安國論に述たるが如し願くは當國諸病の學者知識と稱りなく問註所に召れ此日蓮と稱  
 せし御前に在りて彼の宗と我が宗と邪正明白に開示され其邪惡の宗を捨て此純國一貫の御  
 宗と御依あらず此國の安泰ならん事奉を反すより速ならん國を治め天下を平和にするの  
 根本はこの一貫の宗論ありとぞまゐりしけるそのは平左衛門尉北條彌源太極樂寺の良觀建  
 長寺の道隆大佛殿の別願隆興淨光寺の行教壽福寺多寶寺長樂寺以上合せ十一通の書をつかり  
 て其邪惡を責めかば此書々いづれも御山林ありて經からぬ寺門みれど其日蓮の書は極書して  
 書々訴上るにぞ上下萬人これを傳へ喋々くも罵りけるこゝも先年北條義時蝦夷の傳として  
 彌五郎をつかりて其州津經に書と稱へてありけるが此秋蝦夷謀反を企て東國に亂入し安藤五  
 郎これがために討死して狩さへ焼うたれたるより鎌倉に注進す大士これを聞たまひ法華權起に  
 書ふやう哀れなるかな我が日本國際古西も動き蝦夷東に叛き國に種々の弊災起るこの災難の根  
 本を知る者い絶てなり反て法華經の行者を責めまをい念々國も災を起ぬるを知らず今も見よ  
 く諸宗の説教を信し此日蓮を誹へて又々流罪死罪及ぶべし我弟子拉那と名乗ん若し心に  
 し思ひるべからば妻子を思ふことなけれ權威を畏ることなけれ命惜さず法華經を捨たりよも  
 罪よ際古の爲にうち殺さるべしとても捨つぬ身なりせば一乘法華の爲に骨身を碎き此生死の  
 のなを切て佛果を得らるべしと懸懸たつる世のありさまをなみたながらにかたり給ふ明れの



次永六年二月廿一日の曉に月三輪並び出たり人皆奇怪として凡物す茲に極樂寺の眞觀上人の  
 世も聞へたる律僧にして此年月伽藍を造立すると八十三ヶ所大塔を建ること二十基一代經藏を  
 取立たると十四部諸國に橋を渡す二百八十九ヶ所路を造り坂を坦よその身に二百五十戒をか  
 たくたもち三千の威儀を刷正女人の手より物を取らず青艸を踏ず戒行堅固の生如來なりとて  
 師の御信仰浸からず世の人其道德に懐くこと小兒の母を慕ふが如し今日も御館又御候一  
 切諸奉行人と膝つき合せての物語り戒律の正宗を日本國一圓ふれ一弘め第一國土に酒を造る  
 ことを禁制一米穀をゆたかにして喧嘩口論放埒騷擾の根をたやさんと此年頃これを願へどもい  
 かんせん日蓮といふ惡僧に妨げられ其粹さへ得果さず嗚乎寸善尺慶なるかな日蓮死なすの佛法  
 の亂阻にあり國土も安穩よめあるまじく噉りかけたる天目の茶も沸となれこの事の誓て罪僧が欺  
 なりと誠一やかに聞へ揚る其説の末終に高祖の御大事とこそ知られける斯てこの頃甲州の農  
 夫なりとて彼處の往還此處の辻と大士よつき懸ひて其説法をき居たりがその法理といひ立  
 續雜を見てこれ日本第一の名僧なりと思ひ定め大士の御慈悲に來て戒をうけて改宗と大士その  
 名を問給へども甲斐の國巨摩郡今諏訪といふ片山里の賤の身にして名をきこへ奉る理のものに  
 も有べからずとて立去けるが幾程もなく一人の童を携へ來りてこれの我が長子にてはべるあま  
 りに聖人の尊く覺ゆるを何とぞこれを法弟よし炊の扶ともき給れと願ふよぞ大士の兒を御

覽あるに眼光人を貫くこれ尋常のものよあらずとて法弟と一名を日蓮と賜ふ時にそが父も側邊  
 にありていふやう願くは我をも御手を勞して剃髮せしめ給へ御門前の埃を拂ひ御庭の草なぞ除  
 て事奉らんとあるよ大士頓て髪ををろ一久本坊日元と呼給ひ親子他事なく仕事けり  
 久本坊日元の俗姓嵯峨源氏安部貞任が末裔なり貞任滅亡の時その母懷妊ながら甲州の山里  
 にゆかり在て茲にかくれ其出生の子姓を棄て農民となる久本坊の其正嫡あり日蓮師此時  
 十一歳後に三位阿闍梨と稱す十三歳の時日明聖人とともに宿谷の土の半よ入十九歳の時藤  
 が谷に龍象坊と問答す正安二年駿州富士郡袖野村又竹養山山法寺を草創一正和二年五十五  
 歳の時身延山第三世と相説す同四世日善聖人も久本坊の子にして此日蓮聖人の舍弟なり  
 今年卯月の初旬大元鎌古より又對馬をもちたらしめて對馬に來る宗對馬守宗資これを追かへず關西  
 の使その歸るさよ對馬の國人塔次郎彌三郎の兩人をとらへて船に載て歸國せりと鎌倉の風評と  
 りくよぞ在ける或夜久本坊日元大士の御肩を摩ながら語るやう我が生國の至極の山國よて人  
 間も木石のやうよめあれど山の姿水の色風景かへつて見處多し秋よりの寒冷の他國に勝りて  
 ぎがたけれども青葉にまげる夏山は木蔭涼しく岩間を下る瀧津瀬は浮世の塵を洗ふが如し  
 かよき折を得て聖人を伴ひまゐらせたりと在けるにぞ去り我も豫て願ひしことありいでや甲  
 斐の國より富士山に登らばやと思ひ立日を黃道吉日これより旅の要事一つ程なくこれが道ある



べよて甲州吉田に着給ける本より久本坊の職人なりとて神職雖も内の方へ入奉る平内治んで  
 教化をうけ授けしめて本尊を賜ふこの近き四姓法を聞て歸依するもの多し幾年こゝに寺を建てて  
 群山上行寺といふ大士此地に滑溜のうち信者十人ばかりを案内として富士に登山なり給ひ時よ  
 天晴風静にして十三州の一望の眼下に通り關に關浮無雙の名山なりと賞歎なり給ひ兼て書寫在  
 法華經一部を山の半腹に埋り巖石の上に盛して誓願御經のそび給ひける其地を今も經が嶽と  
 て其古蹟をどゞひ此末法萬年廣布の基を堅りんどの祖意なりといひ傳ふそれより山を下て小立  
 村に入まばらく懸ひ給ひに此里人兼て聞つる日蓮上人なりとてこゝに群衆て題目を唱へ各々  
 手に紙をさげもちて御本尊を請高祖これと數へ見給ふに二十八枚ありこれ御經の數也とて  
 此紙をひとつに粘合て一紙となし大筆に題目を書て村長渡邊廣太夫に授け給ふ今駿州關宮光長  
 寺に傳來し岡宮二十八紙の曼多羅とて世に名高しそれより山梨縣勝沼北原を過て田並にやせり  
 給ふ主翁の願、まかせ大黒天を畫て授給ふ今も存在す又此地に黒川といふ其頃金銀山有て千  
 軒餘の籠賑一かりかぞ大士も此里に入て弘通なり給ひけりすべて當國の大法有縁の國みや  
 わりけんまべの弘通も改宗のもの多くいまに勝沼に上行寺黒川も法華寺北原も立正寺等有て  
 その靈跡をとゞむそれより相州足柄郡板橋といふ地にかゝり衆が鼻といふ處の石に腰うちかけ  
 此わたりより養房上総の方便圖はるかに見ゆるにぞ古蹟あつかしくたゞりりまば一雨限を聞

て妙日妙蓮へ御追福の御題目を唱へたまひける後に朗慶聖人この地に寺を建て給ふ山妙福寺と  
 いふ高祖大士の漸く長月の頃松葉が谷も歸り給ひに歸依の男女はこれ喜び不歸依の族の又  
 いかなるとを言出んとたがひも惡み語りけるさるに年改りて文永七年午の二月十四日慈父妙  
 日尊儀の十三回に當りけり大法會を修行して厚く其冥福に備給ふ此頃些のいとまを得て十華  
 抄の十勝善無畏抄等數篇をあらわして門弟中も示し玉ふまかる處に安房上総の檀越より鎌倉  
 に人を馳此春の末より夏まかゝり又々疫病の流行前年の如しぬれ聖人御渡り有て其横死を救  
 ひ玉は往とありければ高祖佛工師に命せて我が肖像を彫せしめ白布に題目を書して其木像の手  
 にかへこれを使に渡し此像の我に異る事なく持歸て前年の如く浦々の海に曳渡すべしと仰あり  
 ければ彼の國の海岸に是を執行し程なく病難うとらぎける國中大ひも喜で改宗の者多かりし  
 とぞ此尊像今に江戸に傳へ布引の祖師として牛込幸國寺に安置せりかくて今年も吳羽島村より  
 やき年月のあらたまりたる文永八年辛の未世の春なれど何となく穩あらぬ近年近日人の心も  
 腫の影さだめなき心地して花さへ待ぬ彌生のはじめ大路の砂を蹴立つ、京都よりの早馬のま  
 た何とが出来つるを耳を側てさくももうき大元蒙古の國王より兩度の使に返事なきその恣慢を憤  
 り長瀬を便として又々築紫に来るよりの往還にぞ有けるかく靜ならぬ世の中よかて、加へて  
 此春より雨一滴も降ずして夏にいたりて大地乾き田植時なる入梅にさへ雨氣僅す氣色もなく六



月には江河の水濁りて、魚の炎天に焦れ草木の色をうらなひ井の水盡て濁を汲べき術もなく人の命も頼なき大旱魃海の潮さへこのころ引潮有て満汐なくこれを天下の大事と見ゆるにぞ極樂寺の良觀上人を御所に召れ貴僧年頃持戒の法力をもつて雨を八大龍王に請出民を潤し玉のいと懇に台命ありければ良觀上人身の不肖なれども佛力法力をもつて頓て驗を現し奉らんと御受をなす退出ありし尊くもまたいさましく見へにける此良觀といふの大和國瀨島の人にして姓の伴氏十一歳の時より志貴山と學問十三歳の時五辛肉食を斷し其頃戒行堅固の徳たかく幾何年關東に下向して律宗を弘む北條義時の子三男陸奥守重時ふかく此を信し極樂寺を建立す後に入道して其境内別荘を一つらひ茲に念佛して終る其子長時業時いよく信仰すもを以て今度此雨請の大任を仰つけて其名付の徳を天下に知らしめんといふ北條家一門の結構といはれける

極樂寺の靈山と號す真言律宗にして南都西大寺の末寺なり其頃關東十三ヶ寺御所所のこの一にして七堂たかく樓に聳へ境内四十九院世よ目ざましき大寺なり今の衰廢して本堂と寺中の吉祥院のみ残り寺領今の九貫五百文を寄らるむかゝ良觀上人大佛門前の西桑が谷といふ地は一院を建世に類なき病人を聚め食料醫藥を施し別て癩病の前世の言ふしはとて戒を授け念佛せしむ此時癩病人多くあつまるよし元平傳書に見へたり

一は此ゆゑならんか

一輪の梅を見て天下の春をり半杓の水を汲で大海の味を辨ふ深きはもつて深さを知り小の以て大に譬へつべし茲は良觀上人既よ天下の台命を受けて靈山が崎にひろく檀を構へ大慈大悲の愛を播き甘霖の雨を四海よそ、がんものど六月十七日早天より修法始るよ一高祖大士これをさし給ひこれ幸ひの時節なりとて良觀上人の弟子に入澤の道淨坊周防坊といふ二人あり大士此兩人と稱て宣ふやう我の經文よ任せて律宗を國賊といふ良觀上人はまた我を惡僧との、しる鎌倉府内の上下萬人の眼目たればいづれを善と譚る人なり良觀上人今度雨を禱給ふよし道理よりは神機又その證據より現證にしくとなし此度の雨請をもつて良觀上人と我と法の邪正を定むべし若七日の間に雨降は我この法華經を捨て良觀御坊の弟子と成証を敬て念佛すべし若又雨ふらずば良觀上人我の心をひるがへして来て我が弟子と成て一乘法華の行者と成五へむかゝ傳教と護命と守教僧都と弘法大師と雨の禱りに依て法の勝負を定めたる先例ありと宣へば兩人奮躍してよろこび極樂寺に歸り告げるに良觀上人も心得給ひさらせ一七日のうち大雨を降せ日蓮を我が弟子とすし鎌倉中の目を驚さんと百廿人の僧八面より列坐せしめ上人の中央の檀に登りて修法なり給ふ遠近の男女數千人その奇特を拜まんども、あまで居並んだり讀經の聲天よ轟き佛の響き地と動かし日蓮の丹誠も既に五日よ及べども雨の降へず氣色もなし松葉が谷より



月には江河の水濁りて、魚の炎天に焦れ草木の色をうりなひ井の水濁りて濁るを汲へば術もなく人の命も頼なき大早魃海の潮さへこのころの引潮有て満沙るくこれを天下の大事と見ゆるに若極樂寺の眞觀上人を御所に召れ貴僧年頃持戒の法力をもつて雨を八大龍王に請ひ民を潤し玉のれと懇に台命ありければ眞觀上人身の不肖なれども佛力法力をもつて頓て験を現し奉らんと御受をなし退出ありし尊くもまたいさましく見へにける此眞觀といふの大和國淡島の人にして姓の伴氏十一歳の時より志貴山と學問十三歳の時五辛肉食を斷り其頃戒行堅固の甚たかく幾回年關東に下向して律宗を弘む北條義時の子三男陸奥守重時ふかく此を信し極樂寺を建立す後に入道して其境内に別荘を一つらひ茲に念佛して終る其子長時業時いよく信仰すゆゑを以て今度此雨請の大任を仰つけて其名僧の徳を天下に知らしめんとといふ北條家一門の結構といはれける

極樂寺の靈山と號す眞言律宗にして南都西大寺の末寺なり其頃關東十三ヶ寺御所所のこの一にして七堂たかく變に變へ境内四十九院世よ目ざましき大寺なり今の衰廢して本堂と寺中の吉祥院のみ残り寺領今の九貫五百文を寄らるひかゝ眞觀上人は佛門前の西桑が谷といふ地に一院を建世に頼なき病人を聚め食料醫藥を施し別て癩病の前世の言ふはさて戒を授け念佛せしむ此時癩病人多くあつまるよし元平釋尊を見へたり世に靈寺と云

一は此ゆゑならんか

一輪の舟を見て天下の春と一り半杓の水を汲で大海の味を辨ふ淺きはもつて深きを知り小の以て大に譬へつべし茲は眞觀上人既して天下の台命を受けて靈山が崎にひろく檀を構へ大慈大悲の雲を招き甘霖の雨を四海よそ、がんものと六月十七日早天より修法始るよゝ高祖大士これをさし給ひこれ幸ひの時節なりとて眞觀上人の弟子に入澤の道淨坊周防坊といふ二人あり大士此兩人と指て宣ふやう我の經文を任せて律宗を國賊といふ眞觀上人はまた我を惡僧との、一は鎌倉府内の上下萬人心の眼目たればいづれを善と譚る人なり眞觀上人今度雨を禱給ふよし道理より辨據又その證據より現證にしくとなく此度の雨請をもつて眞觀上人と我と法の邪正を定むべし若七日の間に雨降ば我この法華經を捨て眞觀御坊の弟子と成証を敬て念佛すべし若又雨ふらずば眞觀上人我の心をひるがへして来て我が弟子と成て一乘法華の行者と成五へひかゝ傳教と護命と守教僧都と弘法大師と雨の禱りに依て法の勝負を定めたる先例ありと宣へば兩人奮躍しよろこび極樂寺に歸り告げけるに眞觀上人も心得給ひさらせ一七日のうちには大雨を降せ日鷹を我が弟子とよゝ鎌倉中の目を驚さんと百廿人の僧八面より列坐せしめ上人の中央の檀に登りて修法なり給ふ遠近の男女數千人その奇特を拜まんといふまで居並んだり續經の聲天よ轟き雲の響き地を動かし日蓮の丹誠も既に五日よ及べども雨の降べき氣色もなき松葉が谷よゝ



神使を立られ今日もはや第五日目雨のふらぬいかにまどき有ければ長観上人感あらしけ今ハ  
 法の真なりとこたへたりこれより泉が谷の多寶寺の僧百人 遊行またのみ晴雨經といふ御  
 經を聲の眼りに讀立て既に廿四日になりければ大士より今日 雨の日あり雨はいかこと問せ給  
 ふよ長観苦しき思をつき此上七日と日を延ければ大士その意 任せ給ふよ天下の雨晴といひま  
 た日蓮と法のあらそひ賭なりと近郷遠村にまでいひ傳へその 見物せんと追々増る救萬の  
 參詣金も爛れ石も焦る、六月の炎天雨氣絶たる一百餘日靈山 人の山崩るゝばかりの其中に  
 震も腹たる三百餘人こゝを一世の大事ぞと汗は五跡にながれても雨にあらね 靜に勝よしも  
 なき長観上人いかはせんとなげば處よ二十五日より大風吹出曇氣 卷て熱湯の如き風天遂よ  
 り吹ねるすにぞ鎌倉中の土煙虚空に高く吹立て眼鼻も明ぬ禱りの 場所汗にまぶれし砂埃人は誰  
 とも別がたくたがひに顔を見合て眼珠右眼左眼ばかりなり其時松葉が谷より高祖大士使をもつ  
 て賣給ふやうひかへ能因といふ破戒の僧あり早の時伊豫の國にありて雨前うたどて  
 天の川苗代水をせき下せ天降ります神ならば神一と 讀ければ大あめ忽ち降來り又姪女の和  
 樂式部といへる婦女も歌を詠てあめを降らせと聞かゝる破戒の能因縮亂の婦女わすか三十一字  
 とつかねてさへ易々あめと降りたり戒行堅固の御身と云三百餘人の丹誠助行二七日まで晴ても  
 わり一箇もふらざるはいかにぞや此をもつて思召せ三尺の小溝を踏得ざる者か二丈三丈の堀を

越べしや世に手易あめさへ降一ぬぬ人が一期の大事たる往生成佛ゆべーや尊無過上の法華經  
 の行人を惡しとねがす御身こそ此早を招き民の歡喜と成し給ひ一根本之千日萬日晴り給ふ共あ  
 めのふるべき道理なり其觀上人實の出家にて在すならや邪慢を棄て來給へ雨を降す法と佛に成  
 道とを欺へ奉らんいさゝらば末法應時の經力を見給へとて御弟子兩三人うち隨へ靈山が時より  
 西へ當り田邊が池といへる古池あり大士彼處へ赴き給ひ小板子に御經を書いたため田邊が淵に  
 これを流し御聲一づかよ讀經のじまりすでは淨經二の卷よいたる頃ほひ南の天に一點の雲起る  
 と見へしが忽ち大虛にひるがりてさしも烈しく吹たり一風も海上恰も錢の如くいと聲にわめ  
 ふりいで田畑山林一とノと樹茅草木石瓦うるほひ初し法のあめ三日三夜ふり續き人畜鳥獸  
 虫まで活かへりたる色見へて天下の喜び大方ならせ是全く八大龍王の擁護よて法華現證の利益  
 とぞ思れける

田邊の池の七里が濱より西へ入こと五町ばかり金洗澤の上なり今は聖て田となり中央り高  
 さ處よ一丈ばかりの石を建て題目を彫付たり此南の田の中に蛇枕といふ塚あり其池の跡  
 然どして物凄し鎌倉繁榮の頃この池に雨晴のこと往々東鑑に見へたり  
 魚は水と己が世界と見鏡鬼の水を火と見天人の琉璃と見人間のれを水と見る同一の水なれ  
 とも一水四見の道理にて其身の業によりこれを見るの姿同しからずとかや今正法現證の力をも



つて妙法の雨天下を潤せども信するものはすくなく轉るもの愈々多しとぞ茲に七月八日扇  
 谷淨光明寺の行教といへる住僧書をきたりぬ。松葉が谷に贈る大士これを披き見給ふ。法華經  
 の外一切諸經皆佛の妄語といひ念佛を無間といひ禪を天魔と罵り大小の戒を持つる國賊と演ら  
 る。よーこれ論外の佛敵ありと種々に惡口を雜へ喧嘩欲さの難問を審たりける大士。今は論判  
 反て亂妨の甚あらんとれば一り言ひ越されたる不審の味と自己の間答無益なり天下の決斷所  
 においてこれを答へん宜しく其とを研らるべしと返答す今日も十二日孟蘭盆會の御心構の成  
 に四條頼基訪奉りけふの悲母の忌日なりとて白米一斗油一箇錢一貫文を盆の供物と奉り此孟蘭  
 盆といふいかなると起りにはべるやと尋奉るに大士の扇を笏に取直しさればとよ往昔目蓮母  
 者の悲母一飯の施しを惜みて人よ與へず其上に與へたるよ一偽り給ひし慳貪の罪により五百條  
 其間餓鬼道に墮給ふその御子目蓮尊者佛の御弟子となり其悲母を救ひまらせよ一御經を見  
 へたるぞこれ孟蘭盆の始なりけるその餓鬼道三十六種あり食吐食水有財無財なとて心は難  
 堪ことをしらす是を救はんよの法華經の法味ならでん餘ひがたし御母妙法尼の靈魂も此法華  
 經の功德にて佛にならせ給ふべきよ一細々教化なり給ひけるか、る御物語の處へ入淨道淨坊お  
 はたす一尋きて我今朝より淨光明寺に遊びて在りよ此程聖人より相對の間答御斷ありと  
 ぞ行教和尚聖人の流義を逸々非難したるを一通となしてこれを御館にさし上ると一見せられた

るを我もかたの如く後生を願ふ心にてあれの潜かにそれを寫しもて参りぬこれ見給へどさし出  
 すと大士手に取りこれを讀で折淺々一法門の答へ方もあらざれを言すは愚かるものは隨りた  
 りと思ふべしさらばとて料紙硯の埃うち拂ひ澀まぬ筆の走り書さらりと認め終り是を入淨の  
 入道に渡り給ふ其前後の事ととと電光のごと一行教もこれを見て腹を消し口を締んで見へけ  
 るがいかんとも言すべしなく所詮我が力には悔ひがたしと廿二日問註所へ辭狀を差上げるやう近  
 來日蓮といふ惡信佛法の次第も辨へなく諸宗門を地獄と罵り愚昧の男女を誑らかし彌陀觀音の  
 像と火に燒川と深し劍戟其なき室の内にかくし持無頼の盜者をかたらひ聚め前年流罪御免  
 のうへい惡行をも止むべき筈の處左のゝくして亂妨以前に十倍し良觀上人百詰の時も天下の御禪  
 りの場所と知ながら再三弟子をつかひて嘲諷にねよび此早魃は禪念佛の事なれば長寺禪福  
 寺大佛殿等燒拂ひ諸宗の僧の頭を切ばあめ立處に降べしなと惡口雜言古へ守屋が惡道も僧の頭  
 をうれといひの老願のく此毒惡の日蓮が邪義を停止あらを佛法王法ともよさかへ天下の萬民  
 變堵よ住しその御仁徳を仰がんとを訴へける又良觀上人も一通をさしげてこれを欺り訴ふ其論  
 諸宗の木山本寺力かひなき瘦法師までその虎の威を假んとて我後れと訴へ出又ひひそかに北  
 條の御一門後室尼御前與方蘭女逆に取入て彼日蓮奴が此程の時頼重時御兩君を無間地獄と落た  
 りといひ諸宗の寺を燒拂ひかねて御師依の道隆禪師良觀上人の頭を切ると罵るよ一抔わらぬと



まで種々言上るおぞ奥方尼御前など驚きたまひそは勿体なきいひ録かき日蓮とかいふ僧を  
 しめめせやと婦女心のやるかたなく唯一筋は居士を悪み奉る此内外の譏奏つゆりて九月十日  
 日蓮問註所へ出よと召寄られ諸寺院よりの訴出たる其餘々逐一に尋問そのうへ先君時頼重時  
 兩代地獄に墮給ひいと云よその實にやと眼は角立て睨らまへば大士ついで世界を靡らす  
 日月さへ法華經の御敵とあらば惡道のがれがたし況て人間世界の國王大臣密著るべしや此法  
 門の御兩君世は存す頃よりの事よして今新清さし沙汰あらずこれまで我が説開きたる法門の  
 逸々皆これ如來の金言にして一言半句も日蓮が詞なり若それ諸宗の譏奏を信じ我を無實の輩  
 れこなは國に同士討の合戦起り果のまた異國より此國を征伐せんと必定なりこれ又大徳經講  
 師經の文にして強ち我が強言にあらせ自他の合戦もし起らば後悔その餘なかるべしと白洲に  
 打て逃たまへば列座の官吏顔見合せかへす詞もあらざりけり同十二日の朝立正安國論を拵  
 平左衛門尉が邸よいたり見參を請頼綱も向て宜ふやう一昨日問註所の見參悦び人まゐらせたり  
 日蓮出家とありより八萬法藏を聞らさ諸佛の本意を明らかめたり其實の妙法蓮華經の五字なり  
 しかるを上下萬人其正路を塞いで流布を妨ぐ諸天善神これを怒て國土を守護せず七難並起て四  
 海安穩ならせ先年立正安國論を造て執權最守殿は獻地も備へより今又十二年外國既よ日本を  
 觀ふよいたるまで其得に考がへたるが如くすこしも違はず日蓮の日本第一の忠臣なりいかなる

御賞美にも預るべき處却て快よからぬ見參に入事業外のいたりなり賞邊の當時威勢の御家にて  
 く天下の雇用輕からせとさく願くは此一巻をかさねて御館に奉り天下泰平の御仁政を扶け給へ  
 とて安國論を取りこれを頼綱に渡して歸り給ひけり

平左衛門尉頼綱は入道して果圓と號す執權北條時宗の近臣よして其御館と稱する程の  
 功なり時宗と、もに謀言を信ト大士を責懲したると度よ及女法敵の現罰これより二十六  
 年の後嫡男家綱家督を繼ぎその身の入道して猶天下の管領よて職を究め世に時めき其門前  
 を乗うちする人さへなかりける時に頼綱謀叛を企て執權貞時また將軍をさへ討じし我が二  
 男飯沼安房守を將軍になさんと膽太くも巧みけるを嫡子宗綱これを疎めければ大徳經の  
 端なりとて宗綱を殺さんとす宗綱逃て此事を貞時に言す是に依て父頼綱ならびに以沼の州  
 人を欺いて殿中によび寄不意を討てその親子を殺し一家の所領を没収し妻子眷屬は鎌倉を  
 追出す嫡子宗綱は忠あるに似たれども父の惡事を訴人せしに依て佐渡に流され其處にて死  
 せんとて現罰の的而斯の如し

唐土楚の國に平和といへる賢人あり或日荆山に遊んで一の石を拾ひ得たりこれを磨かば天下第  
 一の名玉となるべしとて國の厲王は獻す厲王玉人を召て見せしめたるにこれ玉あらず左も  
 なき石なりといふ厲王怒て國に多分の費をたてんとする事大罪なりとて左りの臣の結を切て由



中に追放つゝあまたの年月を経てその太子武王の世とありければ十和又此石をさへけて珠かん事を願ふにこれ玉にあらす國王を欺くなりとて又右りの脛の緒を切らる行歩かならず巖窟の洞のうちには彼の石を懐て泣きこゝに二十年武王崩トさせ給ひ其子文王の御代になり山中に御狩ありて阿らずカ和を見そのの深くこれを憐み給ひよしや玉ならずとも國王三代二十餘年の念願なればこれを協ひ得させんとて數方の黄金を費してこれを磨かしたるに不測にも類ひなき名玉となりて夜は御幸の車十七輛を照せゆる照車の玉といひ又市中には十二街の暗をか、やかす故に夜光のたまともよび後年秦の十五城と易たるも依て連城のたまともてはやしけるとかや今本化の大士妙法蓮華經と云閣浮提第一の名玉を懐て此日本東海に迹を垂一切衆生を憐み給ふ大慈大悲を夫ども知らず誰なす北條一門評定所に集會し日蓮上人を蔑り下を惱し佛法を事寄て國を亂さんとせる事その事輕からず締めるかせに爲り天下の大事を引起さん疾々刑罰を行ふべしと平左衛門頼綱是を承り兵士凡三百餘人小具足に身を堅め名起をさして押寄る時又大士御齡五十歳此日いかなる日ぞや文永八年九月十二日夕日も曇る中の刻松葉が谷の御花室に法弟檀方を聚め高座に在て説法真中俄かに難く人馬の物音外の方急度見渡し給へば平左衛門馬上にてありたの兵卒ひき懸ひ砂を蹴立て寄來り頼綱怒りのこゑをわらげやをれ日蓮日頃の修行その罪重く今日死罪に行ふべしと御館の殿命なるぞと喚ゆるよぞ堂々満たる群衆の衆脂上と下へと立候

と高祖大士の立像の釋尊と法華經一部を手早く取て懐中よれし入給ひ縁鼻ちかく立出給ひ大座懸綱に向て高聲よ宣ふやうあられもしろや平左衛門心のいたらざるか理の通せざるか天下の事々に在ながら事の邪正も問はず今見よく自界犯逆罪とて此國も同土討の軍始り他日侵逼とて異國より此國を賣らるべし不便くとわりける時伊和瀬大輔少輔坊齋藤三郎磯の五郎ひたくと諸寄齋藤三郎大士の襟筋捉へて高聲より引落と少輔坊立かゝつて懐中の御經引出し此相に及んで尙此經に未練を種すかと罵るがら第五の卷を以て大士の御顔を散々に打擲す雜兵どもと御經とわごとと種ちらし踏躑り板敷廣庭家の二三間ひさちららぬ處もな一高祖の完爾として杖も其五の卷にてわりけりと喚はり給へば物を言そなと手を捉脚を挽捕へてあらけなくも高祖大士を引立つゝ獲たる馬に鐵鎧を敷これにうち乗せ奉り前後左右に長刀拔連三百餘人いと嚴重に取かこみ武藏前司朝直の下知として其門前にまばし馬を繋ぎそれより魚町の四辻より出て小町通りを引渡ととの依相隊反鐵鎧の罪人にも過たり市中の男女日蓮が日來の荒言御當りてあつたの妻になりたるいと指さし誇り大略せばいと見物す若宮の小路よりちいで、鶴が岡新橋の前鳥居の邊りよて馬より下給ひしは誓固の武士ども驚きあつたり日蓮大士高聲に呼で宣ひけるやう各々見がせ給ふ子細のあらし最後は隣んで八幡大菩薩といふべき事ありとて本社を以



つたと白眼給ひいかに此八幡大菩薩は實の神かたゞの邪神なるか昔和氣の清麿が首刎られん  
 せせし時は一丈ばかりの月と現れ給ひ又傳教大師宇佐の實殿に法華經を讀給ひいかば感應有て  
 衆の法衣を布施し掛け給ひき今日遊り日本第一の行者あり其上今生に三災七難を拂ひ未來よ  
 の無間地獄を助けん爲に演る法門なり二千餘年のそのむかへ大聖世尊靈山に在いて此法華經の  
 宗法に弘まらん時その行者を守護なとて佛勅ありいかば天照八幡も其座に列なり法華經  
 の行者よれるそかなるま下きよ一三度まで掛ひを立ながら今此處よ出會給ひぬこそ不測なれ日  
 蓮今宵願切れて死ぬるならん難山淨土の釋尊の御前へ参り日本國の八幡こそ約束に違ひし邪神  
 ありとて一切て言上をせし若しそれを執々出は早急く現座の奇符を願へ給へとて又馬にう  
 ちのり給ひけり見物の男女聲々に神へ請へて無禮の荒言愈々正氣の沙汰よわらせと手を打て笑  
 ふもありまた鎌倉殿の氏神よかゝる事を言かけたるは恐しき僧かなと舌を巻てれとるゝもあり  
 これより夜よ入て長谷の小路を渡り御靈の社の前よいたる時各々まばり待せ給へとて馬をど  
 り御伴にありける熊王四郎を召て四遊金吾頼基の宅のこの朝の北なるぞ疾ゆきて我が最期の事  
 を告知らせよと有けれを熊王走りゆきて告知らせけるに金吾頼基かくと聞より兄弟四人徒歩  
 よてハハハ出此淺間敷御姿にあり給ひーを見て驚てありけるにぞ大士御聲まづかに日蓮の今夜  
 願を切られにまゐるなり此數年が間願ひ一奉これなり此法華世界にいての童子となる時の應に

標れ風となれを猫に噉はれ或は妻子の爲又と財寶の爲に身を失ひーことい天地無常の數よりも  
 多し但し法華經の淨土には一度も身を捨しとなく日蓮實運身を生れて父母の孝行も心に足らず  
 願の思を頼する力なく今度願を法華經に奉りその功德を父母に供養し其餘りては我が弟子檀方  
 あ分配んと思ふなりとありければ四條頼基詞もなくされハ侍伴つかまつらんと今宵は死出の旗  
 經帷子を其身に纏ひ馬の口よ取絶り極樂寺の切通より七里が渡りうち出たり此渡り六町  
 一里にいて四十二町の渡り際南は海上漫とて夜の遠目に見かねとも安房上總にさへ向て北  
 の細村山とて小き山との打つゝ腹が筋干稻村よ似たり十二日の月の高ければ秋の天とて雲の  
 晴つかゝりつ定めなき御身のうへを感下つゝ手づから法衣を脱てれーいたゝさいかゝ御恩の  
 世なればとて七佛傳來の此法衣を血に穢す事恐れありとて路のはとりにさへ出たる松の下枝よ  
 うち掛給ひこれより馬の足掻はやく頼て津村にさへかゝる此村外に獨り住居の老婆ありけり  
 七十七に近くいて掛る島なき拾小舟たのみなき身をかこちつゝ前の年鎌倉の寺詣よはからず大  
 士の説法を聴聞し宿縁や厚かりけんそれより朝暮御題目の念らねと老朽なれとてそのゝちの鎌倉  
 へも歩行かなので有けるが今日も告る入相願行人の語るを聞に日蓮聖人は今宵固願に願切  
 ぬらんとて鎌倉の大路小路を引まわすとありけるにぞ老嫗のれとらき其のいかなる侍身の罪か  
 ぬらねども勿体ないかにせんせめて老後の思ひでに何をがな供養し奉らんとうち案上老の







手近き契應の背戸に實入し赤小豆もあれば此伴ひと心づき牡丹の花の赤豆餅それこそよければ  
 心にうなづき飯焚あるて折添る紫菜の煙りに泣老婆も小豆の餅を掛るさへ老と扶くる自在  
 羨ゆるを遅りと待はせに夜も稍深き往還人者たかく聞へつゝ松火提燈懸くくさしてらす  
 どそれと見るより老姐の狼狽赤豆の煮へす爲かたなく刺の節句の赤飯に祝ひ残りゝ胡麻鹽の煮  
 ければ握りし飯に細めつゝ折敷尋る間もなく鍋蓋の裏うちかへゝ胡麻の餅を盛ならへ路ばた  
 よろばひ出涙ながらに奉る大士のこれを見かへり給ひ供養於法師と回向ありてその志一を受給  
 ひけり今にいたつて九月十二日御首繼餅とて我が宗門に胡麻の餅を供する由來の期ぞ傳へける  
 されば腰越もはせなく越ゆる因漸の刑罪場名も畏るゝ龍の口道法近くなりよけり抑ふこの地  
 を龍の口といふ事はむかへ是より北よ當て深澤と云ふ周圍四十里の湖水ありこの間に恐龍すん  
 で人の子を取暇ふ此處に長者ありて五人の子とそれが爲に取暇われといひ傳ふ其故今に續り  
 て初瀬澤五塚長者屋敷の名あり時に人皇三十代欽明天皇の十年夏四月此津村の海上に露立雲  
 ひ沖合老をらく震動せしが頓て天晴海穩になりて孤島波の上よ涌出天より花降音樂さこへ  
 天女忽然としてこゝに天降り給ふ此の江の島辨財天これなり此時に彼の深澤の恐龍辨財天の眞  
 麗なる容色に迷ひ我が妻に語らばんとありけれバ辨財天女示して宜ふやう同ゝ非類の畜身あれ  
 ども我れの天竺無熱地ある婆娑羅國王第三の女にして八歳龍女の妹あり今年欽明帝十三年佛

初めて此國に渡る其を守護の爲此土は降臨なしたるなり汝は無道の惡龍よして人を暇ふ邪神な  
 り若その邪心をひるがへゝともに正法を守護なさい父の龍王に言て信毛の契りを結ぶべしとあ  
 りければ深澤の恐龍忽ち悪心を轉ト因漸の山上に迹をとめ龍口大明神と願れ江の島の本社と  
 相向ひ子女の方に鎮坐あすゆるこれを子女方明神とも稱するなり斯て江の島辨財天託宣有て龍  
 口明神のむかへ人を暇ひ餘習あり願くハ王法よ背き不忠不孝の罪人をバ此龍口の神前よて刑  
 罪を行なひ給へさせれば其血を吸て精力を増一佛法を守護一邪正一如の夫婦の神力を合て國土  
 を守るべしと夫より當國にハ此龍口明神の社の前を死罪場と定められ一事既に年久一されば龍  
 の口江の島の兩社の元來正法守護の爲にかねてこゝに鎮坐ましますを其神前に正法弘道の行者  
 を引居たりと不思議の中の不思議と思ひける期て見渡す前は平砂渺々として波間近き  
 欄さびしく結構へ幕縦横張渡一箭火を焚て磐固の武士うちかこみて見ければ四條頼基一僧  
 さ御願のはや唯今なりと泣ければ大士のかゝる御氣色もなくいかに殿原これほどの喜びを笑  
 へかゝさしもに日頃の約束をば違へ給ふかとありければ兵士ども立かゝり御馬よりひきさらし  
 敷皮のうへに居へ奉れば平左衛門違よへだて御馬をひかへ難兵四方を取固め既も絶なんたまの  
 結をつあぐよしあさ槍柵の外日朗日進日興日向四條池上荏原御身の子子歸依の男女南無妙法  
 蓮華經南無妙法蓮華經と唱ふる聲も涙よくもり身の置處なき愛國難苦今やと見る間に下知の眼



刀子依智の三郎直重の著て開ゆる三尺二寸の蛇脚丸と云つたは、願摩降伏の各剣を抜放し玉置  
 又尖に水うち澀き後後に立廻りてありけるが此時三郎直重何思ひけん小腰を屈め涙をすくりに  
 かよ日蓮御坊より召せ御身の徳の出家なりとさく強盜夜討の罪もなく味反殺害の科はあら  
 唯新法の題目を弘めんと諸宗を誇り給ふにより唯今命よれよなれ此直重も給はや五十いかよ  
 天下の嚴命なればとて老前近き身を以て佛法弘通の御身を切も罪いと深く憂ゆるを今日より  
 心有て念佛無間の法門を罷めその題目を樂しむ、奉行よ言譯我が身に替ても命を救へん世上に  
 罪なき御身なるをいかで御救あからんやとありければ大士御後を見かへり給ひ法華經の御爲に  
 身を棄んことの日來月來思ひ儲けたる事あり今身首を捨て佛果を得るならん砂に金を換石よ  
 玉を商へるよ似たるのと陶居たり大磐石ゆるぐ氣色は見へざりれり三郎直重是非もなりと立  
 揚既に斯よと見へける折から辰前より空一面にかき曇り須彌山をも踏倒すべき大風塵の如き層  
 を巻て持來り天地俄に鳴動し洪波激て山より高く天に霹靂地に震動堅牢地神も身を怒らし給ひ  
 けん今や大地も碎くるばかり立列ねたる松火提燈燈火も一時に滅て眞の開さにも嚴重に構へた  
 る柵の行馬も打倒れ幕の虚空に火とんで白龍天を駈るよ似たりかゝる處に江の島の方より満月  
 の如き光り物鞠のごとく飛出て辰巳より戌亥のかたに光渡り照風に暗き鳥梅の夜も天地かゝや  
 さ哉の如し三郎直重たくれとと太刀振揚て丁とうては蛇脚の名劍こといかに朽木の如く鋤根よ

り三段よ折て飛散たり平左衛門と姉とて三百餘人の兵士色もうるたへ畏れて高遁し十段ばか  
 り逃退にぞ高祖大士御聖たかくいかよ人々かゝる大罪人を捨ていつくへか退給ふを夜も明なば  
 見苦しかるよしいそぎし、頭打給へしよ一招き給へきも懼て近寄ものもなし斯て風和らき雨も  
 降り夜とほのしと明わたる平左衛門この不測に畏れ日蓮が預切がたきよし馬を飛せて註進  
 と又鎌倉御所にたいても殿中屋鳴震動たり事ならねこれ日蓮を害するもあならんと身の毛立  
 てたそろしかりかや日蓮が命助けよとの願命に信濃判官入道親正畏まつて筆追取御下知の  
 御守取御館に大牲物これあり日蓮法師許すべからざるよ、南條七郎をもつて仰出さるよとぞ  
 驚たりける南條七郎赦免の状をさしわけ一報あて、飛が如くよ馳たりしが七里が濱の中央金洗  
 川の川邊よて彼の圓通よりの使者に行合て日蓮上人死罪赦免の状を渡す夫より此川を今に行合  
 川と喚なせり

龍の口御法難の靈蹟寂光山龍口寺と號す妙典寺東漸寺勤行寺本成寺本龍寺法源寺常立寺本  
 四寺の八箇寺これを輪番す毎年九月十二日は御大法會と稱し江戸をへつめ遠村近郷より群  
 衆の參詣稻麻のごと一夜半子丑の間御法會勤持品の訓讀又禮讚あり香樂を奏して初麻の餅  
 を獻賜すしか一風雨雷電の響今音響管絃の聲となる聖婆即寂光實に廣宣流布の時節なりと  
 龍の口寺建立の傳じ





龍の口御赦免  
 状袖ヶ浦行合  
 川の靈蹟



高直大士  
 固頼龍口  
 神上灘